



握って、昼食を届けに行く図。子どもは紐で繋がれた亀を引き連れている。田圃の中では笠を被った数人が腰をかがめて作業をしている。あぜ道では男が二人、しゃがんで休んでいる。笠を被った人々は白い○の連なりのように見える。

1339 田植図 (佐野美術館)

●肉筆画「桜に鷲図」(「桜花と鷲の図」とも。

絹本着色一幅。八十四老叢筆。印葛しか。97.2×45.7 鎌倉国宝館：氏家浮世絵コレクション蔵)

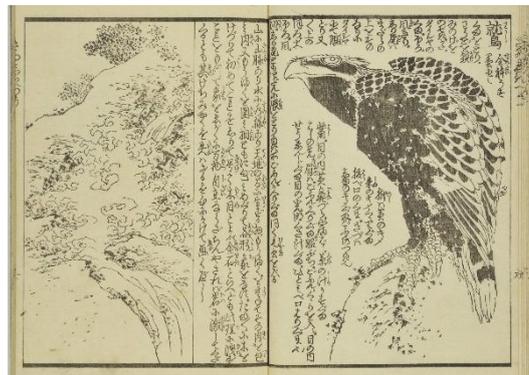
※湧き水の流れる岸壁に立つ鷲の背後に八重桜が咲いている図。森治判長大判シリーズには「桜に鷹」図 (p 625) がある。

1340 桜に鷲図 (氏家浮世絵コレクション)

●肉筆画「雪中鷲図」(紙本着色一幅。八十四老叢筆。印葛しか。118.5×54.0 滴水軒記念文化振興財団蔵)

※雪を被った老木に鋭い爪を立ててとまり、虚空を鋭く見つめる大鷲の図。

1341 雪中鷲図 (滴水軒記念文化振興財団)



1342 『画本彩色通』 (大英博物館)

※『画本彩色通』初編 (弘化5年正月：1848) で、鷲の描き方を解説している。

●肉筆画「南瓜花群虫図」(絹本着色一幅。八十四老叢筆。印葛しか。37.7×68.5 すみだ北斎美術館蔵)



1343 南瓜花群虫図 (すみだ北斎美術館)



1344 エミール・ガレ「花器・バツタ」 (サントリー美術館)

※黄色の地漬しを背景に、南瓜の弦が図の左下から右上に伸び、根本近くには赤い花が咲いている。茎には芋虫が這い、その先にはカナブンが飛んでいる。右下にはキリギリスやカマキリ、イナゴなどが描かれ、図の左上の空中には、蛇やトンボが飛んでいる。ジャポニズムとして、エミール・ガレ(1846～1904)の花器の模様「バッタ」に影響したともいわれる(サントリー美術館蔵)。

●肉筆画「雪中張飛図」(「雪中中国武人図」とも。絹本着色一幅。 齢八十四歳画狂老人卍筆。印葛しか。132.6×43.9 鎌倉国宝館：氏家浮世絵コレクション蔵)

※張飛は、三国時代の蜀漢の武将。劉備を関羽と共に助け、魏・呉と戦ったが、呉への討伐の途中、部下によって暗殺された。

※雪中に笠をかざして天空を見据えている図。『三国志』の張飛ではなく『水滸伝』の豹子頭林冲とする説あり。



1345 雪中張飛図 (氏家浮世絵コレクション)

●肉筆画「猿橋橋上角兵衛獅子」(絹本着色一幅。八十四老人卍筆。印葛しか。97.4×35.6 北斎館蔵)

※猿橋は、山梨県大月市猿橋町の桂川にかかる刎橋。橋下が深すぎて桁だけでは組めないのので、刎ね木と桁を何重にも組み合わせて支えた橋。その橋を渡る三人の角兵衛獅子たちと、太鼓の男と笛の男の一行。

●肉筆画「炭火」(横判着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか)

※「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」(大正8年：1919)の図録(大正9年：1920)によれば、京都 福田浅次郎氏所蔵」となっている。

※三脚の丸火鉢に炭が縦に組まれ、脇に薬缶が乗せられている。火鉢の縁に手を掛けている禿はお多福顔。側にいる花魁は右手を火鉢の縁に掛け、立膝で、左手に持った本を左頬に当てた姿、中着の袖や襟はチリチリに描かれる。

●扇面画「四つの鳥居」(「樹木に鳥居図」とも。紙本着色扇面一面。八十四老卍筆。印富士の形。上弦46.2 下弦22.5×14.6 フリーア美術館蔵)

※十面の扇画帖の一。巨木の前の四つの赤い鳥居を墨絵風に描く。同様の画趣は「山水図巻」注(天保元年～5年(1830～34)。卷子本一卷。紙本淡彩墨絵風全9図。26.5×595.0)にも描かれる。

注)「山水図巻」：門人布川一則(北嶺)に画手本として描き与えたもの(制作年不明)。

●肉筆画「米俵に鼠図」(絹本着色一面。もと掛軸。八十四老卍筆。印葛しか。91.4×30.0 フリーア美術館蔵)

※積み上げられた米俵によじ登る一匹の黒鼠。下からよじ登ろうとしている六匹の白鼠が描かれる。

1346 米俵に鼠図 (フリーア美術館：複製)

●肉筆画「夕顔棚納涼」(紙本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。101.2×28.8 北斎館蔵)





※夕顔の棚の下で、上半身裸の女が煙管を銜え、夕顔棚の柵に左手をかけ、右手に菊が描かれた団扇を持っている。足元には上半身裸の男が座って、団扇の風を受けている。足元には、虫よけの除虫菊などを播るすりこぎ棒とすり鉢がある。

●肉筆画「日の出と双兔」（紙本着色一幅。天保十四年癸卯年元旦卯之中刻 八十四老卅筆。印葛しか。85.0×29.6。個人蔵）

1347 日の出と双兔 (blog.goo.ne.jp より転載)

●肉筆画「田園春景図」（絹本着色一幅。八十四老卅筆。印葛しか。99.3×31.8 フリーア美術館蔵）

※濃彩図。高く伸びた先端に豊かな葉を付けた木の背後には、満開の桜の木がある。その向こうには頂に雪を残した山が描かれる。

●肉筆画「暁の富士」（絹本着色一幅。八十四老卅筆。印葛しか。

42.0×52.3 個人蔵）

※雪を被る富士が淡緑色で描かれ、富士の裾は緑の点苔で、裾野の樹木や畑も緑に描かれる。

●肉筆画「念仏鬼図」（紙本着色一幅。（八）十老卅筆。印葛しか。101.9×28.5 すみだ北斎美術館蔵。

※僧衣を着た赤鬼が坐っている前に「藤娘」を描いた大津絵と鉦が置かれている。大津絵の「鬼の寒念仏」を意識したもの。落款は八の字が消えている。

●扇面画「西行法師図」（「景色を眺める旅人」とも。紙本着色扇面一面。八十四老卅筆。印富士の形。大英博物館蔵）。※『2005 北斎展図録』 p 41 による。14.2×44.6

【以下、天保年間】

前北斎為一、北斎改为一、前北斎、画狂老人卅、卅、前北斎卅、葛飾北斎、北斎、春朗
 (天明 8 年～9 年「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」の後摺判に春朗号をそのまま用いる) 印不染居、ふしのやま、葛しか、富士の形

●絵手本『北斎画譜』上巻（天保元年～5 年〈1830～34〉。中巻は嘉永 1 年、下巻は嘉永 2 年（1849）。全三冊。墨摺。前北斎為一筆。永楽屋東四郎版。22.8×15.8 山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）

※文政 2 年刊『北斎画式』（21 図）に図を追加して改題改刷したもの。

●書画帖「羅漢図」（天保元年～5 年〈1830～34〉。北斎改为一筆。印ふしのやま。27.5×43.4 石洞美術館蔵）

※200 名の作を集めた 4 帖仕立ての書画帖中の一図。白い袈裟、墨染の僧衣の羅漢が座って足に灸をすえながら虚空を見上げている。前に線香一本を立てた香炉と払子、艾を包んだ紙などが置かれている。羅漢の背後の円形のようなものは光背か月か不明。

※『新北斎展図録』（P336）には次の解説がある。「この画帖には、北斎と関わりのあつ

た大田南畝、石川六樹園 (1754～1830)、
 鋏形蕙斎 (1764～1824)、十辺舎一九 (1765
 ～1831)、曲亭馬琴、芍薬亭長根 (1767～
 1845)、などの作品の他、北斎門人の蹄齋
 北馬 (1771～1844)、柳々居辰斎 (生没年不
 詳) の作品が収められており、それらの作
 品を眺めていると、北斎が生きた時代の息
 吹を感じる事ができる」



1348 羅漢図 (石洞美術館)

●掛物絵「日の出に鷹」(「日の出の鷹」とも。天保元年～5年〈1830～34〉)。印不染居。
 若狭屋与市版。日本浮世絵博物館蔵)



※松の老木に鋭い爪を立ててとまり、空を見上げる鷹の顔の向こうに大きな日の出が描かれる。

1349 日の出に鷹 (日本浮世絵博物館: douousato.or.jpより複製)

●錦絵「布さらし」(天保元年～5年〈1830～34〉)。小短冊判。前北斎為一筆。35.0×6.6 大英博物館蔵)

※被り物の女が布を川に晒している図。

●肉筆画「寒山拾得図」(天保元年～5年〈1830～34〉)。絹本着色一幅。前北斎為一筆。印葛しか。33.0×52.2 すみだ北斎美術館蔵)

※寒山と拾得は、中国唐時代の道士で、浙江省の天台山近くに住み、寒山は文殊菩薩の化身、拾得は普賢菩薩の化身といわれる。図は、寒山が経巻を腰の竹筒に入れ、箒で紅葉を集め、拾得が塵取り



を構えている。漢画風の絵。為一時代の数少ない肉筆画。

1350 寒山拾得図 (すみだ北斎美術館)

●肉筆画「山水図巻」(天保元年～5年〈1830～34〉)。紙本卷子本淡彩一卷。墨絵風。全9図。26.5×595.0 島根県立美術館:永田コレクション蔵・府川家資料)

※門人府川一則(北嶺:別号北岑 1824～34)に絵手本として与えたもの。茅葺の村落風景が墨絵風に多く描かれる。図によって横図であったり縦図であったりして統一されていない。巻子の裏に北岑の子の俊五郎(二代目一則)が「山水 此巻物は父北嶺が師葛飾北斎先生に揮毫を乞ひ得たるものにして家に伝ふる物なり」と記している。

●錦絵『江戸八景』(天保元年～5年〈1830～34〉)。小判八枚揃。前北斎為一画。赤松屋庄太郎版。各平均11.7×16.1 島根県立美術館:永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵)

※額装の縁取りをして描いている。図の右上の丸枠に画題が記される。版元印は「中」の縦棒の下の左右に点が記されたもの。図は藍を基調に、俯瞰的な景色となっている。元は長方形の紙の片方に小判の大きさに摺られたもので、「極製御菓子」と書かれた御菓子の袋だったものが、絵の部分だけ切り取られて残ったものとされる。

☆〈隅田落雁〉

※図の左下の茶屋の床几で休む人がいる。その前の隅田川には対岸への渡し船に大勢が乗っている。対岸にも茶屋らしき家があり、その背後の小高い丘のような土手に人が歩いている。紅葉の色づく夕方の空には雁が群れ飛んでいる。

☆〈御殿山帰帆〉

※桜咲く御殿山の下ごてんやまの民家の先には海が広がり、数隻の帆船が浮かんでいる。

☆〈佃島夕照〉

※図の手前には帆かけ船のマストが数本見え、その先には佃島つくだじまの民家と入り江が広がっている。

☆〈吉原夜雨〉

※吉原よしわらに続く土手から隙間なく並ぶ遊郭ゆうかくの屋根が続く。雨の夜空は深い藍色で描かれる。

☆〈不忍秋月〉

※東叡山とういざんの前の不忍しのぼずの池の向こうに大きな月が浮かんでいる。

☆〈両国暮雪〉（太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※隅田川に架かる両国橋りょうこくばしには大名行列と思われる一行が渡っている。こちら側の民家も対岸の民家も屋根に雪が積もり、橋の下を通り抜ける屋根船やねぶねの屋根にも雪が被る。

1351 両国暮雪（日本浮世絵博物館）



☆〈葵岡晴嵐〉

※葵岡あおいがわは、現在の東京都港区虎ノ門辺で、溜池ためいけの堰から流れる滝と、その脇の土手の坂道を往来する人々が描かれる。同画趣は『諸国瀧廻り』（天保4年：1833）の〈東都葵ヶ岡の瀧〉でも描かれる。

☆〈浅草晩鐘〉

※浅草寺せんそうじの屋根屋根と五重塔ふかんできを俯瞰的に描く。図の右には隅田川に架かる吾妻橋あづまばしが見える。

●錦絵「信州諏防（ママ）湖水氷渡」（天保4年～5年〈1833～34〉）。長大判注。前北斎為一筆。版元不明。東京国立博物館蔵。重要美術品）

※諏訪湖すわいこ前面に氷が張った湖面をジグザグに行き来する人々が描かれ、その構図に合わせて左に浮城うきしろといわれた高島城が描かれ、さらに背景に南アルプスの向こうに雪を被った富士山が見える。

1352 信州諏訪湖水氷渡（東京国立博物館）



注)長大判：大判 (B4 に近い大きさ) を縦にして、更に上部に小判 (19.5×13.0) を横にして継ぎ足した大きさ。

●錦絵『詩哥写真鏡』(天保4年～5年〈1833～34〉)。縦長大判錦絵揃物。10枚続。前北斎為一筆。森屋治兵衛版。各平均50.0×22.5 全10図ケルン美術館蔵)

☆〈少年行〉50.3×22.7 すみだ北斎美術館/ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション/城西大学水田美術館/大英博物館/東京国立博物館/中右コレクション/日本浮世絵博物館/アレク・メリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)



※唐の詩人・崔国輔の五言絶句詩「長楽少年行」注 (遺却珊瑚鞭/白馬驕不行/章台折楊柳/春日路傍情) からの着想。若者が長安の花街に白馬で繰り出した帰り、珊瑚の鞭を忘れたのを思いだし、柳の一枝を折って鞭の代わりにしたという故事に取材。柳の木のある曲がりくねった道を白馬に乗り右手に柳の枝を持って帰り道を行く様子を描く。行く先の土手では笠を被った男が座って釣り竿を垂れている。

注) 少年行：意識：珊瑚の鞭を無くした/白馬はいきりたてて先へ行かない/遊郭の柳を折って鞭とした/春の日、帰り道、遊女を思う。

1353 少年行 (日本浮世絵博物館)

☆〈白楽天〉51.5×23.4 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館/アレク・メリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

1354 白楽天 (日本浮世絵博物館)

※謡曲「白楽天」からの取材。中唐の詩人・白楽天 (772～846) が日本の知恵を計るよう命を受け、船で日本に渡ったところ、それを迎えた住吉明神が漁老に姿を変え問答を行った。白楽天は「青苔衣をおびて巖の肩にかかり、白雲帯に似て山の腰を回る」と問いかけたところ、漁老は即座に「苔衣著たる巖はさもなくて衣著ぬ山の帯をすめるかな」と和歌で答えたので、白楽天はその才能に驚き、正体を明かした住吉明神に勧められて帰国したという筋書き。図は背景に漢画風の峨々たる山に帯のように取り巻いた白雲を描く。白楽天が、海の岸边から下の岩場で釣り糸を垂れる漁老に問いかけている図。



☆〈李白〉50.9×22.9 大英博物館/千葉市美術館/ベルリン東洋美術館/ホノルル美術館・ミッチェナー・コレクション/中右コレクション/アレク・メリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※盛唐の詩人李白 (701～762) は、安禄山の乱 (755) を避け、廬山に逃げ込んだ際に廬山の瀑布を題材に七言絶句詩「日照香爐生紫煙 / 遥看瀑布挂長川 / 飛流直下三千尺 / 疑是銀河落九天 (望廬山瀑布)」を詠んだが、このエピソードを題材に李白が滝を見る図が描かれるようになった。嘉永2年 (1849) にも「李白観瀑図」を描いている。本図



は、右半分を使って垂直に落ちる滝を描き、その途中の山の台地から滝を覗き込むように見る李白を、落ちないように二人の童子が支えている。

※七言絶句の訳：日が香炉峰を照らして、景色が紫色に霞んでいる/遙か遠くには、瀧が天に長い川をかけたように見える/瀧の飛ぶように早い流れは、真直ぐ三千尺下に流れ落ちている/それは天の川が流れ落ちてきたかのように思えるほどだ)

1355 李白 (千葉市美術館)

☆〈清少納言〉52.3×23.1 ホノルル美術館:ミッチェナー・コレクション/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/アレン・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※清少納言の和歌「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも 世に逢坂の関はゆるさじ」からの着想であるが、これは『史記』の「猛嘗君伝」にある函谷関の故事に由来する。斉の猛嘗君が秦王に殺されそうになるのを悟り、函谷関の門まで逃げたが、この門は朝に鶏が鳴くまで閉じられているため、鶏の鳴き真似をしたところ、付近の鶏も一斉に鳴いたので、門が開けられ、無事逃げる事が出来たというもの。

図では、木の上に登って門の外を眺める男が描かれているので、逃げおおせた猛嘗君を見ていると思われる。その下で門の鍵を閉めようとしている男と、時を知らせる太鼓と鉢をもつ男が描かれる。その脇の屏の屋根には二羽の鶏がいる。1356 清少納言 (日本浮世絵博物館)



☆〈春道のつらき〉52.4×23.7 ホノルル美術館:ミッチェナー・コ

レクション /大英博物館/城西大学水田美術館/ 東京国立博物館/アレン・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コレクション/:ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵)

※春道列樹の「山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり」(古今和歌集) の和歌が題材となっている。従者を随えて橋の上に佇み、飛鳥川の流れを見つめる列樹を取り囲むように山里の風景が描かれる。

1357 春道のつらき (東京国立博物館)



☆〈安倍の仲麿〉52.2×22.9 ホノルル美術館:ミッチェナー・コレクション/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/大英博物館/日本浮世絵博物館/アレン・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コ

レクション/ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵) ※安倍仲麻呂は、養老元年(717)に遣唐使として唐の長安に渡り玄宗皇帝に20年仕えたが、帰国を許されず、更に30年後に漸く帰国の途についたが、暴風に遭い、願い叶わず再び唐に仕えて770年に73歳で没した。図では、

仲麻呂の有名な和歌「^{あま}天の原^{はら}ふりさけ見れば^{かすが}春日なる^{みかさ}三笠の山に出でし月かも」に詠まれた望郷の思いを、全体の藍色を基調にした色合いの中で、建物の露台から月を眺める姿で描いている。

1358 安倍の仲麿（日本浮世絵博物館）



☆〈^{ありおらのかりひら}在原業平〉 52.3×23.2 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション / ベルリン東洋美術館 / すみだ北斎美術館 / 東京国立博物館 / アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵



1359 在原業平（すみだ北斎美術館）

※月下に砦を打つ母子と傍に立つ男。かなたには浅草寺と思われる寺

と飛来する雁の群れ。砦と雁は郷愁の象徴となっている題材。浅草は古紙の再製のための紙すき業の者が多く、その再生紙は安価な浅草紙と呼ばれた。

☆〈^{とあるのおとど}融大臣〉 49.8×23.1 ベルリン東洋美術館 / 大英博物館 / ホノ賀茂川縁ル美術館：ミッチェナー・コレクション / 東京国立博物館 / アレン・メモリアル

美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵

※謡曲「融」を題材にしたもの。左大臣^{みなもとのおとど}源融がに豪邸を建て、庭を奥州の塩釜の景観にし、毎日潮を汲み入れ魚貝を住まわせ、塩焼きの^{とまむ}苫屋も作り、煙をあげて楽しんだというもの。図は、三日月の見える夕暮れに広大な庭を供の者と散策する融の姿を描く。遠景に三日月、手前の近景には、木の枝にとまる三羽の鳥を描いている。

1360 融大臣（東京国立博物館）



☆〈^{とくきざり}木賊刈〉 52.0×23.6 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション / すみだ北斎美術館 / 東京国立博物館 / 大英博物館 / ギメ美術館 / 中右コレクション / ブリ

ュッセル王立美術歴史博物館蔵

※謡曲「木賊」からの取材。都の僧が、父を捜す松若を伴って信濃の国で木賊（砥草）を

刈って生活をする老人に逢い、その老人が松若の父であったと分る。老人は漸く会えた子とともに仏門に入ったというもの。多年生常緑シダ類の砥草で、茎が堅く、物を磨くのに使用する。図は、木賊を^{てんびんぼう}天秤棒の両側につけて担ぐ老農夫が橋の上を歩く。池には二羽の鴨がひっそりと浮かび、樹の蔭には月が出ている。全体に哀愁漂う趣となっている。

1361 木賊刈（すみだ北斎美術館）



☆〈無題〉（仮題「杜甫」「雪中人馬」「雪中の蘇東坡」「東坡騎驢」とも。51.6×23.0 ホノルル美術館:ミッチェル・コレクション / すみだ北斎美術館/フィッツウィリアム美術館/アレキ・メリアル美術館:マリ・エイズワース・コレクション/平木浮世絵美術館蔵)

※シリーズ中で無題の一枚。誰を描いたかは不明。唐宋八大家の一人、蘇東坡説や韓愈説もある。雪が降る中で、馬上の男が静かに雪を被った松の木側の家の屋根を眺めている。その後には伴の男がその主人を見上げている。

2017年『北斎一富士を超えて』展図録では、この絵を「杜甫」と題して、杜甫の友人が戦場に赴く際に、雪の岩崖から馬に乗って杜甫の家を眺めている図としている (p176)。

杜甫には五言律詩「送遠」がある。「帶甲滿天地 胡為君遠行
新朋盡一哭 鞍馬去孤城 草木歲月晚 関河霜雪清 別離已昨日
因見古人情」(筆者意識:甲冑を付けた兵士があちこちにいる。なのにどうして君は戦場に行くのか。友よ、二人してひとしきり声をあげて泣くことだ。君を乗せた馬は孤立したこの村を去る。草木も年月が経ち、関所と川に清らかに雪が降る。君と別れたのはや昨日のことになった。かつて江淹が友を送った詩にあるように、その思いと同じ思いがこみ上げる)



この図と同じ構図(左右反転している)を天保4年『唐詩選画本』六編卷之三に描いている。 1362 無題 (すみだ北斎美術館)

●錦絵「狂歌入戯画」(天保元年~5年<1830~34)。前北斎筆。森屋治兵衛版。ベルリン東洋美術館蔵)

※北斎は文政年間後期から天保4年(1844)にかけて『柳多留』に多くの川柳を入句させている。ここでは狂句の下に鳥羽絵風の戯画を描く。文化11年~文政元年<1814~18)にかけても「狂句入り戯画」がある。

☆〈素人義太夫〉

※三味線を弾く女房に合わせて浄瑠璃を唸る男。狂歌は「語り人が面白かるで聞人なし
女房に弾かせ鼻たらし語り)

☆〈借(ママ)し夜具〉

※「かしゃく」と描いた看板を二人の男が見上げている。側に浴衣を手にした女がいる。男の一人は手拭いを肩にしているので、三人とも湯屋に出かけるところか。

狂歌は「ほうづきのかん所をふく糸切歯 借し夜具を呵責と読んだ地獄むれ」

☆〈鍛冶屋〉

※鍛冶職人の一人は、立て膝で木槌を振り上げてやっところに挟んだ金板を叩いている。もう一人の職人は右足を跳ね上げ、両手で頭を抱えて立っている。狂歌は「宗親ハ狐が附イ
て名が高かし 立膝で打ッが鍛冶の亭主なり」

☆〈砧〉砧打つ職人に向かって侍が刀の柄に手をかけ。今にも斬りかからんとしている。

狂歌は「小夜砧大肌ぬぎとおもわれず/夜砧にびんたうち切る
さつま織り」

●錦絵「下手の鞠」（天保元年～4年〈1830～33〉。中判。前北斎筆。森屋治兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※『新北斎展図録』（2019年）では上記「狂歌入戯画」と画趣及び制作年が同じだが、この図を単独で掲載している。

※二人の男が蹴鞠をしているが、蹴りそこなって鞠は下にある。

1363 下手の鞠（島根県立美術館）



●錦絵「山本屋平吉版 大判武者絵シリーズ」（天保元年～5年〈1830～34〉。大判錦絵揃物。前北斎為一筆。山本屋平吉版。各平均 37.2×25.2）

※井上和雄氏『北斎』では天保2年（1831）頃の作としている。

※背景を藍色のみで描く、いわゆる地潰しの画法。現在5図が確認されている（2014『北斎クローズアップ I』）。

☆〈渡辺の源吾綱と猪の熊入道雷雲〉（東京国立博物館蔵）

※源吾綱は源融の子孫で源綱。通称渡辺源次。京都一条戻り橋で、「大江山の酒呑童子の話や、京都一条戻り橋で、源氏の名刀「髭切の太刀」で鬼の腕を切り落とした逸話で有名。當光寺（現東京都港区三田）で生まれたので、近くに「綱の手引き坂」などの地名が残る。渡辺の源吾綱が仰向けの雷雲に跨り刀を突き刺そうとしている。

1364 渡辺の源吾綱と猪の熊入道雷雲（東京国立博物館）



☆〈鎌倉の権五郎景政と鳥の海弥三郎保則〉（すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/太田記念美術館/島根県立美術館蔵）

※いずれも歌舞伎「暫」の役名。16歳の景政は後三年の役（1083～87）平氏として出陣、保則に右目を弓で射られるが、矢を抜かないまま保則を追いかけて倒す話に取材。

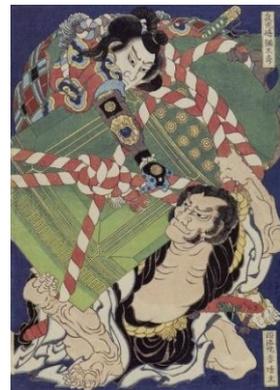
1365 鎌倉の権五郎景政 鳥の海弥三郎保則（日本浮世絵博物館）

☆〈鬼兒島弥太郎と西法院赤坊主〉

（山口県立萩美術館・浦上記念館/名古屋テレビ放送/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/ボストン美術館蔵）

※越後国林泉寺（上杉謙信ゆかりの寺）の釣鐘を奪い悪行を行った妖怪・西法院赤坊主と上杉謙信の家来で鬼兒島の異名を持つ豪傑兒島弥太郎が戦う場面。画面いっぱい二人の組みうちを描く。赤坊主が鐘を担ぎあげ、上から攻める弥太郎に防戦している。

1366 鬼小島弥太郎と西法院赤坊主（すみだ北斎美術館）





☆〈楠多門丸正重と八尾の別当常久〉（日本浮世絵博物館/東京国立博物館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館蔵）

※多門丸は楠木家として、八尾の別当一族と領土争いを繰り返した。別当常久が腰の刀の柄に手を掛けている背後から正重が石の手水鉢を持ちあげて押し掛かろうとしている。八尾別当常久の着物には、勝利を意味する毘沙門亀甲柄が施されている。

1367 楠多門丸正重と八尾の別当常久（日本浮世絵博物館）

☆〈大伴の真鳥と大友の宿禰兼道〉
（日本浮世絵博物館/東京国立博物館蔵）

※鎖鎌を手にした兼道に刀を持って上から襲いかかる真鳥。九州探題の真鳥の謀反を、大友正道と兼道父子が打倒した際、真鳥が自分の首を兼道に差し出したという逸話から、浄瑠璃や歌舞伎の演題となる。

1368 大伴の真鳥と大友の宿禰兼道（日本浮世絵博物館）



●錦絵「江都両国橋夕涼花火見物之図」（天保元年～5年〈1830～34〉）。大判錦絵。春朗画。萬屋吉成判。24.2×37.0 大英博物館/島根県立美術館/酒井コレクション/北斎館蔵）

※「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」（天明8年：1788～9年：1789。西村屋与八版）の後摺だが、花火が画面左に打ち上がる軌跡とその上に花のように広がるものから、画面中央上に星のように10個の火の玉が広がる図に変わっている。西村屋(永寿堂)から木を譲り受けて色板を変えて刊行したもの。⇒天明年間「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」（p52）。

●肉筆画「蘇鉄を見る巡礼」（天保6年～10〈1835～39〉）。紙本着色一幅。前北斎卍筆。118.3×35.5）

※巡礼の男が蘇鉄を見上げて休んでいる図。

●版下絵「八日朝打上ル浪」（版下絵。天保年間〈1830～44〉）。38.3×27.5 大英博物館蔵）

※浪が左下から右上に打ち上がり、空欄に「八日朝打上ル浪」の書き込みがある。

●肉筆画「小雀を狙う山かがし図」（紙本着色一幅 無款 28.6×81.1 天保年間〈1830～44〉）。鎌倉国宝館：氏家コレクション蔵）

1369 小雀を狙う山かがし図（氏家浮世絵コレクション）

●肉筆画「白蛇に雀図」（天保元年～5年〈1830～34〉）。絹本着色。額装。北斎改为一筆。

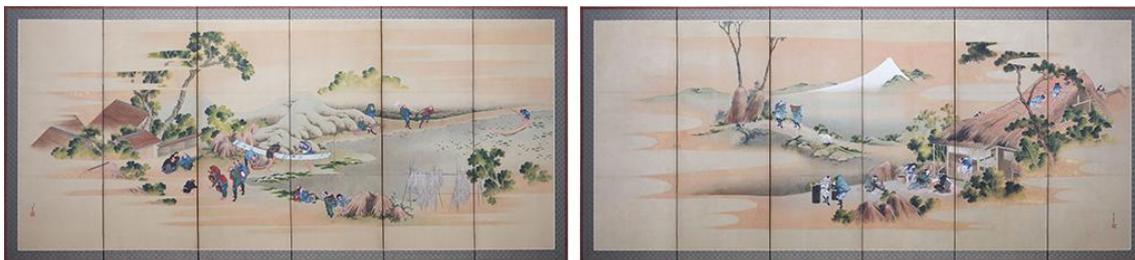
印 葛しか。98.7×28.4 北斎館蔵）

※鉞の柄の先に雀が一羽とまり、それを狙って白蛇が下から鉞の柄を上っている図。同画趣は『肉筆画帖』にもある。



●屏風絵「田園風俗図屏風」（「富士田園景図」とも。天保元年～5年〈1830～34〉）。紙本着色六曲一双。右隻：前北斎为一筆。印 葛しか。左隻：北斎改为一筆。印 葛しか。

各 150.7×350.8 フリーア美術館蔵)



1370 田園風俗図屏風 (フリーア美術館：複製)

※右隻には、右から、農家の屋根で茅葺を補修する 3 人の男、家の玄関口で荷物を抱える男、砧を打つ二人の女、荷物を背負った行商の男と天秤の荷物を下ろして話をしている男たち、小川に架かる橋の上には二人の旅人、橋の側には旅人を眺める白い犬などの田年風景が広がり、遠景に雪を被った白い富士が描かれる。

左隻には、右から、沼に船を浮かべ棹さしている男、沼の向こう側の道には行楽帰りの侍が扇をかざして、供の男と荷物を引き合せて持っている。布を洗い張りで幅を伸ばしている男と、布に刷毛で糊を塗っている男も描かれる。

●絵本『絵本長生殿』(色摺一冊。半紙本色摺。天保元年～弘化 5 年〈1830～48〉。版元不明。全 10 図。葛飾北斎他。国立国会図書館蔵) (『世界を魅了した鬼才絵師北斎』河出書房新社より)

※長生殿は、唐代に長安の南東、驪山に造営された華清宮内の宮殿名。白居易の『長恨歌』に詠われ、玄宗が楊貴妃を伴って遊んだ地として有名。清代に洪昇によって戯曲化された『長生殿』に因んで名付けたものであろう。半丁ごとに、浄瑠璃の曲の知られた詞章を載せ、その場面にふさわしい男女を描いたもの。各ページに五言絶句も載せる。第 10 図の「妹背山女庭訓」題の次ページに「北斎画」とあるのは後書か(「国立国会図書館デジタルコレクション」解説より)。



1371『絵本長生殿』〈恋女房染分手綱〉(国立国会図書館)

●肉筆画「魚貝図」(「魚貝静物図」とも。天保 11 年～嘉永 2 年〈1840～49〉。油彩キャンバス一幅。北斎画。印葛しか。30.2×38.0 個人蔵)



※平目と鰯と榮螺が絵付けの皿に乗せられている静物画。完璧な西洋画を思わせる作品。但し、落款はあるものの、あとから書かれたもので、北斎の死後に発明された絵具が使われているとして北斎の作かどうか疑問視する向きもある(『芸術新潮』1991 年 11 月号 p46)。お布施での作といわれる。

1372 魚貝図 (1998『東西の架け橋』展図録より)

●扇面画「雪中狐図」(天保年間 (1830～44)。紙本着色一幅。前北斎卍筆。印葛しか。

個人蔵)

※氷結した湖面に立つ氷の線に小さく描かれた狐が一匹、さらに、湖面の木に積もった雪の陰に一匹、雪の陰の背後に後ろ姿の狐が一匹描かれる。諏訪明神の御神渡りに囚んだ画材と思われる。

●肉筆画「**巖上の大鷲**」(天保6年～10年〈1835～39〉。絹本着色一幅。画狂老人卍筆。印葛しか。134.0×54.2 北斎館蔵)

※舞い落ちる紅葉を背景に、巖上で何かを見つめる大鷲の図。

1373 巖上の大鷲 (北斎館)



●肉筆画「**鬼法師図**」(天保10年～弘化2年〈1839～45〉。着色一幅。無款)

※唐傘を背負い、鉦を首から下げ、頭の禿げた頭の左の角が折れた赤鬼が、指をくわえて目尻の下がった目で物欲しそうに何かを見ている。黒い法衣をまとった鬼の前には奉加帳が置かれている。



1374 鬼法師図

(toyotane.web.fc2.comより転載)

●肉筆画「**鯉図**」(天保年間〈1830～44〉。紙本着色。無款。

55.8×25.7 個人蔵)

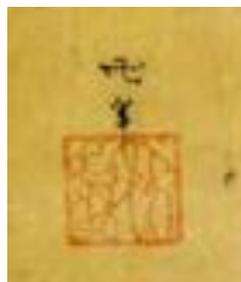
※伝北斎とされる。長大判で、滝の激しい水流の陰に姿を見せながら、垂直に滝を登る一匹の鯉を描く。天保5年(1834)頃の森治版長大判シリーズ「鯉の滝登り」(森屋治兵衛版。長大判錦絵)と似ているが、二匹の鯉を描いている。

1375 鯉図 (部分:1998年『東西の架け橋 北斎展図録』より転載)



●肉筆画「**布袋の図**」(天保年間〈1834～44〉。絹本着色一幅。卍筆。印ふしのやま。30.0×38.2 足立・六町ミュージアムフローラ蔵)

※上半身裸で腰に軍配団扇を挿し、大きな袋を広げている。袋の中には様々なめでたい小物が入っている。



1376 布袋の図 (六町ミュージアムフローラ)

右:落款

落款に卍のみを用いたのは天保5年(1834)頃からと考えられるので、一応、天保中期以降とするが、所蔵館の説明では文政2年(1819)、60歳頃の作品としているので、検討を要する。

●画稿「**日蓮波題目画稿**」(天保年間〈1830～44〉。下絵一枚。無款。22.7×39.2 ポストン美術館蔵)

※日蓮が船端から身を乗り出して、波の渦巻く海面に経の真言と思われる文字を書こうとしている図。佐渡に流された日蓮が日本海を渡る場面と思われる。波面の一部は朱色が施されている。絵の着色についての指示書きがなされている。

| |
|--|
| 天保15/弘化1(1844/12/2~) 甲辰 85歳 百姓、画狂老人記筆 齢八十五歳、画狂老人記 齢八十五歳、齢八十五歳画狂老人記 中寫鐵藏藤原為一、八十五老記、画狂老人記筆 試筆 八十五歳、八十五翁記、画狂老人記、印、富士の形、葛しか、一顆、之印：阿榮(47) |
|--|

- ◇1月、歌川国貞、二代目豊国（実は三代目）を襲名。
- ◇2月5日、四代目川柳没（67）。
- ◇2月26日、間宮林蔵没（70）。
- ◇3月11日、フランス船、琉球で通商を求める。
- ◇5月10日、江戸城本丸御殿（天守閣ではない）が炎上。
- ◇7月2日、オランダ軍艦が長崎入港。国王（1830~1844）の開国勸告を幕府に提示。
- ◇8月6日、蹄齋北馬没（74）。
- ◇11月頃、女義太夫が流行。
- ◇この年、鎌倉屋豊介子（芝居通）と斎藤月岑（町名主）の追考で写楽を阿波侯おかかえの能役者とした（『浮世絵類考』の追考）。

【長寿番付に入る】

★この年の長寿番付に、水口寿山の105歳、末吉石舟の101歳、花井白叟の98歳、大岡雲峯の80歳などと共に掲載される（檜崎宗重『北斎論』 p 338）。

この記事は弘化元年の『藤岡屋日記 第二巻』（p 463 藤岡屋由蔵記）の記事として「浮世絵文献資料館」でも紹介している。また、『武江年表』（斎藤月岑）弘化元年条（「国立国会デジタルライブラリー」126コマ目）にも記される。

★正月20日、高井鴻山宛書状に、本年は牛島神社開帳の額面制作、藤堂家襖絵などがあり、出発は3月半ば過ぎになるかという。

★2月頃、向島小梅村に阿榮と住む。2月29日の嵩山房への稿料受取によると『年譜』にある。更に本年後半に浅草寺前に住むか（斎藤月岑『増補浮世絵類考』による）。

★3月14日付、十八屋（日本橋にある小布施の豪商）宛てに、江戸の人形師松五郎は来年中旬にも應龍上納の見込みを告げ、二両を借りる依頼をする。

【二度目の小布施行きにお榮は伴ったか】

★3月、阿榮を伴い二度目の小布施村行き。高井鴻山宅の別荘をアトリエとして4月から約半年、東町屋台天井図（龍と鳳凰）を描く。その後、北斎のドラ孫の関係で侠客が小布施まで来て、阿榮まで関わりになるのを恐れ、先に阿榮を江戸に帰したという（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』p19 由良哲次：岩松院）。北斎も秋に江戸に戻る。

※荒井勉『北斎の隠し絵』によれば11月にお榮を伴い小布施に行き、年内に東町屋台天

井図（龍と鳳凰）を描いたとする（p 213）。

※お栄の小布施行きについては、林美一『お栄と英泉』（有光書房 1967年）で、弘化2年（1845）の北斎の小布施行きについての記載があるので、弘化2年条を参照のこと。また、久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』では、「北斎が娘・応為を伴って小布施に滞在したのは弘化二年（1845）から」としている（p 34）。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）

- ☆道下手な下女が荷になる己が尻 百性（歩くのが下手な下女は大きな尻が重荷になっている）
- ☆子の顔に乳にツメタイ女礼 百性（正月四日からの女の年始回りに連れた乳飲み子の顔が乳に冷たい）
- ☆雛ほどに喰ハぬ鍾馗や金太郎 百姓（大食らいの鍾馗や金太郎も雛飾りほど銭は食わない）
- ☆穴なし小町と一度きりの弁慶 百性（男と縁がなかった小野小町。一生に一度だけ女と出会った弁慶）
- ☆陰陽の馬鹿は小町と武蔵坊 百姓（男女の表裏を知らない馬鹿は小野小町と武蔵坊弁慶）
- ☆観音を出しに息子の妙智力 百性（浅草観音詣りと称して吉原通いの素晴らしさは観音妙智力の靈力か）

【自らの誕生の年月日を示す】

●肉筆画「大黒天図」（1月1日。紙本一幅。落款に「天保十五年甲辰子ノ月甲子ノ朔日子ノ刻 宝曆十庚辰年九月甲子ノ出生 画狂老人卅筆齡八十五歳 印富士の形」とあり）

※縦一尺八寸二分（約 74.2 cm）、横一尺（約 30.3 cm）の本図は、北斎自らが誕生の年月日（宝曆10年9月23日）を記したものとて貴重な画だが、現在所在不明である。米俵に右膝を乗せ、左足は地につけている。大国帽子を被り、右手に小槌を持ち、左手で大きな袋を担いでいる。袋は大黒天の背後に、仏像の光背のように丸い縁取りで描かれる、表情は穏やかでほほ笑んでいる。

1377 大黒天図（『HOKUSAI 画狂人北斎 緑青 VOL2』（『葛飾北斎傳』「上 一丁ウ」よりの転載）より）



※『HOKUSAI 画狂人北斎 緑青 VOL2』（マリア書房）には、次の記事と図がある（p 157）。

「(略)明治 33 年（1900）1 月、上野公園日本美術協会での小林文七所蔵品を中心とした北斎展カタログ第 190 図に本図と思しき記録がある。その後、昭和 11 年（1936）2 月「長春閣蔵品展観図録」（阪口覚編）に突如として写真掲載され、翌月大坂美術倶楽部で入札に供された。長春閣とは神戸川崎造船所の創始者川崎正蔵氏（1837～1912）。その後、橋崎宗重氏が『北斎論』（昭和 19 年）に本図写真を掲げ（筆者注：p 10～11）北斎の出生を論じるも、現在、作品の所在は不明」。

●東町祭屋台天井絵「龍図」（桐板着色。無款。123.0×126.5 小布施町東町蔵）

1378 東町祭屋台天井絵「龍図」

●東町祭屋台天井絵「鳳凰図」(桐板着色。無款。
123.0×126.5 小布施町東町蔵)

※この天井絵の裏に高井鴻山の息子辰二の次の証明書きがあるという。



「鳳凰ノ画北齋
卍老人ノ筆跡
予先人ヨリ親シ
ク聞所ナリ 今

ヤ落款ナキヲ以テ其事实ヲ茲ニ記ス 干時天保十五
庚辰注ノ歳也」(『北齋大鳳凰図—北齋小布施諸遺
作と高井鴻山の功績』(由良哲次：岩松院。平成
15年2月1日刊。p7 ルビは筆者)

注) 庚辰：甲辰の誤り。

1379 東町祭屋台天井絵「鳳凰図」

●肉筆画「龍図」(元旦。墨摺一幅。天保十五甲辰ノ元旦辰ノ刻
宝曆十庚辰出生齡八十五歳画狂老人卍 中寫鐵藏藤原為一筆。印
葛しか フリーア美術館蔵)

※画面一杯にとぐるを巻くように天空を飛翔する龍が描かれる。墨
の濃淡で描く。1999年イタリア・パラツォレ北齋展図録・巻頭ジャン
ル・カルツア氏論文掲載図版に掲載(久保田一洋『北齋娘 應為栄女集
p97 記事より)。

1380 龍図(伝フリーア美術館)



●絵手本「北齋女今川」(この頃か。『年譜』弘化元年(1844)
条には「本書はのち『絵本女今川』と改題される」とある。半紙本
墨摺一冊。見開き 23 図(口絵を除く)。永楽屋東四郎版。著者・
画工名不明。22.7×15.8 大英博物館/東京大学学術資産等アーカ
イブズ共用サーバ：教育学部図書室蔵)

1381『北齋女今川』(大英博物館)



※作画については「文政年間とみられる永
楽屋宛北齋書簡で本書について触れている
ことから、作画期は文政末から天保初年頃
とされている」(『ピーター・モース・コレクション北齋
図録』p138)という見方もある。

※見開き第3図に、狼が木に絡み付いて
体をねじりながら、頭にロウソクを3本

立てた女と対峙している図があり、「弘法大師修法図」（弘化4年）の構図に似ている。

「女今川」は、貞享4年（1687）に今川了俊の「今川状」を真似て、沢田きちが絵入り・かな書きで出した往来物（教訓書）。本書はさらにそれを真似たもの。「今川になぞらへて女子をいましむる制詞の條々」として様々な状況に対する戒めを説く。

●肉筆画「月見る虎図」（紙本着色一幅。八十五老叢筆。印富士の形。96.2×28.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※笹を踏み、後ろ脚を折って夜空の月を見る虎の図。図上部の月の右に見られる斑の線は、暈の目の跡と考えられている。

1382 月見る虎図（島根県立美術館）

●肉筆画「鼠と小槌図」（紙本着色一幅。画狂老人叢筆 齢八十五歳。印富士の形。88.8×28.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「月見る虎図」同様、背景を一面墨の濃淡で処理しているのは、この時代の特徴という。図は、大きな袋と小槌の側の二匹の鼠、袋の下にも一匹の鼠がいる。大黒天と、繁栄の象徴である鼠を描いたもの。



●肉筆画「鍾馗騎獅子図」（紙本着色一幅。画狂老人叢筆 齢八十五歳。印葛しか。118.2×57.8 出光美術館蔵）
1383 鍾馗騎獅子図（出光美術館）

※病防ぎの鍾馗が魔除けの獅子の背に乗り、鞭を使い急いで災いを除くために行く図。

※北斎は天保13年（1842）頃から魔除けのために獅子図を描くのを日課にしており、天保14年（1843）分の獅子図は、信州松代藩士の宮本慎助に与えた200余図が「日新除魔」として残されている。この中にも獅子と鍾馗の組み合わせが描かれたものがある。

●肉筆画稿「朱描鍾馗図」（画稿。紙本一幅淡彩。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※端午の節句に無病息災を祈って幟に描かれる朱色の鍾馗図の画稿。朱色は疱瘡除けとされた。弘化3年（1846）にも「朱描鍾馗図」（絹本一幅）がある。

●肉筆画「狐の嫁入図」（絹本着色一幅。画狂老人叢筆 齢八十五歳。印葛しか。96.2×35.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「狐の嫁入り」とは、日が差しているのに雨が降ることをいい、その時には狐たちが嫁入りの行列をしているという言い伝えがある。嫁入りによって子が増え、狐の好物の鼠が減り、その結果穀物の豊作を巡らすので、農家にとっては恵みの雨となるとされる。図は、下半分に農家の茅葺屋根の下で作業をする家族を描き、遠くの狐の行列に気づいていない様子。にわか雨に、白が濡れないように笠をかぶせる男。洗い張りを急いで家に取り込む



母親と子ども。武家装束の狐たちは静かに駕籠に乗せた花嫁を運んでいる。駕籠の周りには角隠しを被った女が数人いる。図上部左に薄く月が描かれる。



1384 狐の嫁入り図 (島根県立美術館)



- 肉筆画「雪中箭掘り図」(1月の筆始めの図と考えられている。「雪中箭狩」とも。紙本着色一幅。画狂老人卅試筆齡八十五歳。印)葛しか。132.4×42.4。北斎館〈個人蔵〉寄託)



※笠を被り鋏の先に箭を二つかけて肩に担ぎ、雪道を行く農夫の後姿の図。中国元代の『二十四孝』(郭居敬作)に登場する孟宗が題材とされる。孟宗が病気の母が食べたがった箭を探しに雪の竹林に行き、祈ったところ、箭が生えてきたという話をモチーフにしている。本図は、箭を掘り終えて帰路につくところ。

1385 雪中箭掘り図 (北斎館)

- 肉筆画「竹に雀図」(紙本着色一幅。八十五翁卅筆。印)一顆。59.4×32.3 北斎館蔵)

※図の左下から右上に向けて描かれた竹の中ほどで羽ばたく雀と、それに近づくもう一羽の雀。北斎は雀の頭と喉を朱色で描く。図の下には、八十翁雲峰の賛「緑竹娟々雨後新



秋風細々掃輕塵」(読み下しは筆者)がある。また、弘化4年(1847)に田町一丁目の八右衛門(北斎)

差出の文子(不明)宛の手紙が貼り付けられている。

弘化4年には浅草田町に住んでいたと思われるが、なぜこの手紙が貼り付けられているのか不明。 1386 竹に雀図(北斎館)

- 肉筆画「唐獅子図」(絹本着色・縮緬袱紗。画狂老人卅試筆齡八十五歳。印)葛しか。71.5×66.5 ポストン美術館・ビゲロー:コレクション)

1387 唐獅子図 (ポストン美術館)



※縮緬袷沙の中の円枠に頭を下にした唐獅子を描く。円枠の周囲は牡丹の花が描き込まれていて、応為が描いたともいわれる。

●肉筆画「端午の節句図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆。90.4×33.2 福田日本美術研究所蔵）

※龍が飾られた前立と、赤い鍔の兜が、立て飾り木に架けられ、その下の漏斗状の菖蒲包みに菖蒲が入れている。

1388 端午の節句図（福田日本美術研究所）



●肉筆画「旅僧小憩図」（紙本着色一幅。八十五老卅筆。印富士の形。個人蔵）

※旅装の僧侶が頬杖をついて、笠を手にして座り、物思いにふけて休んでいる。後ろに杖が置かれている。

●肉筆画「芋とききょう」（紙本着色額一面。画狂老人卅筆 齢八十五歳。印葛しか。17.0×22.4 砂子の里資料館蔵）

●肉筆画「逆筆注布袋図」（「寿布袋図」とも。紙本着色。画狂老人卅齢八十五歳。印葛しか。氏家コレクション蔵）

※布袋の右手でさし上げた壺から立ち上がる煙の先に大きく「寿」の文字が浮かぶ。脇に「延命宝貴」の書き入れがある。

注) 逆筆：筆の穂先から書き軸が後から付いていく描き方だが詳細は不明。一種の曲画。

文化7年～14年にも同様の「逆筆布袋図」（島根県立美術館蔵）がある。【文化年間】（p434）を参照。

●摺物「鏡餅と猩猩」（八十五老卅筆。印之印）

| | |
|-------------------|------------------------------------|
| 弘化2(1845) 乙巳 86 歳 | 八右衛門、百姓八右衛門、北斎為一卅老人八右衛門、 |
| 前北斎卅筆 齢八十六歳、 | 前北斎卅老人繡像、八十六叟卅、於深谷之 駅 画狂老人卅筆 齢 |
| 八十六歳、 | 八十六歳卅、画狂老人北斎八十六歳、画狂老人卅筆八十六歳、画狂老人卅筆 |
| 八十六歳 | 印 富士の形、應：阿栄(48) |

◇漂流民を乗せたアメリカ船が浦賀に入港、薪水を要求。

◇長崎にイギリス船入港。

◇1月24日、青山権田原（現東京都港区元赤坂2丁目辺）から出火し800人～900人の死者といわれる（青山大火）。

◇2月10日、芍薬亭長根没（98）

◇3月27日、伝馬町獄舎が火災。避難赦免の高野長英が戻らず脱走。

◇12代将軍家慶が向島百花園を訪れる。

◇藤田東湖が向島の水戸藩下屋敷に幽閉される。

◇『藤岡屋日記』第二巻「東辻君花の名寄」〈夜鷹の出没場所・善悪・名前・年齢を記したもの。半紙二枚摺の細見番附〉が出る。

○曲亭馬琴『新局玉石童子訓』（読本。『近世説美少年録』の続編。馬琴の口述によるもの未完）

★この頃、番場町（「牛嶋神社社伝」によると『年譜』で紹介）と、本所荒井町（現東京都墨田区本所地区だが詳細は不明）に住むか（『葛飾北斎伝』による）。本所荒井町は、『年譜』では、本所区議会議員袴田喜四郎の裏長屋であったという児玉蘭陵「北斎筆の悪魔降服」大正8年『錦絵』23号所収の説を引いている。

※2月28日付、嵩山房宛て書簡（画料受取の挨拶）に「荒井町」とある。

「一金三分 右者、万物絵本大全注之中編、三丁之画料に、慥に受取仕候、為念此之如に御座候、以上。」

荒井町

二月廿八

八右衛門

嵩山房様

御店衆中様」（『葛飾北斎伝』 p 237～238）

注）万物絵本大全：同本脚注には、「未詳。漆山天童稿本『絵本年表』の音訓目録に〈三ツ切本 二〉とのみ記すものが、これと関係あるか」とある。

同名の作品は、文政12年（1815）頃に書かれた下絵集『万物絵本大全』（未刊。真偽不明）がある。所在不明であったが、令和2年（2020）9月に大英博物館で発見された。ただし、約30年前のデッサン集の画料を弘化2年に受け取るとは考えにくいので、別作品か。⇒文政12年条参照。

★この頃、牛嶋神社（当時は「牛御前」と称された。現東京都墨田区向島1-4-5）辺に住むか（本所番場町かく「牛嶋神社社伝」によると『年譜』で紹介している）。現東京都墨田区東駒形1丁目と本所1丁目辺）。

★佐藤正持（号：北溟）の本年刊行の『合璧邪正訣』には「（略）今年已ニ八十六歳 イマタ眼鏡ヲ用ヒズシテ能細画ヲナス、近頃牛嶋ニ居セントスルニ、画工ニテハ住居ナリ難カリケレハ、百姓八右衛門ト成テ住居セシト、清武知ニ丹靈ノ送ル書札ニ載タリ、今東師（江戸の画工）、江府（江戸のこと）、大阪ノ浮世絵師、皆北斎カ涎ヲ嘗ム（略）」とあるという（『瀬木慎一の浮世絵談義』 p 121 及び『年譜』 p 138 による。ルビは筆者）。

【阿栄を伴い三度目の小布施行き】

★7月、阿栄を伴い小布施へ行くか（久保田一洋『北斎娘応為栄女集』 p 34 藝華書院）。※久保田一洋によれば、この時に初めて応為を伴ったとしている（同上著 p 34）。

※『高井鴻山小伝』（岩崎長思編 上高井郡教育会刊 昭和8年：1933）ではお栄の同道を弘化2年としている。

「弘化二年北斎再び訪ね来りし時、間もなく帰東を志す。鴻山其故を尋ねたるに『余は一女あり、之を東都に遺し置けり。余は彼女をして東都に独居せしむるに偲びず』と。鴻山因りて帰て其女を携へ来らむことを勧む。北斎諾して江戸に帰り、其娘を伴ひ来り高井家に寓せしむ。里人北斎の娘といへば奇麗なる若き娘ならんと噂し合へるに、連れ来るを

見れば六十位の老婆にて風姿甚だあがらず。其^{その}案外なるに驚く。名はお栄。画道に志し父を助け名声あり。お栄に一女あり注。鴻山其の世話をなし大に困りたりといふ」（国立国会図書館デジタルコレクションより。ルビは筆者による）。

注) 一女あり：誤り。但し、林美一『お栄と溪斎』（p63 有光書房 昭和42年）では、北斎のドラ孫を連れて行ったかもしれないとしている。しかし、この年孫は35歳位と思われる、お栄と同行するとは思われない。また、孫は天保8年（1837）頃に没したとも推定されている。

※林美一『お栄と溪斎英泉』（有光書房 昭和42年：1967）でも、同記事を引用して弘化2年の2度目の小布施行きとしている（P63）。

『小布施行きの謎』

※北斎とお栄の小布施行きについては、いくつかの記事があり、小布施での滞在期間を勘案しながら整理・検討の必要がある。本稿では、以下の小布施関連の記述をしているが、十分な検討をしなければならない。

(1) 天保13年（1842）9月、北斎小布施行き。高井^{たかいこうざん}鴻山と屋台天井絵の打ち合わせ。天保14年2月末まで滞在。

(2) 天保15年（1844年12月2日弘化に改元）3月、お栄を伴い小布施行き。東町^{ひがしまち}と上町の屋台天井絵を描く。11月10日まで滞在。11月22日、急遽小布施を去った詫状を書く。

(3) 弘化2年（1845）7月、お栄を伴い小布施行き上町^{かんまち}祭屋台天井絵を描く。弘化2年10月頃まで滞在。

(4) 嘉永元年（1848）4月、小布施行き。5月、上町^{かんまち}祭屋台天井絵完成。岩松院^{がんしょういん}天井画に着手。同年11月まで滞在。

但し、小布施行きには以下の見方もある。

☆天保2年～3年（1831～32）：飯島虚心『葛飾北斎伝』

☆天保2年～3年（1831～32）：織田一磨『北斎』（p135）帰路「八の字のふんばり強し夏の富士」を詠む。

☆天保2年～3年（1831～32）：野口米次郎『葛飾北斎』（P36～37）。

☆天保12年（1841）：菊池貞夫『日本の美術』第74号「北斎」年譜による。

☆嘉永元年（1848）5月、お栄を伴い小布施行き。岩松院の天井絵を描く。

☆嘉永元年（1848）10月、小布施行き。

★本所石原町に住むか。本所石原片町^{ほんじょういしはら}（内藤山城守下屋敷^{ないとうやましろうのかみ}敷。80歳の時に住む）より東の石原町（『和楽』2017年9月。10・11月号 p71掲載の「嘉永新鑄^{しんせん}本所絵図」による）。

●読本『絵本漢楚軍談』（1月。角書「訂正補刻」。二輯。二十冊。佐々木貞高^{ささきだてたか}（為永春水^{ためながしゅんすい}注）著。北斎为一^{いち}老人八右衛門^{はちゑもん}画。丁子屋^{ちようじや}平兵衛^{へいゑ}版。早稲田大学図書館蔵）初輯は天保14年（1843）10月に刊行。

注) 為永春水：既に天保14年（1843）2月に没しているので二輯で終わる。

【牛嶋神社の額絵復活】

●額絵「須佐之男命厄神退治之図」（板額着色一面。前北斎卅筆齡八十六歳。印富士の形。126.0×276.0 すみだ北斎美術館蔵・復原画）

※須佐之男命が厄神たちから病や凶事を起こさぬように誓約書を取っている図。

※牛嶋神社社伝によると、北斎は牛御前社（現牛嶋神社）に出向いて額絵を描くことを申し出たとされる（荒井勉『北斎の隠し絵』 p 212）。

幕府による各寺の開帳記録『開帳差免帳』（国立国会図書館デジタルコレクション・弘化2年「本所牛御前別当 天台宗最勝寺」条）によれば、同社の開帳は2月9日から60日間であった。北斎はこの画を描いた後、すぐに信州に旅立ったと思われる。

※牛嶋神社（東京都墨田区向島1-4-5）に奉納されたが関東大震災（1923）で焼失。明治43年、雑誌『国華』に掲載された白黒写真を分析し、墨田区と凸版印刷が共同で平成28年（2016）10月に復元し、平成28年11月22日に開館した「すみだ北斎美術館」で公開された。



1389 須佐之男命厄神退治之図（牛嶋神社旧蔵：すみだ北斎美術館（復元図）

※この図について、鈴木則子が『「須佐之男命厄神退治之図」（葛飾北斎画）に描かれた病』（『浮世絵芸術』2018 N0175）で、「衆人に見せるための絵馬であるからには、当時の参詣者には様々な疫鬼達がどのような病気を象徴しているのか、見ればすぐに理解しえたはずだ。つまり、絵馬に描かれている病は弘化二年当時の江戸の庶民にとって身近な病であったり、恐れていた病であっただろう」（p6）という前提で、描かれている疫神が象徴する疫病を分析している。例えば、左の腰に鈴をつけた赤い衣装は「江戸市民にとってはおじみの疱瘡神のいでたち」（p8）で、疱瘡（天然痘）を象徴しているなど、興味深い考察がある。詳しくは同論文を参照されたい。

※永田生慈の説（「北斎の小布施滞在と牛嶋神社の額」『北斎研究 34号』平成15年11月29日 墨田区文化振興財団）を補足して、島田賢太郎が、京都祇園神社（八坂神社）の

祭神で牛嶋神社の祭神でもある牛頭天王(災厄除去の神)が須佐之男之命に姿を変えて厄病払いをしているという説明している(「台東区北斎研究会ニュース」2016年11月27日)。



1390 窓鷺の写 (大英博物館蔵)

拡大図

※窓鷺(卍楼(北斎の弟子である北鷺の弟子)による同額絵の写し(板絵)が大英博物館にある。



【牛嶋神社にあったもう一つの額絵】

●「鬼が島図」

※『新撰 東京名所図会』第十二編「牛嶋神社の現況」(臨時増刊「風俗画報」第百六十一号「隅田堤 上」所収P26。明治31年3月25日刊)には次のような記事がある。

「(略)最も瞩目すべきは、前北斎が八十六歳の時に画ける鬼か島の図。狂斎雪堤注1の合作に成れる渡辺綱鬼女の図注2の両巨額とす」

注1) 狂斎雪堤：狂斎は川鍋暁斎。天保2年(1831)～明治22年(1889)。雪堤は長谷川雪堤(生年不詳～明治15年(1882))。両者とも江戸時代末期の絵師。

注2) 渡辺綱鬼女の図：源頼光の家臣・渡辺綱は、女に化けた茨木童子の退治に出かけ、鬼女の腕を切り落とした話に由来した絵。

※いくつかの額のある中で最も注目すべきものは前北斎の「鬼が島」の図と、川鍋暁斎と長谷川雪堤の合作の「渡辺綱鬼女の図」の二図であるというのである。

【鬼が島図のスケッチ】

「鬼が島図」は『いろは別江戸と東京 風俗野史』巻の五(伊藤晴雨著 昭和6年11月・城北書院刊)にスケッチ風に描き写したものが掲載されている。甲冑に身を固めた源頼朝が弓を立て、矢を入れた築を背負い、岩に腰を下ろして鬼たちを睨みつけている。その前で鬼たちは土下座し平服して疫病神の手形を紙に擦し、頼朝に渡したという伝説を描く。頼朝の両脇には御供の鬼たちが控えている。書込みに「牛嶋神社御宝前」「牛の御前奉納ノ額大略」とある。また、このスケッチの左には、鬼が手形を擦す図も描かれ、そこには「尚嶋須崎町牛嶋神社の北斎の額ハ江戸ノ三額に称セラル」とある。「三額」が何かは不明。

「須佐之男命厄神退治之図」の厄神から誓約書などを取るモチーフは同じだが、絵柄は全く違っている。すみだ北斎美術館の常設展示場入口には、須佐之男命厄神退治之図の復元額が掲げられ、その下のガラスケースに『いろは別江戸と東京 風俗野史』巻の五に

載っているスケッチの頁を見開きで展示して
いて、このスケッチは、著者の伊藤晴雨が記
憶を頼りに描いたものとしている。
須佐之男命厄神退治之図」の下絵だったのか。
あるいは関東大震災前にはそれとは別の額絵
があったのかは不明。



1391『新撰 東京名所図会』第十二編「牛嶋神社の現況」

(臨時増刊「風俗画報」第百六十一号「隅田堤 上」鬼ヶ島図(『いろは別江戸と東京 風俗野史』巻の五より)

●上町祭屋台天井絵「上町屋台天井絵縁絵下絵」(紙本四面着色。無款。個人蔵)

※「女浪図」の裏面の墨書き。「濤二枚 弘化二年歳在乙巳七月 東都所随老人出
写於信州高井郡小布施邑高井氏別墅 縁花鳥所随老人図之着色 則門人高井健也 弘化二
乙巳七月起筆」(『肉筆浮世絵大観』5 p155)(縁の花鳥図は北斎の下描きに従って
門人高井健、すなわち高井鴻山が着色したという内容)。

●上町祭屋台天井絵「怒涛図〈男浪図〉(女浪図)縁絵」(桐板着色)

※女浪図の左下の縁絵には翼をつけた天使が描かれる。浪の周りの花鳥部分は鴻山の彩色
で翌年5月に完成したか。

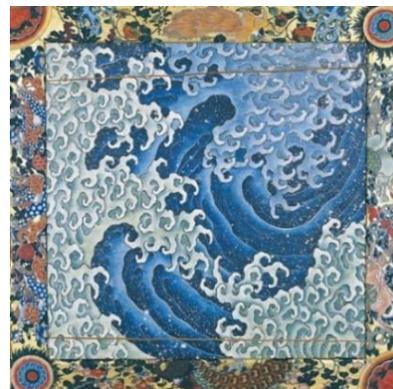
●上町祭屋台天井絵「怒涛図(男浪図と女浪図)」(桐板着色。無款。各約 118.0×118.5
北斎館蔵)



女浪図の枠図左下の天使



1392【女浪図】 【男浪図】



★斎藤月岑日記、弘化2年6月8日条「北斎 春より信州へ参候よし」とある。

★江戸に帰って後、天秤棒の杖をつくようになったと伝えられる。

●読本『釈迦御一代記図絵』(大本六冊。『釈迦一代記図絵』『釈迦御一代図絵』
『釈迦如御一代図絵』『釈尊御一代記図絵』『世尊一代図絵』とも)。

一編表紙見返しに「山田意斎編撰 前北斎卍老人繡像」とある。天保6年2月起画稿。
六編裏表紙裏に「弘化二年乙巳年仲夏吉辰発兌」とある。一編表紙見返しに稲田
玉山堂・岡田群玉堂版。六編奥付には越後屋治兵衛(京都)、山城屋佐兵衛(江戸)、
河内屋茂兵衛(大阪)とある。見開き縦組みの図。18.0×25.5 島根県立美術館：永
田コレクション/弘前市立弘前図書館/太田記念美

術館/島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫/ライデン大学図書館蔵)

※京都・江戸・大坂で刊行された55話の読本仕立ての**仏本**。

1393『**釈迦御一代記図絵**』一編(ARC 古典籍ポータルデータベース)右「**大恩教主釈迦牟尼如来法像**」

左「**悉陀大師之后妃耶陀羅女像**」



●**扇面画「朝顔図」** (紙本着色扇面。八十六叟卍筆。**印**應。12.8×38.2)



※扇面右半分に、朝顔の蔓と花を描く。北斎の落款で、娘応為の印影「**應**」が押されている例は、弘化4年(1847)肉筆扇面画「**亀図**」がある。北斎が描き、何かの事情で「**應**」を捺したか、応為が描き、北斎の落款を書いたか不明。図は、扇を開いた右半分に青と赤の朝顔と、その蔓が扇の中央上部へと伸びて、別の朝顔の花に続いている。扇の骨跡があるので、実際に使われていたか。

1394 落款と印影「**應**」(久保田一洋『北斎娘・応為栄女集』p86より転載)

●**肉筆画「寿字に唐子図」** (唐子ハ八十六歳卍筆。**印**富士の形。ボストン美術館蔵)

※「**寿**」字の下に「**御事婦帰 無量目出度存候 九十八翁 花井白叟書**」とある。花井白叟の書に、「注文者の依頼か、あるいは北斎自らの意思によってかは明らかでないが、急遽二人の唐子が描き加えられたと思われる。」と『ボストン美術館浮世絵名品展 北斎』図録で解説される。

花井白叟は弘化元年(1844)に『**武江年表**』等に長者の一人として北斎と共に記された。

1395 寿字に唐子図(ボストン美術館)

●**肉筆画「松魚図」** (於深谷之駅 画狂老人卍筆 八十六歳 **印**富士の形)。昭和十年三月、東京美術倶楽部「**三楽荘某家 所蔵品入札**」の出品目録に収められたが、戦災時に焼失したか、現在所在



不明。初鯉の図とすると六月頃、小布施に向かう途中、**中山道の深谷**での作か(久保田一洋編著『北斎娘 応為栄女集』p40)。

●**肉筆画「双龍図」** (絹本双幅。フリーア美術館蔵)

●**肉筆画「えび さば あわび」** (紙本着色 一幅。画狂老人卍筆 八十六歳 **印**富士の形。

31.4×53.1。北斎館蔵)

1396 えび さば あわび(北斎館)



※鯖の上に乗るように大きな鮑がある。鯖の頭の先に、長いひげをくの字に投げ出している海老。

●屏風画「雨霧山水図」（紙本双幅着色。画狂老人卅筆八十六齡 印不明）

☆〈霧図〉（129.8×59.8）

※近景に二人の人物に樹木が描かれ、図の中景には霧に霞む風景。川を行き交う舟と対岸の岩上の家屋。

☆〈雨図〉（129.8×59.9）

※図の上から下に降りしきる雨が刷毛で一気に描かれる。

| |
|---|
| 弘化3(1846) 丙午 87 歳 三浦屋八右衛門、画狂老人卅、北斎為一老人八右衛門、 |
| 八十七老卅、画狂老人卅筆 齡八十七歳、藤原祐則、不随老人卅筆 齡八十七歳、八十七 |
| 老人、八十七歳 印 葛しか、一顆、富士の形：阿栄(49) |

◇1月15日、江戸小石川より出火。江戸大火。

◇4月6日、イギリス人ベッテルハイム（Bernard Jean Bettelheim）が那覇に上陸、布教活動を行う。

◇6月・7月、利根川堤防決壊。本所・深川地区浸水被害。

◇7月19日、アメリカの東インド艦隊司令長官ビッドル（James Biddle）が浦賀に入港し通商を要求するも拒絶される。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇この年から検閲印は名主二人の双印となる。

★本郷丸山鑑坂下（現東京都文京区本郷4-20と30の間の坂）に住んだか、あるいは住もうとしたか（『葛飾北斎伝』p30）。

※1月9日付本間北曜宛手紙では、義理の娘（次男崎十郎の妻）が重い病を患っていることや、本郷丸山町鑑坂下の武家屋敷に住む次男加瀬崎十郎の所へ引っ越そうかと考えていると言っている（2017『北斎—富士を越えて』図録所収「逆順で語る晩年の北斎」ティモシー・クラーク p17）。

※書簡は次の通り。

「舌代 満寿々々御安康之趣奉喜慶候 / 当地無事ニ罷有候 乍憚御安 / 慮可被下候拙老儀も数々取込出来仕 / 其上嫁（筆者注：崎十郎の嫁）大病にて兎角者多用ニて / 筋ニ寄り候者倅方へ同居仕候哉ニ御座候 / 何れ三月此ニ者委しく細書ニ可申上候 / 先者御状御受而已如此御座候 恐々 / 正月九日出 / 三浦屋八右衛門 / 九拜 / 北曜君 / 「玉」机下」（ルビは筆者による）

【大坂の偽北斎・百歳の余までハ、死亡之沙汰ハ、まづ休みに仕候】

★弘化3（1846）年4月24日、日本橋通二丁目、書肆嵩山房（小林新兵衛）宛の手紙（御祝儀本受取挨拶）の末文に、「北斎」の落款号を30年前（文化13年）に門人新吉原

の引手茶屋主人、亀屋喜三郎に譲った旨の記事あり。ここで大坂の偽北斎のことを大坂の書肆に訴えている。

「此節門人戴斗の画を北斎と唱へ候由、是ハ注新吉原亀屋喜三郎と申者へ、三十年以前ゆづり遣し候。満に戴斗の画を、北斎と申ふらし候儀、甚不埒の儀、能能御吟味被下度、殊に拙老死候など、申儀も節々承り候。老人儀ハ、百歳の余までハ、死亡之沙汰ハ、まづ休みに仕候。其段も御承知被遊可被下候以上。

画狂老人

出三拜

大坂

書物屋衆中様」（『葛飾北斎伝』P104）

注）是ハ：「北斎」号を指す。北斎号は32年前の文化11年（1814）12月に譲っている。

亀屋喜三郎は二代目北斎となる。

【犬北斎はあっても、北斎名には二代目なし】

★「（略）二代目蓋し北斎には、二代目なし。かの戴斗の名を譲られし亀屋喜三郎注、後に大坂に至り、戴斗なり、北斎なりと唱へ、絵本類など画き、又絹紙などへも多く画きたり。当時大坂にては、真の北斎なりとし、大に行はれしが、後に事蹟はれて、二代目北斎なりと称へたるなるべし。余近日此の大坂北斎の一画を見たりしが、画および印面は、真の北斎の如くなれども、落款の文字異なれり。幅面の時代は、五十年前後のものなれば、これかならずかの喜三郎が画なるべし。当時の人、既に真の北斎にあらざるを知りて、大坂北斎と称へ、又師恩を顧みずして師名を詐るは、人にして人にあらずとて、これを卑み、犬北斎と呼びたり」（『葛飾北斎伝』p107～108 ルビは筆者による）

注）飯島虚心の誤り。戴斗号を譲られたのは亀屋喜三郎（深川海辺大工町の橋本喜三郎：『浮世絵類考』p203）ではなく、門人北泉である。彼が大坂に行き、二代目戴斗ではなく北斎と名乗ったことに北斎は怒っているのである。北泉は、戴斗以外に、洞庭舎、昇山、玄龍斎、米華斎、米華道人、などとも号している（檜崎宗重『北斎論』p373）。二代目北斎は門人亀屋喜三郎と考えられる。

※『増補浮世絵類考』には「戴斗（文化文政の人）俗称伴右衛門 遠藤氏（小笠原家浪人なり）始は北泉、（居住麴町平川町天神前にありしが後は不知）北斎の門人なり、名を譲受けて二代目戴斗と云、画風師の筆法を能く学び得たり。真偽や、もすれば不知、「新注世に犬北斎といふ（略）」（『浮世絵類考』岩波文庫版p158）

注）「新」は、『増補浮世絵類考』（竜田舎秋錦編、慶応4年：1868）の記事を指す。その記事を以下に記す。

「始北泉号。俗称遠藤伴右衛門。麴町平川天神前に住す。小笠原家の浪人なり。後師の名を譲り受て二代戴斗となり、画風師の筆法を能く学び得たり。真偽や、もすれば見まかふ計なり。世に犬北斎といふ。浪花の刻本多くあり」（句読点・ルビは筆者による。

「国立国会図書館デジタルコレクション」より）

【紺縞の木綿を着、六尺の天秤棒の杖と草鞋履き】

★柳亭梅彦談「梅彦氏曰く、北齋翁が平常の扮装は、甚奇なり。衣服は、菅絹類を用みしことなく、又流行の服を着せしことなし。あらき手織の紺縞などの木綿を着し、上には、柿色の袖なし半天を着し、六尺有余の天挿（「秤」の誤り）棒を、杖にかへ、草鞋或は麻裏草履をはきて、あるきたり。其の杖、恰かの阿染久松の演劇中にある、質店の久作翁注の姿のごとし」（『葛飾北齋伝』所収、p 206）。杖を突いた様子は天保 13 年（1842）自画像を参照。

注）久作翁：歌舞伎「お染久松色説販」などに登場する久松を引取る人物。

【画風公聴に達す】

★清水侯が浅草観音に詣でるついで、北齋を伝法院に招いて揮毫させたという。「生涯の面目は、画風公聴に達し注、御成先に於て席上画上覧度々あり、希代の妙手と云ふべし。」（弘化 3 年、斎藤月岑書『増補浮世絵類考』、明治 18 年版『東洋絵画叢誌』13 卷所収。岩波文庫『浮世絵類考』 p 145 に同様記事あり）。

注）公聴に達し：このエピソードがいつのことかは不明。あるいは、天保 3 年（1832）に記載した「立田川」のエピソードなども含むか。

【めがねをかけず、背も曲がらず、健脚の達者】

★弘化 3 年 8 月 13 日付、笠亭仙果（1804～68。二世柳亭種彦。戯作者。狂歌師）が医師平出順益への書簡で北齋の達者ぶりを記している）。

「北齋も九十に近し、八十七八か。今にめがねをかけず曲がき、せもかがまず、はんした（版下）が出来申候。春ごろも、雨ふりにあしだ（足駄）をはいて、日本橋までも西両国辺からゆきゝして、へともおもはぬたつしや」（土山節子「北齋晩年のおもかげ」〈『日本歴史』150 号〉の記事を、永田生慈が「北齋の生涯」〈『浮世絵八華 5 北齋』所収 p 138）で紹介している。ルビ・書き込みは筆者による）。

この書簡で、この頃西両国辺に住んでいたと推測される。

【雨でも草鞋、法華経を唱え歩き、雑談を厭う】

★天保末期～弘化期頃の北齋の様子。

「露木氏曰く、北齋翁は、外に出づるに、下駄を用みしことなく、又雪駄を用みしことなし。雨降り道路あしき時は、草鞋を穿ち（履き）、雨晴れ泥土かはけば、麻裏草履を用みたり。露木氏曰く、翁は、常に、法華経普賢品注¹の呪文、阿檀地注²を唱ふ。途中にてても、止むことなし。翁曰く、此の呪文を唱へ、歩行する時は、知る人に遇ふも、眼に入らず。甚奇妙なりと。これ蓋し呪文を唱ふに専にして、眼に入らざるなり。翁は、常に途中人に遇ひ、雑談することを厭ひたり」（『葛飾北齋伝』 p 206～207。ルビは筆者による）

注 1) 法華経普賢品：法華経二十八品の一。普賢菩薩勧発品のこと。

注 2) 阿檀地：「阿檀地、檀陀婆帝、檀陀婆帝」の呪文（『葛飾北齋伝』 p 207 脚注）。

【病氣再発する】

★12 月 6 日、神山熊三郎（為齋）宛書簡で体調不良で歩くことが困難と知らせる。

「(略) 此節病氣再発歩行仕兼 (略)」(『年譜』 p 139)。

【最後の読本挿絵】

●読本『源氏一統志』（3月。五冊。松亭中村源八郎定保輯、北斎為一老人八右衛門画。松亭金水作。菊屋幸三郎（金幸堂）版 島根県立美術館：永田コレクション/国立公文書館蔵）

1397『源氏一統志』（国立公文書館）

※北斎は初巻から4巻までの5冊に挿絵を描く。読本挿絵の最後の本とされる。

●肉筆画「羅漢図」（紙本着色一幅。八十七老叢筆。印葛しか。127.4×52.0 太田記念美術館蔵）



※文化7年～14年の「羅漢図」同様、羅漢が鉢をかざし、立ち上る煙の中に龍を示す朱色の稲妻が描かれる。北斎は、鉢を掲げて毒龍を制する力を持つ伐那婆斯尊者（十六羅漢の一人）を描いたとされる。また、『北斎漫画』二編に描かれた「半諾（託）迦尊者」（十六羅漢の一人）と酷似しているので半託迦尊者ではないかとの説もある（『原色浮世絵大事典』8巻）。

1398 羅漢図（部分：太田記念美術館）

●肉筆画「双鶴図」（紙本着色一幅。八十二歳の大岡雲峰（1765～1848）との合筆。画狂老人叢筆齢八十七歳。印葛しか。88.3×42.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※雌雄二羽の丹頂鶴を合筆した図。北斎は右側の鶴を描く。二羽の鶴の羽の白さが胡粉により鮮やかに描かれる。雲峰の落款は「八十二翁雲峰」とあり八十七歳の北斎にもあやかり、長寿を願った人から依頼された図といわれる。

1399 双鶴図（島根県立美術館：2005『北斎展図録』より転載）

●肉筆画「富嶽と徐福」（絹本着色一幅。弘化三年ノ季冬 藤原祐則筆。印一顆。86.5×26.9 北斎館蔵）

※富士に向かって両手を広げ、赤い帽子を被って向こう向きの徐福。

1400 富嶽と徐福（北斎館）

●肉筆画「朱描鍾馗図」（絹本朱描き着色一幅。八十七老叢筆。印富士の形。58.4×30.5。すみだ北斎美術館蔵）

1401 朱描鍾馗図（すみだ北斎美術館）

※朱画きの鍾馗は男児の疱瘡除けの力があると信



じられている。腕を組み全身朱書きの鍾馗が正面を見据える図。

●肉筆画「朱描鍾馗図」(絹本着色一幅。不随老人卅筆 齢八十七歳。印葛しか。108.0×38.5 すみだ北斎美術館蔵)

※弘化元年の「朱描鍾馗図」同様、朱書きの鍾馗図。右手に刀剣を下げ持ち、身体をやや左にねじり、正面を見据えた図。

1402 朱描鍾馗図(すみだ北斎美術館)

●肉筆画「かれい・めばる・さより図」(紙本着色一幅。掛幅。八十七老人筆。印富士の形。31.4×53.1 北斎館蔵)



※北斎周辺の画家の作ともいわれる。さよりの鋭い頭が左下に向き、かれいとめばるの頭はさよりと交差するように左上を向いている。

1403 かれい・めばる・さより図(北斎館)



●肉筆画「波濤図」(絹本着色一幅。八十七老卅筆。印葛しか。117.1×44.6 個人蔵)

※波が灯台のある岸壁に沿うように打寄せ、手前の台地と対角線の構図をとる。遙か水平線に半島が伸びている。翌年の弘化4年(1847)にも同画題の絵(フリーア美術館蔵)があり左右反転して描いている。

●肉筆画「月下芋洗図」(絹本着色一幅。八十七老卅筆。印葛しか。個人蔵)

※満月の下、桶の淵に乗り、交差した棒で桶の中の芋を洗う農夫。この画趣は『森冶版中判藍摺シリーズ』(天保2年頃)の〈老人芋洗〉でも描いている。

1404 月下芋洗図(ジャパンサーチより:モノクロ掲載)



●肉筆画「豫讓」(紙本着色一幅。八十七老卅筆。印葛しか。光ミュージアム蔵)

※豫讓は、中国春秋時代、晋の生まれ。紀元前453年、趙無恤との戦いで主君の智瑤の死の仇を討つべく計ったが、囚われの身となり、最期の願いとして趙無恤の衣服を斬りつけた後、自刃した人物(『史記』刺客伝)。

図は、主君の仇を討ち、図の右から飛んでくる矢に自ら胸を開く豫讓を描く。文政10年~11年にも豫讓を描いている。

1405 豫讓(光ミュージアム)



●肉筆画「登龍図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆 齢八十七歳。印富士の形。112.6×33.5)

個人蔵)

縦長図の上に首を向け、図下に「の」字の様に尾を丸めて登る龍を墨絵風に描く。龍の形に添うように黒雲が描かれる。

1406 登龍図 (Web 千葉日報より)



弘化4(1847) 丁未 88 歳 三浦屋八右衛門、み浦や八右衛門、三浦や八右衛門、細画葛飾卍老人、八十八老卍、画狂老人卍試筆 齡八十八歳、画狂老人卍 齡八十八歳、前北斎改画狂老人卍、前北斎卍 齡八十八歳、八十八老人卍、齡八十八老卍、齡八十八歳卍、俗姓中島鐵蔵藤原為一
印 葛しか、百、北斎宗理：阿栄(50)

◇疱瘡が流行する。

◇徳川慶喜、一橋家を継ぐ。

◇8月1日、小林清親生(～1915)。

○阿栄「「絵入日用女重宝句」(高井蘭山作。挿絵。木版画2点のみの一図)。江戸で名声を得る(Richaed Lane「Patricia Flster, Japanese Women Artist」より)。高井蘭山の序文は文政12年(1829)だが刊行はこの年。

★1月頃、浅草田町一丁目、本所石原などに住むか(飯島虚心『葛飾北斎伝』)。

※2月1日、神山熊三郎宛書簡に「田町壹丁目 み浦や八右衛門拜」とあるという(『年譜』資料26による)。

★この頃、浅草馬道にも住むか。

【松代藩士宮本慎助に「日新除魔」の絵を渡す】

★『葛飾北斎 日新除魔帖』(村山句吾編 明治40年1月。国立国会図書館デジタルコレクション)によれば、北斎が小布施滞在中に宮本慎助が絵を求めたところ、江戸に帰ったら絵を送ると約束したにもかかわらず、数年しても送って来ない。そこで、弘化4年に江戸に行った折、浅草田町の北斎宅を探し当て、約束の絵を求めると、北斎は「漫画」の作業に忙しく、未だ絵をなさずと言う。側にいたお栄が気の毒に思い、日頃溜めおいた日新除魔の画を宮本慎助に与えたとしている(p4)。

天保13年～14年に描いたもの219図を、浅草の北斎宅に訪れた小布施の松代藩御典医宮本慎助に与えた。あるいは応為が与えたか。宮本慎助は後にこれらを仮綴じにし、息子の宮本仲氏が画帖仕立てにしたことが「先考遺墨」(宮本仲氏による宮本慎助の記録)によって知られる。

★北斎は松代藩士・宮本慎助に渡した「日新除魔図」に依頼されて序文と落款を記した。

自序に「日新除魔と号して朝なく画き捨たるを、高君子の応需て、末世の一笑となりしは、今更汗顔をぬぐふのみ。三浦屋八右衛門 印 葛しか 国の屋注高君」とある(同書p7)。

注) 国の屋：宮本慎助の俳号。

【この年応為は50余歳か】

★「先考遺墨」は、「日新除魔帖」に貼り付けた添書で、「先考遺墨 仮綴除魔帖 表紙之一 以為参考矣 仲 印」という別紙が貼られ、この書面の左下に、小さく応為について次の様に書かれているという。「娘といふ者〔名栄〕今/五十余齡也此娘子と/二人暮しにて食料每/日三度共買上ニ而暮すといふ」（久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』p137より）

お栄という娘と二人暮らしで食事は三度共店屋物で暮らすというのである。「五十余齡」とあるが、これは実際の年齢なのか、宮本仲の印象なのか同誌では不明としている。

【長寿の薬】

★『日新除魔帖』の識語の追記にある長寿の薬の調剤。これを手書きにして宮本慎助に与えた。

「龍眼肉（筆者注：ムクロジ科の常緑喬木の果実の種子）、皮を去り目方拾六匁 太白砂糖八匁 極上焼酎壺升 壺へ入レ能々封シ日数六十日置キテ朝夕猪口ニ而ニツ宛御用ヒ 右者長寿の薬ニ而 候 此故に八十八歳之只今迄無病ニ而罷有候 画狂老人 卍 印 百 齡八十八歳」（『葛飾北斎 日新除魔帖』国華社 明治40年10月。国立国会図書館デジタルコレクションより）

※名古屋の墨僊から教えられた自家薬。

「竜眼肉（ムクロジの実）、柚子の皮、茯苓（サルノコシカケ）、附子（トリカブト）、大黃（タデ）、蒼朮（オケラ菊の根）、太白（純良）の砂糖を混ぜ、薄めた焼酎で煮詰める」（仁田義男『画狂一代 小説葛飾北斎』p200）これを60日間置く。朝晩2回、猪口二杯ずつ飲む。

※当時広く読まれた『珠術萬宝全書』（5冊、明和元年刊）にはほぼ同じ製法が記されているという。

「病を除き 寿を延る薬酒の方 一極上焼酎壺升 龍眼肉拾六匁 皮肉を去り 一大白砂糖八匁 右、壺へ入れ固く封じ、三十日過て口をひらき用ゆべし。其味香バしく甘美にして能神を安じ、智をまし顔色を潤し、病を除き年を延るの名酒なり。常に用いて甚効あり」（『北斎美術館3美人画』p156より 句読点・ルビは筆者による）

【この頃から「百」に執着】

★百歳への執着から「富嶽百景」「百人一首姥が絵解」などに「百」を用いた。他に「名橋百景」「異本百花撰」「百家奇術」「狂画草筆百眼」「百寿百福」「温泉百景」「月下百景」「一百自然絵」「百馬百牛」などの執筆に意欲を示したが上梓されず（安田剛蔵「葛飾北斎改名考—北斎は五度改名した」『在外秘宝 葛飾北斎』所収）。

【蚊帳を売って観劇する】

★飯島虚心『葛飾北斎伝』では、清水晴風の話として次のエピソードを伝える。

7月、尾上梅寿が、市村座「尾上梅寿（梅幸）一代噺」の『東海道五十三次』（四世鶴屋南北の、各宿場に怪談仕立ての話を盛り込んだ怪談劇）を観てほしいと伝えたところ、

北齋は家の蚊帳を売り、金二朱注を持って観劇した。その後、二朱を梅幸に渡し本所石原の家に帰る。その後、夜毎蚊に刺されるが落着いて平常に仕事をした。後に友人が蚊帳を買って北齋に与えたという（p 91～92）。

注) 金二朱：8分の1両。この頃1両=6500文（天保14年に改定に高騰している）ので約162,500万円（1文=25円で換算）。162,500万円÷8=20,312円になる。

「菅梅幸が一世一題の演劇、東海道五十三次注¹を演ぜし時、北齋の乗りて一覽せんを請ふ。頃しも夏時、北齋夜々其の用ゐる所の蚊帳を売り、金二朱を得て、これを懐にし、劇場に赴き、一覽の後、かの二朱を紙に包み、梅幸に与へ、本所石原の家に帰りたり。抑本所の地は、卑湿にして、蚊多し、夏夜蚊帳の設けなければ、寝ること能はず。北齋蚊帳を売って後、夜々蚊に刺されるれども、晏然筆を採りて業をなすこと、平常の如し。友人某これを聞き、蚊帳を購ひて、与へたり（清水氏注²の話）」（『葛飾北齋伝』p 89～92）

注1) 弘化4年（1847）7月、市村座の「尾上梅寿一代噺」を指すか（『葛飾北齋伝』p 91脚注）。

注2) 清水氏の話：清水晴風（1851～1913）か。歌川広重の絵を学び、風俗資料収集家（同書脚注p 133）。

※清水清風は北齋没後の嘉永4年の生まれであるので、以上のエピソードの根拠については不明。

★この年に描いた肉筆画は少なくとも32点あるという（2017『北齋一富士を越えて』図録所収「逆順で語る晩年の北齋」ティモシー・クラーク p 17）。

【この年広重と接触したか】

★この年2月頃に小布施から江戸に戻る。

★11月21日、「芥藤月琴の日記に“同二十一日 昼後為一君並庄田氏、広重へ使やる”」とあり、この為一は北齋のことか」と『年譜』では述べている。とすれば、北齋は広重と接触したか。

●絵本『烈女百人一首』（1月。中本一冊。緑亭川柳輯。細画葛飾卍老人画。歌川豊国三世（一陽齋豊国）と共作。北齋は数葉を描くのみ。山口屋藤兵衛（錦耕堂）版。大英博物館/岐阜大学附属図書館/八戸市立図書館蔵）

1407『烈女百人一首』（大英博物館）

【鳳凰図天井絵下絵】

●下絵（この頃か）。

※弘化5年の岩松院天井絵「八方睨み鳳凰図」の下絵。16枚の紙を4枚×4枚の正方形に近い大きさに貼り合わせている。

この下絵について久保田一洋『北齋娘 応為栄女集』では次のように、下絵から天井の



本図制作の過程を説明しているので、少々長いが引用する。

「(略) 矢ヶ崎氏による解説は(筆者注: 矢ヶ崎賢次編『信濃偉人遺芳帖』に収められた「大正六年十一月三日からの「信濃偉人遺物展覧会」の解説)『鴻山が岩松院の天井を描く可く、鳳凰の下絵を書き、此れに『彩色何分奉願上候』と書き添へて北斎の許に送った、北斎が夫れを見て極めて丁寧に彩色して送り返して来た注、其處で鴻山は北斎の彩色した鳳凰を手本として書いたのが、即ち現存して居る岩松院の天井画であるが、頗る美麗なものである』とある。当地の呉羽宇一郎(1822~1901)『歴代枢要書』には『一、岩松院客殿大間(長三間よこ三間)天井ノ鳳凰ハ、第廿一世珍和尚ノ代高井三九郎氏(=高井鴻山)ノ画笔ナリ、弘化四年度ナリ、鴻山氏ト北斎卅老人兩人談合ノ上、図ヲ定メ、鴻山先生之ヲ描クト云』とある(『小布施町史』昭和五十年十一月 小布施町史刊行会)。(略)

この記事により、旧来より天井画は高井鴻山とされてきたが、昭和四十九年(1974)十一月九日、現地で由良哲次氏(1897~1979)により北斎直筆と断定され、以来当地では、北斎八十九歳(嘉永元年/1849)、死の前年の大作として示されている。

しかし、北斎は嘉永元年六月には浅草で門人本間北曜と面談しており、(永田生慈「再発見 鬼図をめぐる北斎最晩年の諸問題」、『古美術』六八号 昭和五十八年十月 三彩新社)、その他の周辺事情を勘案しても、現在では北斎直筆とする見方は否定される」

注) 久保田一洋氏は、鴻山の下絵に北斎が色の指示をしたのではなく、後に、『NHK 歴史ドキュメント 1—北斎画 200 人いた—』(昭和 61 年 3 月 日本放送協会出版部 飯沼正治の発言)を引き、北斎自身が下絵を鴻山に送ったことが明らかになったと述べている(『北斎娘 応為栄女集』p 86~87)。

【鳳凰状】

★弘化 4 年 8 月 9 日付、高井鴻山宛て書簡(高井鴻山の、岩松院天井図の下絵についての催促に対する返事。いわゆる「鳳凰状」と呼ばれるもの)。

「鳳凰之儀、大延引恐入候。彩色を委しくと被仰聞ト候 ならば、だうさ注のアル紙江、此品御写被下候て、被還可被下、其句切句切ヲ一ヶ所宛、さゐしき 仕り差上可候。(両眼の絵) そうならば、なぜ此下画念画ニ認メナイのだと、被仰候半ハ、此方ニも色々り合せのわるい時と能イ時と、アア、儘なら怒浮世(絵師の画)に而御座候 八月 ア、ソレ 三浦や八右衛門 ハイ、ハイ 九日書 高井様 玉机下」(『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』p 20 (由良哲次: 岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊) 及び『年譜』資料 24 による。但し『年譜』では天保 14 年 8 月 9 日の書簡としている。句読点・ルビは筆者による)

※岩松院の天井図について、輪郭図を送るから、これをドーサ引き紙に模写して再び江戸に送りなさい、この図は数個の区画に区切りしてあるので、こちらもたいへん忙しいので一度にとということが難しいときは、その区画を一区画ずつ彩色してさしあげるといのである。

注) だうさ(ドーサ)は、明礬水と薄い膠との液をいい、これを和紙に塗って、彩色の際に絵の具が滲まないようにする。

これにより、下絵は北斎が鴻山に送ったことが分かる

※久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』(p88)では、小布施の川上安人氏の資料として同様の「鳳凰状」を紹介し(『季刊浮世絵』7号:昭和38年12月 緑園書房掲載)、弘化4年(筆者注:10月)に天井図が完成していることから推察して、書簡はそれ以前の弘化3年8月6日のものとしている。

写し書きのため文言が若干異なっているが、参考のため重複をいとわず掲載する。

「鳳凰之儀大延引恐入候/彩色ヲ委しくと被仰聞ト候 ならバ/だうさのアル紙江此品
写被下候て/被遣可申候其句切りく ヲ一ヶ所宛/さみしき 仕り差上可申候 (絵:両目)
そうならバ/なぜ此下画念画に認 ナイのだと被仰候半か/此方ニも色々くり合せのわるい
時と能イ時と/アヽ俣ならぬ浮世絵 (絵師が踊る文字絵) に而御座候/八月 アヽソレ
九日書/高井様 玉机下/三浦や/ (絵:うずくまる猫) 八右衛門/ハイク」

●岩松院天井図「岩松院鳳凰図 下絵」(最初の下絵。
紙本墨絵淡彩。38.9×44.4)

※岩松院天井絵「鳳凰図」の下絵の左上に墨書きで「尾ノ玉ノ箱 六百枚、外三千八百枚、
ノ四千四百枚代金拾壺両」と記す(『肉筆浮世絵大観5』p157 講談社)。



1408 鳳凰図初めの下絵(『2017 北斎一富士を越えて展図録』より転載)

※裏書に天保十五年と弘化二年の間に描かれたとある

(「リアリスト北斎の妖怪人生」による。〈久保田一洋『北斎の妖怪画』所収) 国書刊行会)

●岩松院天井図「岩松院鳳凰図天井彩色下絵(原図)」(この頃か。紙本着色一幅。無款。38.5×52.0 岩松院蔵)

1409「鳳凰図天井彩色下絵」鳳凰図下絵(『2017 北斎一富士を越えて展図録』より転載)

※上記下絵に彩色したもの。江戸にいた北斎が、下絵に彩色したと思われるが、応為の手も加わっているのではないかとの見方もある。彩色された下絵は鴻山の許に届けられた。



●肉筆画「琵琶に白蛇図」(絹本着色一幅。

弘化四丁未年四月廿日己巳ノ日筆ヲ下ス 八十八老叟 印百 36.1×44.0。フリーア美術館蔵)

※赤い紐の付いた琵琶袋に包まれた琵琶に、赤い目をした白蛇が絡み付いている図。は、弁財天の縁日(己巳の日)に描かれたもので、白蛇も琵琶も弁財天の持ち物。



1410 琵琶に白蛇図 (フリーア美術館)

●肉筆画「向日葵図」(縦長紙本着色一幅額装。八十八老卅筆。印葛しか。97.2×28.3 シンシナティ美術館蔵)

※竹竿に向日葵の蔓と葉が絡み付いて真直ぐ伸び、その先に一輪の向日葵の花が咲いている図。

図下には針のように伸びた別の葉が描き添えられている。

※エゴンシーレの枯れた「ひまわり」も参考に載せる。

1411 左：北斎 向日葵図 (シンシナティ美術館)

1412 右：エゴンシーレ ひまわり (1909～10 149.5×30.0 ウィーン・ミュージアム)

●肉筆画「白羊図」(「羊図」とも。紙本着色掛幅。弘化四丁未年正月元旦画狂老人卅試筆齡八十八歳。印葛しか。高井鴻山記念館：市村次夫コレクション蔵)



※小布施で描いたか。白羊が雪の中、首を上げて雪を被った松の側に立っている図。

●肉筆画「渡船山水図」(紙本着色一幅。八十八老卅筆。印百。127.0×53.5 北斎館蔵)

※近景に岩盤に繁茂する樹林の中に見える山村を描き、その背景に奇岩がそそり立つ図。岩山は点苔によって描かれる。水面には二艘の小舟が浮かんでいる。

1413 渡船山水図 (北斎館)



●肉筆画「神功皇后」(着色一幅。前北斎卅筆 齡八十八歳。印葛しか)

※山の傾斜に立ち、弓を左に抱え、白衣の右袖を振り上げて山下を眺めている皇后の図。 1414 神功皇后 (pinterest.com より転載)

●肉筆画「赤壁の曹操図」(絹本着色一幅。八十八老卅筆。印百。115.4×34.4。 島根県立美術館永田コレクション蔵)

※曹操は、中国三国時代の魏の始祖。建安13年年(208)11月15日、赤壁での戦いの前夜の勇姿で、弓を背にして、赤い柄の長槍を立て、舟の上で足を踏ん張って立つ曹操。背景に満月の下、三羽のカササギが飛んでいる。

※酒宴で酔った曹操が空を飛ぶカササギ(烏鵲)を詩中で詠んだところ、劉馥に不吉であると進言され、怒った曹操が劉馥を刺殺したという。曹操の背後を飛ぶカササギと、手に



持つ槊（長い槍・ほこ）はこの話の暗示であるという解釈もある（『永田生慈北斎コレクション展図録』（p196）。

※本図は娘の応為の作かという説もある（キャサリン・ゴビエ『北斎と応為』彩流社 P283）。

1415 赤壁の曹操図（島根県立美術館）



●肉筆画「七面大明神応現図」（紙本着色一幅。八十八老人卍敬筆。印百。132.3×59.3。茨城県古河市・妙光寺蔵）『2005 北斎展図録』では



「ななおもて」と読んでいます。

※日蓮聖人が身延山頂の大石で説法中に熱心に聞いている美女がいた。周囲の人が不審に思ったので聖人が花瓶の水をかけると美女は龍となったが、直ぐに元の姿に戻り、七面山に住む七面天女（七面大明神）であると告げ、七面山に向け飛び去ったという故事に取材。

1416 七面大明神応現図（画像：東京国立博物館）

●肉筆画「菊図」（絹本着色双幅。細密画。一对掛け軸。（右図落款）八十八老人卍敬筆。印葛しか。（左図落款）齢八十八歳卍筆。印葛しか。各 95.5×31.4。北斎館蔵）

※ベンガラ（酸化鉄を主成分とした赤色顔料）の赤と青の菊が描かれる。対画の落款がそれぞれ違うことから、あるいは北斎没後に應為が高井鴻山から注文を受けた作品の作かとの考察もある（キャサリン・ゴビエ『北斎と応為』p289 彩流社。鈴木由紀子『浮世絵の女たち』p206 幻冬舎）。

左図中央の外側が黄金色、内側が深紅色の菊は「巴錦」という種類という。

北斎も描いたこともあり巴錦の伝承の地を示す石碑が、小布施の玄照寺（長野県小布施町大字大島90）に2009年11月4日に建てられた。

1417 菊図（北斎館）



●肉筆画「紅葉に雁図」（絹本着色一幅。八十八老卍敬筆。印百。85.1×35.3。個人蔵）

※地上に二枚の紅葉があり、その側で雁が散り落ちてくる一枚の紅葉を鳴きながら、首を伸ばして眺めている。

●肉筆画「流水に鴨図」（絹本着色一幅。齢八十八老卍敬筆。印百。111.2×40.3。大英博物館蔵）



※左上から右下に波が流れ、その中に二羽の鴨がいる。一羽は首を水面下に入れている。水面には紅葉や水草が描かれる。

1418 流水に鴨図 (大英博物館)

●肉筆画「源三位頼政図」(絹本着色一幅。八十八老人卍筆。印百。99.0×42.2 ファインパーク・コレクション蔵)

※頼政の鶴退治の図だが、頼政が天空に向けて弓を射る姿を描き、鶴は描かれない。背景に稲妻が線状に描かれる。



●肉筆画「雷神図」(紙本着色一幅。八十八老人卍筆。印百 126.8×53.6。フリーア美術館蔵)

※手を振りあげ太鼓を打ち鳴らし、牙を剥いて、黒々とした天空で下界を睨む赤い雷神。赤い閃光が二本光り、一面に黒い飛沫が広がっている。

1419 雷神図 (フリーア美術館)

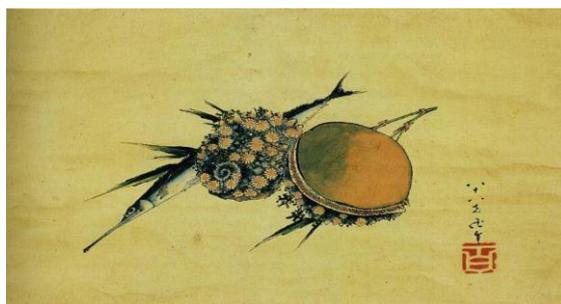
●肉筆画「隅田川」(八十八老人卍筆。川田順三『江戸=東京の下町から一生きられた記憶への旅』p110より)

●肉筆画「鮑に細魚図」(「鮑に細魚図」とも。紙本着色一幅。八十八老人卍筆。印百。

中外産業株式会社：原安二郎コレクション蔵)

1420 鮑に細魚図 (原安二郎コレクション)

※笹の葉に乗せられた鮑と、たふじつぼが付いた鮑。くちばしの細いさよりの静物画。



【中島鉄蔵藤原為一の落款】

●肉筆画「松に鷲」(「鷲図」「雪中鷲図」とも。紙本着色一幅。俗姓中島鉄蔵藤原为一筆。印葛しか。印北斎宗理。143.8×70.5 北斎館蔵)

※『葛飾北斎伝』岩波文庫版の鈴木重三の解説では、『葛飾北斎伝』の稿本(刊行本ではない)に次のように書かれていることを紹介している。

「近頃一閑せし翁か八十八歳の時に画きたる鷲の図の一幅ハ紙本なれども甚だ珍しき落款ニ、前北斎画狂老人卍俗称中島鉄蔵藤原为一齡八十八歳とあり。上ニ田辺石庵氏の小文あり。(石庵ハ旧元老院議官たり。田辺太一氏の父なり)其の文の大意ハ徳川旗本の士某下総葛飾の堀江村ニ於きて大なる鷲を射て幕府に上る。幕府其の功を賞して秩禄を加ふ。某大ニ喜ひ、北斎を招きて、其の鷲の真形を写さしめ、田辺氏をして其の上ニ題せしめたることを記せるなり(略)」(p384 句読点・ルビは筆者による)。

※「俗姓中島鉄蔵藤原为一筆」の署名は、天保15年(1844)「龍図」、弘化4年(1847)「郭子儀子孫繁栄図」(絹本着色一幅)、嘉永元年(1848)「獅子図」(紙本着色一幅)

にも用いられている。

※松の枝に止まるのか飛び立つのか、獲物を狙うような目つきで下を見る鷲。

●肉筆画「郭子儀子孫繁栄図」（「郭子儀繁栄図」とも。絹本着色一幅。前北斎改画狂老人卍。俗称中島鉄蔵藤原為一 齢八十八歳。印百 100.3×42.1 個人蔵）

※図中央に白い軍配を手にして椅子に座る郭子儀と、その横の夫人が多くの子どもに囲まれている。図右に柱が立てられ、下に北斎の落款と印影が書かれている。色彩や描き方から応為の手が入っているとする見方もある。北斎は享和年間にも、腕を組んで立つ郭子儀の後に番号札を持った多くの芥子坊主頭の子どもがいる図を描いている（画狂人北斎画。

印亀毛蛇足）

郭子儀は、唐の武将。後に汾陽王となった。子宝で家人三千人ともいわれ、皆栄達し、郭子儀も長寿であったため、めでたい画材として取り上げられる。

●肉筆画「南瓜花と虻」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。92.5×28.2 すみだ北斎美術館蔵）

※画面下に南瓜の葉と弦が描かれ、中央に大きく花が開いている。その花をめがけて図の上から虻が飛んで来る。虻の羽は細かく羽ばたいているように暈して描かれる。文政9年～天保5年にも「南瓜に虻」を描いている。

●扇面画「吾木香に蝶」（紙本墨画淡彩扇面一面。十面添付された扇面画帖の一。八十八老人卍筆。印百。上弦46.3、下弦20.0×18.2 フリーア美術館蔵）

※扇の中央に吾木香と、その側で羽ばたく蝶を描く。

●扇面画「手妻図」（紙本墨画淡彩扇面一面。十面添付された扇面画帖の一。上弦46.3、下弦20.3×18.4 八十八老人卍筆。印百。フリーア美術館蔵）

※「手妻」は手品のこと。手を稲妻のように素早く動かすことから名づけられたという。図は向こうむきで扇子を操っている手妻師を描く。

●扇面画「亀図」（扇面着色。八十八老卍筆。印應。18.5×47.0 所在不明）

※北斎の落款に、応為の印「應」が押されている。何らかの事情で娘の応為の「應」印を使用したのか、あるいは応為が描いて北斎の落款を書いたか不明。

図は緑の水草と一匹の亀を描く、亀の足元の水草は黄みがかっている（久保田一洋『北斎娘 応為栄女』図版23より）。

●肉筆画「不二図」（「富嶽図」「富士に松図」とも。絹本着色一幅。八十八老人卍筆。印百。28.7×37.6 個人蔵）

※図中央に二本の松が伸び、その二本の幹の間に富士を描き、松の左右の線に裾野が流れるように描かれる。 1421 不二図 (intojapanwaraku.com より転載)

●肉筆画「波濤図」（絹本着色一幅。もと掛画。八十八老人卍筆。印葛しか。126.0×46.7 フリーア美術館蔵）





※岩頭下にはいわゆる北斎の波が青くうねっている。岩上には横に擦ったようにぼかした松が薄緑で描かれる。図上には薄く青空が描かれる、前年の「波濤図」と同画趣だが左右反対になっている。

1422 波濤図（フリーア美術館：紬プロジェクト複製すみだ北斎美術館）

●肉筆画「宝珠図」（「宝珠に寿」とも。紙本着色墨画一幅。

ひのとひつじ 丁未八十八老卍 印百 31.6×44.5 個人蔵

※一気に墨で丸く宝珠を描き、その筆先から「寿」の字が流れ出るように次第に小さくなって八文字記される。

●肉筆画「河骨に鶉図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。126.1×47.8 大英博物館蔵）

※河骨はスイレン科の多年草で、小川や池沼に生え、黄色の花弁を付け、長楕円形の葉を持つ。その河骨の咲く水辺の杭にとまり、視線を右に向けている鶉を描く。



1423 河骨に鶉図（大英博物館）

鶉が左に向いて、近くの白鷺を見ている図が「葛飾北斎筆 鳥鷺図 二枚折 金屏風半双 竪四尺四寸七分 巾三尺九寸七分 不染居為一筆 印葛しか 注1」として有名な贋作事件注2に出品された。

注1) 葛しか：この印影は、当時「天狗」と称された。

注2) 贋作事件：昭和9年5月12～14日の春峯庵事件といわれる贋作オーディション事件。北斎他浮世絵等67点が全て贋作であった。⇒天保14年「卍翁艸筆画譜」の項参照。

●肉筆画「胡蝶の夢図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。93.1×28.3 大英博物館蔵）

※『莊子』にある話で、莊子が夢で胡蝶になり、目覚めて、自分が蝶になった夢を見たのか、蝶が自分になった夢を見たのか分からなくなったという内容を絵にしたもの。座っている莊子の頭上に5匹の蝶が舞っている。

●肉筆画「柳に燕図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。126.2×53.4 すみだ北斎美術館蔵）

※柳の周りを飛び回る五羽の燕の図。 1424 柳に燕図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「鉢叩き図」（紙本着色一面。もと掛軸。八十八老卍筆。印百。126.3×52.2 フリーア美術館蔵）

※細長く伸びる松を背にして、頭巾を被り布包を背負った鉢叩きが背中を向けて歩く。墨染の衣の裾が風に煽られている。鉢叩きは、空也を祖とする踊念仏の一種だが、江戸時代には門付芸にもなった。陰暦11月13日の空也忌から大晦日までの48日間、鉦や瓢箪を叩き



ながら行うものが有名（「デジタル大辞泉」による）。



●肉筆画「藻魚図」（表装色紙判着色。八十八老叢。印縦長の「百」。2019年、日本で発見。個人蔵）

※メバルを描く。表装に江戸の料理屋八百善の献立が書かれているという。

1425 藻魚図（日本経済新聞より転載）

●肉筆画「宝珠を搗く月兎図」（紙本着色一幅。八十八老叢筆。印百。82.2×27.8 個人蔵）

※白に入った宝珠を縦杵で搗く兎の図。

●肉筆画「都鳥に西瓜図」（絹本着色一幅。八十八老叢筆。印百。30.0×34.3 個人蔵）

※2012「北斎風景・美人・奇想展」図録（大阪市立美術館展示）。

●肉筆画「弘法大師修法図」（弘化年間〈1844～48〉。紙本着色一幅。無款。150.0×240.0 西新井大師総持寺蔵）

1426 弘法大師修法図（西新井大師総持寺）

※弘法大師が病魔を収めようとして加持をしている前に、巨大な鬼となった病魔が姿を現し金棒と縄を持って大師に襲いかかろうとしている。大師の背後では老木に身を巻きつけながら、病魔に向かって吠える犬（狼とする見方もある）がいる。



※制作時には現在の掛幅ではなく扁額であったらしい。昭和58年(1983)に発見され公開された。毎年10月第一土曜に開帳する。

※荒井勉『北斎の隠し絵』によれば、紙絵にしては大きすぎることに、粗末な顔料しか使われていないことから、額絵の前の下絵であるとする（p220）。

| | | | | |
|---------------------|---------------|-----------|-------------------|-------|
| 弘化5/嘉永元(1848/2/28～) | 戊申 | 89歳 | 前北斎写、前北斎為一、 | 齢八十九歳 |
| 画狂老人叢、無筆八右衛門、 | 画狂老人叢、前北斎叢老人、 | 叢老人筆 | 齢八十九歳、 | |
| 八十八老叢（前年）、 | 齢八十九歳、八十九歳老人、 | 八十九老叢老人叢、 | 八十九歳叢、 | |
| 八十九歳叢為一、 | 齢八十九歳叢老人、 | 叢老人筆 | 齢八十九歳、俗姓中島鐵藏藤原為一筆 | 齢 |
| 八十九歳、画狂老人叢筆 | 齢八十九歳、眼鏡不用叢筆 | 齢八十九歳 | 印百、葛しか：阿栄 | |

(51)

◇長崎の通詞本木昌造ら、オランダより鉛活字を購入。

◇佐久間象山、大砲を製造。

◇6月7日（西暦）、ゴーギャン生（～1903）。

◇7月22日、溪齋英泉没（59）。

【馬琴没す】

◇9月16日、^{きょくていばきん}曲亭馬琴食あたりか。喘息も発症。10月12日、喘息、胸痛。10月18日、^{まぼと}真鳩の黒焼を服用。11月6日、七ツ上刻（午前5時頃）没（82歳）。辞世「世の中のやくをのがれて もとのまま かへすはあめとつちの人形」。11月7日、通夜。11月8日、出棺。墓は深光寺（現東京都文京区小日向4-9-5）。戒名：^{ちやくさくどういんとうきりゅうこじ}著作堂隠誉簀笠居士。
○阿栄、^{あらい}栄為應女名で『^{せんちあしひきのく}煎茶手引の種』（茶道書。^{やまもととりのうけん}山本都竜軒作）。見開き挿図を描く。



1427 煎茶手引きの種（国立国会図書館）

★^{きょくていばきん}曲亭馬琴、『^{きょくていらいかんしゅう}曲亭来簡集』（別添朱記）で北斎を評して「名ヲかゆるとはこのをとこほどしばしばなるはなし」と述べる。

【長寿会では自分が一番壮健】

★正月18日、^{たかいこうざん}高井鴻山の招きの書状に対する返信に「（^{かみしも}頭書に^{かみしも}袷を着て平伏している自画像あり）直ちに出發できないが、自筆の^{うしじま}牛嶋天神額の^{とうどう}開帳と^{かすまへ}藤堂邸の襖絵をすまして三月半ば過ぎに出發する」旨を書き送る。その際、昨年湯島で尚齒会（長寿会）があり、九十、百歳の知人が集まった中で、自分（北斎）が最も壮健であった旨も記された（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊。p30）。

【北斎デザインの立体造形物】

★4月、江戸の人形師^{まつごろう}松五郎に彫らせた^{おぶせ}小布施上町屋台のための^{あうりゆう}応龍（天に昇る龍）の彫刻を高井鴻山に送る（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊。p19）。

1428 応龍と皇孫勝

北斎のデザインによる唯一の立体造形物といわれる。また、^{おぶせ}小布施高井村の^{かみはら}亀原和田三郎^{かみはら}嘉博（^{わだしろう}和田四郎とも）に同時に彫らせた同屋台のための「^{こうそんしょう}皇孫勝」（『三国志』に登場する武将）は、なかなか北斎の許可が出ず七回も改作させられたという。



【四度目の小布施行き？】

★5月小布施へ。この時お栄を伴ったか。11月までに^{がんしょういん}岩松院の天井絵を描きあげる（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊。p19）。

※この年の小布施行きを疑問視する向きもある。6月5日頃には江戸で^{ほくよう}北曜が北斎と面会

しているの、北斎が現地で描いたのではなく、江戸にいた北斎の下絵の彩色の指示により、鴻山が彩色したとされる。あるいは、北曜と面会后、10月に小布施に向け出発したかもしれない。

【北斎の画は「画」というしかない】

※小布施の高井鴻山の言を尾崎周道が『北斎 ある画狂人の生涯』（p195）で紹介している。原文は白文（仮の読み下しと句読点は筆者による）

「翁之画、謂之逼真可乎。曰不可。下箇遍字与真有問（間か）焉。曰直謂之真可乎。曰不可。戈説真便己不是真。曰然。則謂之神之妙不可乎。曰然。則不可得而言乎。曰然矣。雖然物不可以無名、則姑強為之名、謂之画而已」（「題葛老人画」よりとしているが出典不明）

尾崎周道による意識。

（北斎の絵は、この世のありとあらゆるものの真に迫っているといつてよいだろうか。否。迫るといふのは、真との間にまだへだたりがある。では真そのものだというべきだろうか。否。真だと言葉でいえるものは真そのものではない。では、北斎の絵は言葉でいいあらわせないものなのだろうか。そうだ。言葉でいいあらわせないのが北斎の絵だ。しかし物にはすべて名がある。強いていうならば北斎の絵は、「絵である」というよりほかはない）。

【北斎、終焉の地に移る】

★6月、本所亀沢町から浅草聖天町遍照院注に移るか。「画帖、色紙、扇面の儀、固く御辞退申上候」

注) 明治10年に出された記録では、遍照院は「天台宗 武蔵国豊島郡浅草浅草寺寺中

武蔵国豊島郡浅草聖天横町貳拾六番地」（現東京都台東区浅草6-37-12）で、北斎住居当時と変わらない。（台東区文化財調査報告書 第六集（基礎資料編Ⅱ）『天台宗細簿（旧浅草区）明治十年』東京都台東区教育委員会 昭和62年）

※一般に、上記記録の遍照院境内図では、境内西側に「六間小舎」とある。俗に「狸長屋」と呼ばれた長屋で、ここに住んだという。但し、聖天町と聖天横町が同所とは限らない。浮世絵師で終焉の地が明確なのは北斎だけとされる。

【本間北曜、晩年の北斎の弟子になる】

★本間北曜、北斎が弘化4年（1847）2月に小布施から帰った直後に門人となる。

※本間北曜は、蘭学者。浮世絵師。出羽国（山形県）酒田の豪商本間一族の出身。北斎没後は国事に関心を持つようになる。ジョン万次郎や榎本武揚と交流があり、島津斉彬や西郷隆盛とも面識があった。阿片戦争の教訓から、日本も自立すべきだとして株式会社を設立して産業を振興する必要があるとした。最後は毒殺されたといわれる。

※本間北曜は、この年5月22日酒田を発ち、6月4日に江戸に着いた。翌6月5日に北斎と浅草の仮宅で面談する。その後、京都、広島を経て、長崎に8月2日に到着している。

「九ツ半（午後1時）浅草寺順拝直様卍翁訪候 处在宅ニ而珍敷夕方迄咄致暮方帰宅仕候」（本間北曜『西肥長崎行日記』嘉永元年条）。

※6月8日、北曜、再度北斎と面談。

「今日叟翁訪認物を貰歸宅長崎に而キタコと魚物写可致趣承知いたし歸宅」(同上)。

「認物」は、後述「鬼図」のこと。落款に「嘉永元戊申六月八日 門人北曜子於くる 齡八十九歳画狂老人叟筆 印百」と記す。これから長崎に行く北曜へこの図を贈った。

「キタコ」は、うつぼをいう。長崎で魚物を写してくるよう依頼されたのである。

この時「日新除魔図」(10図)を譲られたとされる。

★10月、最後の小布施行きに出発したか。

【93回の転居をする】

★関根只誠(1825~93)、聖天町の居宅を訪ね、北斎の転居は93回であると聞かされる。

「予がまみへし嘉永元申年なり、其居聖天町に住めり、是迄に九十三度目と云き」と記している。この時の印象を「頭髮白くして面貌瘦せたり」「瘦せて鼻日常人に異ならざれどもただ耳は頗る巨大なり」「氣力青年のごとく、百歳余も生きぬべし」などと記している(関根只誠版『増補浮世絵類考』)。

『葛飾北斎伝』では、同様のことを「関根氏、嘗て浅草なる翁の居を訪ひし時、翁は破れたる衣を着て、机にむかひ、其の傍に、食物を包みし竹の皮など、取りちらしありて、甚不潔なりしが、娘阿栄も、其の塵埃の中に座して画き居たりし。其の頃翁年八十九、頭髮白くして、面貌瘦せたりと雖、氣力青年のごとく、百歳の余も生きぬべしとおもひしが、俄然九十にして死せり」(p198~199 ルビは筆者)と記している。

【転居三百、百庵にならひ】

★四方(柳亭)梅彦談「転居三百(割注:転居三百は、転居の費用は、如何なる貧人にも、三百文位は、費やすといふ諺なり、三百文は即今の三錢なり。)転居すること、先生の如くなれば、たとひ富有なるも、終に費用に追はれ、貧窮に陥るべし。先生時に居宅の汚穢を厭ひ、転居せんとおもひ給はゞ、人をして、全家を掃除せしめて、可なるべし。翁微笑して曰く、幕府の表坊主に、寺町百庵(脚注:越智氏。通称三知。俳人。江戸の人。天禄八~天明元年、一六九五~一七八一)といふ人あり。此の人、生涯に、転居百回すべしとて、自百庵と号し、既に今は九十有余回の転居をなせり。余もまた百庵にならひ、百回の転居をなし、しかして死所を卜すべしと」(『葛飾北斎伝』p226)。

※四方梅彦の引越し祝いの狂歌「百越すもおろか千里の馬道へ まんねんちかくきたの翁は」(荒井勉『北斎の隠し絵』p190)。「まんねん」は、近所の菓子屋「万年屋」に掛ける。「きた」は、「万年布団」ならぬ「万年着ている」と北斎の「北」に掛ける。

★11月、河原崎座の顔見世を見に行く。『花江都歌舞伎年代記』に「(略)此度小団次のちよこ平の立廻りは以前梅玉の勤しよりはたての間も長く大に出来よかりしと前北斎為一翁の話なり(略)」とある(『年譜』による)。

【身体は壮健、歩行は自由】

★斎藤月岑(1804~78)『睡余操觚』の記事の現代訳を2005年『北斎展図録』所収小林忠「画狂人北斎の実像」(p25)よりそのまま転載する。

「(略) 今年嘉永元年(1848)に八十九歳になっているが、身体は壮健で、歩行は自在である。目は絵を描くときに眼鏡を用いている。今も精細な絵(「細画」)を描いている。これまでに何十度となく転居を繰り返している。いずれのところでも借家で、狭い家ばかりだった。末の娘の「ゑい」(栄、応為のこと)が父に似て、食事をしても食器を洗わず、そのままに打ち捨ててかえりみない。浮世絵師ナンタク(南沢等明)の妻となったが、離縁されて父と同居している。年は五十歳ほどである。絵を描き、為一の名で刊行される版画の下絵は多くこの娘が描いている。(略) 生の魚を人からもらうことがあっても、煮たり焼いたりするのが面倒くさいと、大方は人にあげてしまうということである。以上、成瀬吉右衛門という方に聞いた話である」()内は筆者による。

【金銭を得るも、消費すること土芥のごとし。常に赤貧】

★「翁は、酒を嗜まず、茶を好まざれども、常に貧し、衣服破れたりとも雖も厭はず。金銭を得るといへども、敢て貯ふの意なく、これを消費すること、恰も土芥(筆者注：土とごみ。価値のない物のたとえ)のごとし。当時通常の画工の画料は、絵本類一丁、金二朱(割注：今の十二銭五厘。)より多からざるが、北斎は、一丁金壹分(割注：即廿五銭)にして、得る所頗る多しといふべし。然れども、常に赤貧にして、衣服寒を凌ぐに足らざること、屢これあり。これ、金銭を貯ふに意なく、其の心唯一に絵画に専なるを以てなり」(『葛飾北斎伝』p197~198 ルビは筆者)。

※絵本一丁、二ページ分の下絵で通常は二朱(約1万2千円)のところを一分(約2万1千円)を受け取っていたにもかかわらず、老年の北斎はいつも貧しかったのは、絵に専心したためという。

※当時の価格：一朱=240文(ビタ銭)、一朱16つぶ=一両、一分=四朱(1/4両)

★北斎の画料：並寸肉筆軸物(三分内外)、版画大判(二分内外)、刊本挿絵一枚(一分) ちなみに当時の相場：百文=米二合五勺、260文=砂糖一斤。4文=大福餅一つ。

※1文=25円で換算。

●絵手本『北斎画譜』中巻(淡彩摺。永楽屋東四郎版。22.8×15.8 山口県立萩美術館蔵)

※天保初年頃の上巻に続くもの。文政2年(1819)刊『北斎図式』の21図と、文政3年(1820)『良美瀧筆』の図を加え、改題改刷したもの。下巻は嘉永2年か。

【画法・画論を展開する『画本彩色通』】

●絵手本『画本彩色通』1月。中本墨摺。

初編一冊26丁。扉に「画狂老人卍筆 絵本彩色通 初編 戊申端月発兌 山口屋藤兵衛 小林新兵衛 和泉屋市兵衛」とある。自序に「無筆八右衛門が曰」とある。

二編一冊26丁。見返しに「前北斎卍老人著 錦耕堂(山口屋藤兵衛) 甘泉堂(和泉屋市兵衛) 崇山房(小林新兵衛)」とある。豊介子の序文あり。奥付には「弘化五甲年正月発行」とある。

各冊 18.2×13.0 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/ブル
 ガー・コレクション/東洋文庫/名古屋市蓬左文庫/
 大英博物館/フリーア美術館蔵) 後編は未刊。
 初編と二編の同時刊行。

【油絵の具の調法を示す】

※油絵具の作り方解説あり。①鉛の鉄砲玉を削り、②削った鉄砲玉と油を七十日、土の中に埋め、③それを紙で濾して絵具とするよう示す。 1429 初編 絵具の製法 (すみだ北斎美術館)



※初・二編とも北斎の肉筆鳥獣花の図柄に共通するデッサンが多くある。

【己六歳より八十八年独立して、心に怠らざりし事】

※初編序文「無筆八右衛門が曰。画を好る児童の為にとて、成し安きさみしき (彩色) のミをくり出して一小冊となし、彩色通と題す。己六歳より八十八年独立して、心に怠らざりし事を、いかでか今方寸の昏中に演尽すことを得べき。唯赤きと紅のひとしからざる、藍と緑の別ちある、或ハ円方長短の形を説示すの外ハ能はざるなり。されど編を継ぎ冊を重るにいたらバ、大洋の烈しき急流の尖き池水の平らかなる、惣て生る所により各その強弱異なり、翼あつて高く飛ず、赤花咲て実を結ばざるまで正し知らしむるにいたらバ、千里一步の勞をいとはず、此業に遊べる同志の輩に対し、鳥漕がましくも晶山の片玉を机上にてらし合せて、寸的の違はざる事もあらバ、我この道に杖突きたるしるしともなるべきもの歟」 (『北斎の絵手本 三』及び『葛飾北斎伝』 pP266)

【陰影法について】

☆陰影法については初編最終丁で次のように述べている。

「(略) 扱ヨウロウツパの隈どりと、天朝の彩色の隈とハ、表裏のたがひなり。中華扶桑ハ共に垂細垂大洲にて、絵のくまどりハ、模様と同じことのやうに心得、またハ金泥くゝりなど加へ、円方浮沈のためにハあらず。彼も知り是も辨へ画く所死活なくんバあるべからざるや。画李彩色通畢」

「てりぐまとは物の高く日にあたりたる所を見する事をいふなり。かげぐまとは日かげになりて闇く見ゆる所をせんがゆえなり。かげひなたあらざればさみしき (彩色) とはいひがたし」

※最終丁の跋文に続刊の計画と、絵に対する思いを述べている。

【九十歳よりハ又々画風を改め、百才の後にいたりてハ此道を改革せん】

「今出す所のさいしき通ハ、山川草木鳥けだものむし魚のたぐひはいふにおよはず、衣服のもやう人物の肉あいより、武具馬具に及び、一さいの道具、風雨のふぜい、月かげの隈どりまで、委しくおしへ、すゑぐにいたりてハ、蹶の内にもものゝすけて見ゆる羅のかゝりて下のもやうのうつりしまでも、ゑのぐのしかた、くまどりのやうす、画をこのめる童の、おほへやすからん事を、導くの一本なり。また本のいやしきは、価ひくゝして求

めやすからんが為なり。編を次ぎ冊を重ねるにいたりてハ、我八十余年のうち、種々修行せし事とも、悉く伝ふことをいふ。九十歳よりハ又々画風を改め、百才の後^{のち}にいたりてハ此道を改革せんことをのミねがふ。長寿くんし（君子）わが言のたかハざるをしりたまふべし」（『北斎の絵手本 三』及び『葛飾北斎伝』 p 268）

※続編も企画したようだが、翌年に逝去したため中断したという（永田生慈『北斎の本懐』角川新書 p 111）。

※カロリーヌ・レッタによると、お栄が中心的に描いたものとする。理由①北斎の最期に近すぎる。②本の挿絵が、お栄作といわれる小布施の書簡の絵に似ている。③お栄特有の色使いである（Caroline Retta, "Hokusai's Treatise on Colouring" 『北斎と応為』 p 293）

●墨画「日新除魔図」10 図（紙本墨画 北斎館蔵）

※本間北曜に与えた図。北斎のいつの作なのか不明だが、この年に門人になっているので、この時に譲られたものと思われる。

注：佐藤七郎氏「北曜の『旅日記』と北斎」（昭和 53 年 11 月 8 日「信濃毎日新聞」掲載）によれば 10 図としている。以下、寸法記載のある 8 図は 2019 年 12 月『北斎 視覚のマジック展図録』（すみだ北斎美術館）による。

☆〈十月十日〉（31.9×23.4 右向きの唐獅子を真横から描く。

獅子は顔を上に向け、左前足を高く上げた獅子） 1430 十月十日



☆〈十月十一日〉（32.0×23.5 図の下に向けた逆さまで、右前足を前に出して体が図の上を向いている）



1431 十月十一日

☆〈十月廿三日〉（32.0×23.0 扇子に⊖の字が書かれた扇子と幣を持って踊る獅子）

☆〈十月廿四日〉（扇子に⊕の字が書かれたものと幣を持って踊る獅子）

☆〈十月廿五日〉（31.8×23.0 扇子とたて髪に⊕の字が書かれた扇子を持って、後ろ向きに踊る獅子）

☆〈十月廿六日〉（31.9×23.0 ⊕と書かれた扇子を左手に持ち、右手で幣をかざしながら右足をあげて踊る獅子）

☆〈十一月五日〉（32.0×22.8 扇子に⊕の字が書かれたものと刀を持って右足を揚げて踊る獅子） 1432 十一月五日



☆〈霜月十三日〉

1433 霜月十三日



(30.2×22.4 左手と左足を上げ、右手の刀で⊕の字が書かれている扇子を二つに切る獅子)

☆〈霜月十八日〉(29.7×23.0 右手で弊を持ち上げ、左手で扇子に⊖の字が書かれたものを顔の前に差出して踊る獅子)

☆〈霜月廿五日〉(30.5×23.1 両手に弊を持ち上下に構え、右足を上げて踊る獅子)

※本間北曜所蔵の獅子図は他に2図あるという。また、松代藩家老小山田老岐旧蔵の「日新除魔」14点が画帖で伝わっているという(『北斎 視覚のマジック展図録』p149)。

●絵手本『絵本庭訓往来』二・三編(墨摺。前北斎写、他。永楽屋東四郎版)

●絵手本『秀雅百人一首』(1月。一冊。緑亭川柳輯。八十八老叢筆(前年の作画のため)。山口屋藤兵衛他版。国立国会図書館/尾道市立大学附属図書館蔵)

※口絵と20人の肖像を描く。奥付に、北斎が描いた範囲を「画工 口絵及従一至十 前北斎卅老人」と記してある。他に、一勇斎国芳、柳川重信(二代)、溪斎英泉、一陽斎豊国(三代)などが描く。

●絵手本『花鳥画伝』初編(前北斎為一。須原屋新兵衛版。国立国会図書館蔵)

※国立国会図書館の大蔵孫兵衛版(明治22年)には、「著画者 前北斎為一」とある。鳳凰、鶴、文鳥、加奈阿利など数種の鳥の絵と紅葉など数種の植物を組み合わせた絵本。

●料理本『即席素人包丁』(小本着色一冊。四季山人著。八十九歳卅為一。版元名、刊行記なし。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※北斎は「初茸の図」一途を描く。他に溪斎英泉、歌川国芳などが描く。

【制作年の分る最後の摺物・錦絵】

●摺物『地方測量之図』(3月。大大判色摺。応需齢八十九歳卅老人筆。39.5×53.2 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/明治大学刑事博物館/誓教寺/クラブホーン・コレクション蔵)

※「袋」の表書きには「量地之図」とある。測量方の役人が高低の角度を測る大方儀だいほうぎや小方儀しょうほうぎを用いて土地を測量する様子を描く。図中の説明によれば、測量の師である初代と二代目の長谷川善左衛門の功績を称え、初学の人を啓蒙するためにこの図を作ったものという。また、図には門人三人の名と、「地方測量術免許」とあるので、測量免許を与える祝いの図でもあったと思われる。おそらく北斎の一枚摺物としては最後の作品といわれる(『原色浮世絵大事典』8巻p90)。



1434 地方測量之図(すみだ北斎美術館)

●肉筆画「狐狸図」(重要美術品。紙本着色双幅。卅老人筆齢八十九歳。印百。各123.6×57.9 京都国立博物館寄託・個人蔵)

※右図は、狂言「吼噓」に登場する老狐で白蔵主という僧に化けているが、好物の鼠を

餌にした罾に心を惹かれている様子の図。左図は、茂林寺の狸で、寛政7年～10年作の「分福茶釜図」にも描かれている。

1435 狐狸図 (ameblo.jp より)

●肉筆画「唐獅子図」(紙本着色一幅。俗姓中島鐵蔵藤原為一筆 齢八十九歳。印百。73.0×29.5 個人蔵)

※いわゆる「日新除魔図」とは別に、やや大きめの紙に藍と薄赤で彩色した図。弘化元年(1844)にも「唐獅子図」を描いている。



●肉筆画「紅葉掃除の童子図」(絹本一幅着色。

齢八十九歳卅老人筆 印百 34.2×42.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※紅葉や松葉を熊手で集めて掃除している童子が、籠を脇に置いて腕を組みながら、下を向いて腰を下ろして休んでいる。

●岩松院天井絵「八方睨み鳳凰図」(檜板着色。12枚のブロックを組み合わせた21畳分。昨年(弘化4年)より一年で手がける。630.0×550.0 岩松院蔵)

※小布施の『歴代枢要書』では弘化4年(1847)作としているが、実際には翌年の嘉永元年(1848)完成と見られている。

※高井鴻山の描いた下絵に彩色を依頼された北斎が色を指定し、それにより鴻山が色づけをしたとされていたが、その後、北斎自身が下絵を描いて鴻山に送ったことが明らかになったという(久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』(p87))。(弘化2年：1845条を参照)。

※下絵の背景は黒だが、完成図は4400枚の金箔となっている。色彩部分は阿栄の手が入っているかしのれないという見方もある。

※検証の結果、絵皿を置いた跡や髪の毛が一本あったといわれ、床で描いたものを天上に持ちあげたことが判明している(市川次夫：北斎館理事長「小布施における北斎顕彰運動の歴史」：2019年2月9日第一回国際北斎学会講演より)。



1436 岩松院天井画「鳳凰図」

●肉筆画「**鬼図**」（「**着衣鬼図**」とも。6月5日～8日の作。紙本着色一幅。嘉永元年戊申年六月八日門人北曜におくる 齢八十九歳。印百。58.2×56.2 佐野美術館蔵）

※刺身と酒德利を前にした鬼の図。

※北斎の門人本間北曜（本間光喜。天保14年：1843に弟子入り）が長崎に向かう途中、6月8日に浅草でこの図を受け取っていることが、北曜の日記『西肥長崎行日記』に記されている。「九ツ半浅草寺順拜直様出翁訪候 処在宅二而甚珍敷夕方迄咄致暮方帰宅仕候」（嘉永元年六月五日条）。

「今日己翁訪認物注1を貰帰宅長崎に而キタコ注2と魚物写可致趣承知いたし帰宅」（『北斎美術館 5』p156。ルビは筆者による）。⇒本年条【本間北曜、晩年の北斎の弟子になる】を参照。 1437 鬼図（佐野美術館）



庄内藩士の池田玄斎が嘉永4年（1851）に追賛した。「世の中は虎狼も なのみにて衣をきたるおにそ かしこき 七十七叟玄斎」が記される。

注1) 認物：「鬼図」を指す。

注2) キタコ：ウツボのこと。ウツボと魚類を写してほしいと依頼したのである。

※法衣に身を包んだ赤鬼の前には、刺身の乗った皿と青の波模様の德利と箸と数珠が置かれている。それらをじっと眺める赤鬼。

●肉筆画「**生首図**」（絹本着色一幅。八十九老人己筆。33.3×40.9 北斎館蔵）

※見開いた目、死斑の浮き出た頬や首、血の気の引いた歯茎、鼻や耳・口からも出血している、ざんばら髪（ざんぱら）の男の首には縄がある。男の顔は上を向いている。近年欧州から戻ってきた絵という。「生首図」は天保13年（1842）、文化7年～11年（1810～14）にも描いている。

●肉筆画「**ほととぎすと虹図**」（紙本着色一幅。己老人筆 齢八十九歳 印百。116.0×49.0 個人蔵）

※空から木立に向かって下りて来るほととぎすが鳴き声をあげ、図の上部には薄く虹がかかっている。『肉筆画帖』（天保6年）にも「虹と小鳥（ほととぎす）」で同画趣を描いている。

1438 ほととぎすと虹図（2017『HOKUSAI 北斎 富士を超えて』展より転載）

●肉筆画「**鴨**」（紙本着色一幅。画狂老人己筆 齢八十九歳。印葛しか。29.5×39.5 北斎館蔵）

※水面を泳ぐ一羽の鴨と、水中に体半分と首を突っ込むもう一羽の鴨。鴨の動きによる水の波紋と水草が広がる。

●肉筆画「**三すくみ**」（絹本着色一幅。画狂老人己筆 齢八十九歳。印百。50.9×67.4 井上和雄『北斎』による）





※蛇とナメクジと蛙が向き合っている図。緑の丸瓦に這うナメクジが印象的。

1439 三すくみ (kumareon.wordpress.com より転載)

●肉筆画「富士見西行図」(表装色紙判着色。八十九歳卍筆。印縦長の「百」。個人蔵)

※2016 年米国で発見。笠を背にした西行が杖を肩に



して座って右方向を眺めている。図上部に山の峰が連なるが富士は描かれない。縦長の「百」印は 88 歳以降に用いられる。

1440 富士見西行図 (日本経済新聞より転載)

●扇面肉筆画「富士見西行図」(扇面着色一幅。八十九歳卍筆。印縦長の「百」。ボストン美術館蔵)

※富士と橋が描かれる西行図。

●肉筆画「雲龍図」(絹本着色一幅。画狂老人卍筆 齢八十九歳。印百。74.5×27.0 個人蔵)

●摺物「松に月」(色摺。眼鏡不用卍筆齢八十九歳 印百 18.1×25.4 ボストン美術館蔵)

※図の右下から中央に向けて松の巨木を描き、図の左に突き出す二本の枝の間に満月が薄く描かれる。

【小布施にある北斎画】

※『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』(由良哲次：岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊。P33) では、以下の作品が「小布施にあり、または小布施来歴と推せられる八十九歳書きの図」(肉筆)として紹介している。

- 「衛士が社頭の鳥居を塗装している図」
- 「蛇と蛙の図」(本稿：嘉永元年「三すくみ図」か)
- 「虹に時鳥の図」(本稿：嘉永元年「ほととぎすど虹図」か)
- 「ひらめにかじきの図」(本稿：天保 11～嘉永 2 年「魚貝図」か)
- 「獅子図」(本稿：嘉永元年「獅子図」か)
- 「月下竹林骸骨図」(本稿：嘉永 2 年「骸骨図」か)

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---------|------|-------|---------|-------|-------|----|-------|------|-------|------|-----|---------|
| 嘉永2(1849) | つちのととり | 90 歳 | とうと | かつしか | まきの | はくさか | い | いつ | ろうじん | まきの | ほくさい | まんじ | ろうじん |
| 九十老人卍 | 己酉九十老人卍 | 齢九十歳 | 画狂老人卍 | 嘉永二己酉正月 | 九十老人卍 | 嘉永二己酉 | 寅月 | 画狂老人卍 | 老人 | 嘉永二酉年 | 正月 | 辰ノ日 | 宝曆十庚辰ノ年 |
| 出生 | 九十老人卍 | | | | | | | | | | | | |

印百：阿栄(52)

◇七代目市川團十郎赦免される(天保 13 年：1842、奢侈禁止令に触れ江戸所払いとなっていた)。

◇7 回目の富士講禁止令。

○歌川広重、寿鶴堂（丸屋清治郎）版『東海道五十三次』（『隸書版東海道』とも）。

★1 月、小布施より帰る（?）。

★この頃弟子は孫弟子も含めて 200 人程度といわれるが、実数は不明。

★2 月頃から病床に伏す。このためそれ以後の作は応為の手も入っていると推測もある。

【画工北斎 此せつ大病のよし】

★馬琴の日記に北斎の病気が記されている（馬琴は前年の嘉永元年 11 月 6 日に没しているので、この記事は長男宗伯の嫁路による記録）。

2 月 25 日「昼時過、中村勝五郎注来ル。九ヶ年以前願 候 四天王序文の事にて来ル。右の序文ハ、稿被置 候まゝ、種本其儘返し遣す。煎茶・くわしを薦、雑談数刻、七時頃 帰去。画工北斎、此せつ大病のよし。勝五郎の話也」（『曲亭馬琴日記』第四卷、同日条。ルビは筆者）。

注）中村勝五郎：勝五郎は天保 4 年（1833）4 月 2 日に読本執筆依頼で初めて馬琴宅を訪れている（『曲亭馬琴日記』第三卷、同日条）。

【北斎逝く】

★4 月 18 日（西暦 5 月 10 日、満 88 歳 10 ヶ月）、浅草聖天町遍照院境内仮宅で没す（暁七つ時、午前 4 時頃）

★〈北斎死亡通知〉同日、阿栄、死亡通知を府川北岑（北嶺）に送る。

「四月十八日/深川下橋/北嶺注様/栄拜/葬式明十九日朝四ツ時/卍儀病氣之処養生/不相叶 今暁七ツに/病死 仕 候 右申上度早々如此御座候以上/四月十八日」（島根県立美術館：永田コレクション蔵。瀬木慎一が 1983 年に門人の子孫の家から発見。ルビは筆者）

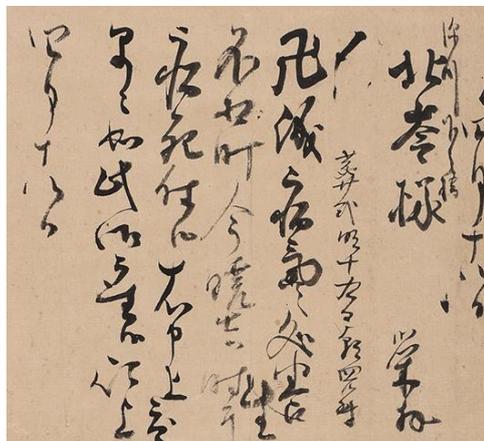
1441 阿栄による死亡通知（島根県立美術館）

今朝 4 時頃病死したので、明日 10 時頃に葬式を行うというもの。

注）北嶺：：1824～76。北嶺は蚊齋北岑の別号。

天保 6 年（1835）、父の友人北鷺の紹介により 12 歳で北斎の弟子になったという。北斎没時は数え年 26 歳。阿栄が北岑に死亡通知を出した経緯は不明。若い北岑が北斎関係者に報告して回ったか。

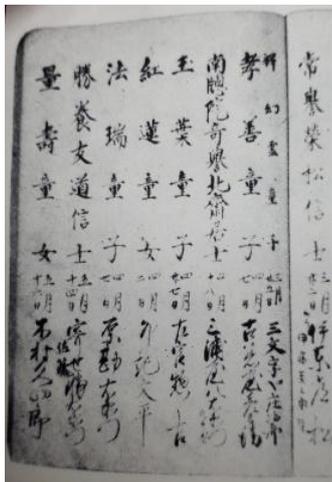
★4 月 19 日（朝四つ、午前 10 時頃）、浅草誓教寺（浅草八軒寺町。現東京都台東区元浅草 4-6-9。浄土宗）にて葬儀。立合は北斎の次男・加瀬崎十郎。墓は加瀬崎十郎の孫・加瀬昶次郎の施主。正面に「画狂老人卍墓」。墓右側側面「辞世 飛と魂でゆく気散じや夏の原 行年九十」。法名：南總院奇誉北斎居士。



★北斎の墓は、元は北斎の父・弘清（川村市良衛門：享和元年：1801 没）の墓の下にあり。当初貧しく墓碑を建てられず。後に加瀬昶次郎が現在の墓を建てる。



1442 現在の北斎の墓（誓教寺案内葉書より）



1443 誓教寺過去帳（web「絵師塔婆考」より）



【天我をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べし】

★北斎の臨終と葬式の様子は『葛飾北斎伝』（p169）が伝えている。

「同二年、翁病に罹り、医薬効あらず。是よりさき医師窃に娘阿栄に謂て曰く、『老病なり、医すべからず』と。門人および旧友来たりて、看護日々怠りなし。翁死に臨み、大息し、『天我をして十年の命を長ふせしめば』といひ、暫くして更に謂て曰く『天我をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べし』と。言訖りて死す。」

【親族等会葬に来ずも多くの参列者あり】

★「四方梅彦曰く、翁は、兄弟姉妹なきが如し。其の故は、翁の葬式の時に、兄弟姉妹および甥姪などは、来らざりしをもて知るべし」（『葛飾北斎伝』 p 35）

★「又北斎翁が葬式の時、兄弟姉妹甥なども来たらず。かの家元なる中島氏よりも、香花を手向けたるをきかざれば（略）」（『葛飾北斎伝』 p 160）

★「翁の死するや、門人および旧友等、各出金して、葬式の礼を行ひたり。棺槨などは、粗製のものなりしが、見送りの人々の中には、槍、挟箱脚注：ふたに棒を通してかつぐ箱など、もたせたる士もありて、凡百人程にて、誓教寺へ赴きたり。古来裏店より槍箱など持せて、見送りし葬礼は、嘗てこれなきことゝて、近隣の者共、大に羨みたり。（以上、四方梅彦の話）。又翁が死せし時、門人の外に、柳亭種員、脚注：柳下亭の誤り四方梅彦など、最もよく後事を担当し、周旋到らざるなし。割注：露木氏の話。種員、梅彦は柳亭種彦の門人」（『葛飾北斎伝』 p 170 ルビは筆者による）

●絵本『繪本孝経』上編（墨摺。絵入りの孝経の啓蒙書。高井蘭山注解。東都葛飾前北斎為一翁画図。北斎の著作の自序は天保5年（1834）の執筆。小林新兵衛版。22.5×15.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東洋文庫/フリーア美術館：プルヴァエー・コレクション/立命館大学図書館蔵）

●絵本『^{えほんこぶんこうきょう}画本古文孝経』（『^{えほんこうきょう}絵本孝経』下編 刊行は嘉永3年10月。墨摺。二冊。絵入りの孝経の啓蒙書。高井蘭山注解。東都葛飾前北斎為一翁画図。見返しに「前北斎卅老人画」とある。北斎の著作の自序は天保5年（1834）の執筆。小林新兵衛版。22.8×15.8 早稲田大学図書館蔵）

【『北斎漫画』十三編の刊行年はいつ？】

●絵手本『^{でんしんかいし}伝神開手 北斎漫画 十三編』（没後の秋頃か。刊行年不明。半紙本一冊。葛飾為一老人。三代目永楽屋東四郎版。22.8×15.7 すみだ北斎美術館/浦上満/島根県立美術館/高知県立高知城歴史博物館/フリーア美術館：ブルヴァエラ・コレクション蔵）

※奥付には、書肆：永楽屋東四郎（尾州名古屋本町七丁目）、同出店（江戸日本橋通本銀町二丁目）と記される。 1444 北斎漫画十三編（すみだ北斎美術館）



※墨摺版と淡彩摺版がある。

☆表紙：「葛飾為一老人筆 北斎漫画十三編 書舗東壁堂拝」の表題が書かれ、上部に13個のリング状から糸を垂らすように線を縦に引いている。

※「従来十三編の刊行年は不明とされていたが、^{さんきんがいししゅうりゅう}山禽外史小笠の序文末尾「^{きせい}巳酉秋窓雨夜乗燭書」にある「^{つらのととり}巳酉」により嘉永2年の版とする説が有力となった。

しかし、さらに刊行年を訂正する考証が『楽しい北斎の富嶽三十六景 富嶽百景 動植物画 他』（有泉豊明 「目の眼」平成29年2月刊）によって示されたので紹介する。

^{さんきんがいししゅうりゅう}山禽外史小笠は序文に「（太田）蜀山人 六樹園 式亭（三馬）の諸先みな序あり 余また何をか言はむ」とあるので、彼らと親しい立場の人物であっただろうから、序文末尾の漢文はやや戯けて読むべきとして、次のように記している。「己は酉なり（私は禽です。^{さんきんがいししゅうりゅう}山禽外史小笠です）、秋の窓の雨の降る夜（秋の窓に雨の降る夜、夜には眼が効かず、羽は有れど手のない山禽が）、燭を乗りて（明かりを手に取ってこの序文を）書す（書いた）とやや戯けて読むべきなのです。これが^{さんきん やまどり}山禽（山鳥）外史小笠なる人物が本来意図した読み方です。漢文が身近であった江戸の人ならこの様に読み、^{さんきんがいししゅうりゅう}山禽外史小笠の漢文を大いに喜び楽しんだことでしょう」

そして、『富嶽百景』三編序文の「七宝山下老人小笠」による筆跡と、『北斎漫画』十三編の序文の筆者序文の筆跡が同様であることから、^{しつぽうさんかろうじんしゅうりゅう}七宝山下老人小笠と^{さんきんがいししゅうりゅう}山禽外史小笠は同一人物であるので、『北斎漫画』十三編は『富嶽百景』三編の推定刊行年（天

保6年～7年：本稿では天保6年頃としている）に近接するとしている。「また以上のように考えますと、北斎漫画・十四編の出版年は嘉永二年以降では無く、十三編出版の数年以上以内位となるでしょう」と述べている（p234）。

【北斎漫画 まねもならざる画風の筆癖】

※『日本奇人伝』下巻（嘉永2年頃。花笠文京著。歌川国芳画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）には、小鍛冶宗近、蟬丸、馬琴、光明皇后とともに北斎が作画している様子が描かれ、「北斎漫画の数拾編。まねもならざる画風の筆癖」と、その技量を賞賛している。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十四編』（没後。刊行年不明。半紙本一冊。署名なし。奥付には書肆として、永楽屋東四郎（三代目。尾州名古屋本町七丁目）、同出店（江戸日本橋通本銀町二丁目）と記されている。22.7×15.6 すみだ北斎美術館/フリーア美術館：ブルヴェアー・コレクション蔵）

☆序文「文は道を貫くの器、画は形を伝ふるの具。しかれども、文の拙き、豈道を貫かむ耶。画のつたなき、もとより形を伝ふべからず。虎を画きて狗に類するごとき是なり。北斎が万物を忍がける、皆其形を伝ふるものにして、三歳の童子も、これを見て其物を知る。こは妙手の筆端ならずして、いかでか天地間の万物を陶冶する事、こゝに至らむや。今又、此編を梓（版木）に彫るとて、予に序を乞ふ。たゞ戯に児童のために手引きすること、しかり。百信翁漫題注」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による）注）百信翁：アホウドリ。百天翁。誰か未詳。

☆表紙：鯨鉾が描かれ、空白に「北斎漫画十四編」と草書で書かれる。



1445 北斎漫画十四編（すみだ北斎美術館）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十五編』（明治11年：1871。完結。半紙本一冊。25.8×15.8 すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：ブルヴェアー・コレクション蔵）。



1446 北斎漫画十五編

※奥付には、「從初編至十四編、文化十一年以降漸次出版。明治八年十二月十四日、版權免許。十五編、明治十年八月十四日、版權免許。明治十一年九月一日出版 編輯者 東京府故人 葛飾北斎 出版人 愛知県平民 片野東四郎 第一区玉屋町三丁目二番地」とある（句読点は筆者）。

【翁の遺墨若干葉を画本中に補い入れて十五編とする】

☆序文（元文は漢文）「北斎翁の漫画、余が家蔵の版也。此の編に画く所の山水草木、鳥獸虫魚、固より論なく、人物の如きに至りては、即ち、農圃の稼穡、百工の事業なり。凡そ覆載の間に森羅万象するは、一網遺すなし。蓋し、此冊子の濫觴たるや、先人注、翁と約して、予て十五編を以て全部と為す。随画随刻、第十四編に至り、既に世に行はる。其の第十五編の如きは、画半ば成るも、未だ梓に付さず。而るに翁没し、先人亦尋いで逝けり。余、先人の夙志以て果たす無きを憾むこと久し。然り而して、方今諸藩来舶の資、之を賞愛し、購ひ求め齎し去る者鮮なからず。一日、余、輓近新刷の洋籍を觀る。其の図中、往々にして、此編に画かるゝ者を挿入する有り。乃ち知る、翁の筆力遠く海外に達するを。是に於いて、益々九仞に一簣を虧くを惜しむ。奇なる哉、頃、幸ひにし翁の遺墨若干葉を、筐底故紙中に得たり。因て之を未刻の画本中に補ひ入れ、以て梓に付し、第十五編と名づけ、遂に全部と為すを得たり。而して、余の旧憾、亦一掃することを得たり。冀くは、江湖諸彦購求し、以て愛玩を加ふれば、幸甚とす。乃ち其の概略を書して、以て序文に代え爾云ふ。明治十一年歲 戊寅に在る七月 片野東四郎 謹 識印」

（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より）

注）先人：柳亭種彦のこと。十一編序文で柳亭種彦は二十編まで続ける旨を書く。

●絵本『続英雄百人一首』（1月。一冊。緑亭川柳輯。前北斎記老人筆。山口屋藤兵衛版。野田市立図書館/弘前市立弘前図書館蔵）

※北斎は、口絵と英雄20人を描く。他に、歌川国芳、歌川貞秀、柳川重信（二代）、歌川豊国（三代）などが描く。巻末広告に「義列百人一首 近刻」とある（嘉永3年に刊行される）。『英雄百人一首』（山口屋藤兵衛版）は嘉永元年（1848）9月刊で、北斎は描かない。

●肉筆画「鍾馗図」（正月。絹本着色一幅。嘉永二己酉正月九十老人記筆。印百。113.7×29.6 北斎館蔵）

※右手で剣を台地に突き刺し、蓬髪で顔面髭だらけの鍾馗が、体を左に捻って立ちながら睨んでいる墨摺風の図。この図と同じ図がメトロポリタン美術館にある。二幅描いたか。

●肉筆画「扇面散図」（絹本着色一幅。九十老人記筆。印百。51.5×71.4 東京国立博物館蔵）

※青地に金粉を散し、赤い花などを描いた扇、水色の紫陽花などを描いた扇、赤無地の扇、墨色で母子を書きこんだ扇などに、半分閉じた扇が重なり合う。

1447 扇面散図（東京国立博物館）



●肉筆画「李白觀瀑図」（齡九十歳画狂老人記筆

印百。絹本着色一幅。93.4×30.0 ポストン美術館蔵)

※子供を背負った李白が垂直に落ちる滝を眺めている。滝の下から飛沫があがっている。李白は安録山の乱を避け廬山に隠棲し、滝を題材にした詩を書いた。



1448 李白観瀑図 (ポストン美術館)

●肉筆画「漁樵問答図」(絹本着色双幅。九十老人卍筆。印百 右 113.4×39.6 左 113.1×39.6 フリーア美術館蔵)

※漁師と樵の異なる二人が問答する題材は、中国北宋時代の詩人、蘇東坡の『漁樵閑話』に由来するといわれる。右図は、樵が柴木の束を下に置き、瓢箪を腰に、鉞を杖にして煙管をくわえながらなにやら思案している図。

左図は、腰蓑を付けた漁師が魚の入った大きな魚籠を脇に置き、竿を立てて足を組んで腰を下ろし、右図の樵に話しかけているような様子を描く。

1449 漁樵問答図 (フリーア美術館：複写)

●肉筆画「月に骸骨図」(「骸骨図」「牡丹灯籠図」)とも。絹本着色掛幅。巴西正月九十老人卍筆。印百。125.0×77.0 誓教寺蔵)

※明るい月に照らされて、提灯を持ち、笹藪から伸びる三本の竹の脇に、体をひねるように立ってこちらを見る骸骨。版元渡邊庄三郎より寄贈されたもの。



※誓教寺蔵の画は、月に竹の葉が2枚掛かっているが、2009年、竹の葉が月に3枚掛かっている同図がアメリカで発見され、あるいは二幅描いたか(個人蔵)。

1450 月に骸骨図 (誓教寺)

●肉筆画「宝珠図」(縦長判。淡彩。嘉永二巳酉年正月 九十老卍筆。印百。個人蔵)

※丸く縁取りした宝珠の先から「寿」の字が煙のようにつも出ている図。弘化4年(1847)にも同画趣の「宝珠図」(色紙判)を描いている。

●肉筆画「子路読書図」(「子路負米」とも。絹本着色。九十老人卍筆。印百。日本浮世絵博物館蔵)

※子路が米俵を背負い、本を詠みながら歩く図。子路(紀元前543～紀元前481)は、孔門



十哲の一人。字は仲、名は由。母のため米を背負って百里歩いたという。二十四孝の一人。

●肉筆画「長寿表象図」（縦長判墨摺。九十老人卍筆。印百。日本浮世絵博物館蔵）

※房状の尾と甲羅を見せた瑞喜の亀を描く（島田賢太郎 2016 年 8 月「台東区生涯学習北斎研究会定例会レジュメ」による）。

●肉筆画「桃盗る猿図」（「猿図」とも。絹本着色一幅。齡九十歳画狂老人卍筆。印なし。個人蔵）

※赤い縮緬の着物を背中に着た猿が、桃を一つ盗って、嬉しそうに右手で食べようとしている。左足は跳ね上げている。前には、木から盗った枝のついた桃が二つ転がっている。

●肉筆画「雨中の虎図」（絹本着色一対。九十老人卍筆。印百。120.5×41.5 太田記念美術館蔵）

1451 左：雨中の虎図（太田記念美術館） 右：雲龍図（ギメ美術館）

※溪斎英泉『无名翁随筆』には「肉筆の彩色殊に見事なり」とある（『肉筆浮世絵大観』5）。対の「龍図」の龍に向かって雨中で吠えているかのような虎。龍虎の阿吽の図。

●肉筆画「雲龍図」（「龍図」とも。絹本着色一対。九十老人卍筆。印百。120.5×41.5 ギメ東洋美術館蔵）

※「雨中の虎図」と対の作品。黒々とした天上から龍がとぐろを巻くように現れ、眼光鋭く何かを睨んでいる。

●肉筆画「雪中虎図」（絹本着色一幅。嘉永二己酉年寅月 画狂老人卍老人筆 齡九十歳。印百。39.4×50.5 元麻布美術工芸館寄託/個人蔵）

※死の3日前（『瀬木慎一の浮世絵談義』によれば4日前）の作。應為作とする説あり。※荒井勉『北斎の隠し絵』（AA 出版）では次の感想を紹介して「葛飾北斎の自画像である」としている（p 30）。

※「北斎の描くこの虎は、無動の空間の中をスローモーションのように浮遊しているようだ。北斎のくりだしたその超現実的世界の内へと、われわれはひきこまれて行きそうになる」（松木寛『名宝日本の美術 23 北斎・広重』集英社）。

※「一匹の虎が、雪の中を跳ねている。爪をむき出し、眼を光らして、地上を駆けるというより、空中をとんでいる図であるが、妙にその姿は孤独である。上に対しても下に対しても、はげしい敵意をむき出している虎の姿であろう」（梅原猛『美と倫理の矛盾』集英社）。



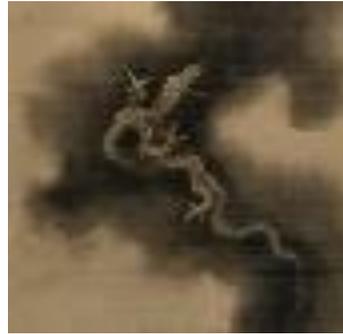
1452 雪中虎図（2017『北斎—富士を超えて』図録より転載）

【北斎最後の傑作】

●肉筆画「富士越龍図」（絹本淡彩一幅。嘉永二年酉年正月辰ノ日注 宝暦十庚辰ノ年出

生 九十老人卮筆。印縦長の百。95.8×36.2 北斎館蔵)

注) 辰の日は1月11日又は1月23日。
※雪を被った富士山の背景から龍が黒雲を伴って昇天する図。嘉永6年(1853)3月11日、高井鴻山が購入したことが鴻山の手控帳「重脩堂主人」によって知られている。 1453 富士越龍図(北斎館)



※『佐久間象山遺墨集』には、別に卮老人の落款のある「富士越龍図」があり、左上に象山(「ぞうざん」とも)の漢詩が書かれている。一畳ほどの寸法という。

「滄海翻波起伏龍 / 飛騰倏忽過芙蓉 / 沛然下雨物皆息 / 雨霽收無跡蹤」(意識: 海中から起き上がった龍は、富士山をたちまちのうちに過ぎて飛ぶ、すべての者が息をのむ、雨や雲が収まると、龍の過ぎた跡もなくなる) (荒井勉『北斎の隠し絵』 p162 訓下しは筆者による)

【以下、江戸時代(年代不詳)】

●「渡し船」(横長判着色。●●北斎筆)

※渡し場から舟をこぎ出そうと、船頭が船尾から岸辺に棹をさしている。船には煙管を銜え、頬杖をついている男、「富士」と染め抜かれた腹がけをした馬、鞍に敷いた布の端を手にして立っている揚げ帽子の女、棹の先の藁束に売り物を数多く挿して持っている行商の男、煙管を持ち大小の刀を差し、長羽織の侍などが乗っている。

●『画稿(デッサン集)』(江戸時代後期。紙本墨絵。無款。北斎館蔵)

☆〈本を読む女〉(40.0×41.3)

☆〈裸の男の動き・碁を打つ男たち・相撲をとる男たち・三味線を弾く男・股のぞきをする男〉(22.7×38.2)

☆〈狐・狸・鳥など〉(28.0×40.3)

☆〈天秤を担ぐ人物など〉(53.7×28.0)

●「人形遣いと曲芸師」(着色。印北斎)

※袴を付けた人形遣いが、碁盤の上に大名行列の纏持ちの奴の人形を置き操っている。その前で曲芸師が、一枚歯の高下駄を履き、徳利と盃二枚を放りあげて、順に受け取ろうとしている。

●「舌切雀」(林忠正がパリで出したカタログに絵がある) 葛籠を開けると、三つ目のろくろ首などの妖怪が多数出てきて、驚きのけぞっているおばあさんを指差して笑っている図。(以上、『北斎美術館3 美人画』 p148)

●屏風絵「三国志英雄図」(江戸時代後期。六曲一隻墨絵。各 93.9×33.1 千葉市美術館蔵)

※『三国志』の英雄六人を書く屏風に描く。



1454 三国志英雄図 (千葉市美術館)

●肉筆画「**偉大なる軍鶏**」(無款 印ふしのやま。紙本着色一幅。101.0×41.0 北斎館蔵)

※左脚を上げ、力強い表情で前を見つめる軍鶏。足元には蒲公英が咲いている。

●肉筆画「**松に桜**」(紙本着色二幅。無款。北斎館蔵)

※右図は、ごつごつした松の幹と枝、左図は、桜の幹と小枝に蕾が描かれる。

●肉筆画「**みみずく**」(色紙判着色一幅。無款。北斎館蔵)

※辛夷の枝に止まって正面を見るみみずく。春調亭、浅春庵などの狂歌が添えられる。

●摺物「**納涼**」(横長判。東京国立博物館蔵)

※浜辺に低い床机を二台置き、そこに座ってくつろぎ涼をとる男女。各床机には二人ずつの芸者がいる。

●摺物「**摘草**」(横長判。東京国立博物館蔵)

※遠く帆掛け舟と漁船が浮かぶ岸辺で、三人の女が摘草をしている。女の一人は立って遠くを見ている様子。

●不明「**高砂の初日の出**」(横長判。無款)

※松の大木のある浜辺で、老夫婦が盛装して、沖に上がる日の出を拝んでいる。太陽の中心には霞が横にひかれている。

●肉筆画「**貴賓遊娯の図**」(横判一幅。無款。個人蔵)

※大正8年「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」に出品されたもの。翌年発行の「図録」によれば、葛飾北斎筆として「松江 桑原羊次郎氏御所蔵」とある。北斎作品かどうかは不明。

図は、御殿に仕える奥方たち四人と娘が、紅葉咲く庭に面した豪華な部屋で語らい寛いでいる。図左には、松の木と石灯籠の庭が広がっている。

●肉筆画「**遊女夢春駒図**」(横判一幅。無款。個人蔵)

※大正8年「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」に出品されたもの。翌年発行の「図録」によれば、葛飾北斎筆として「松江 桑原羊次郎氏御所蔵」とある。北斎作品かどうかは不明。

図は、山中で、束ねた柴木に両腕を置き休んでいる女。手拭いを被り、眉を剃っている。

【北斎没後】

嘉永 3 (1850)

★阿栄、浅草聖天町から聖天横町に移る。

●絵本『義烈百人一首』（正月。一冊。緑亭川柳撰。前北斎卅老人画。他に歌川国芳、歌川芳虎、歌川国貞、歌川貞秀が描く。山口屋藤兵衛版。東京国立博物館/弘前市立弘前図書館蔵）

※本誌の挿絵は全て無款であるが、奥付に北斎の画の範囲を示す「画工 口画五頁 自二十一至三十 前北斎卅老人」が記される。

●読本『平将門退治図絵』（『将門退治図絵』とも。松亭金水（中村定保）編。大坂・群玉堂、東都・金幸堂の合梓版）

※巻五の奥付に「自首卷至四之卷 前北斎為一老人画」とある。即ち北斎は、一卷から四巻までの挿絵を描き、柳川重信（二世）は五・六巻の画を描き、歌川（玉蘭）貞秀は七・八・九巻の画を描く。

●説話集『想山著聞奇集』（「そうざん」とも。11月。五巻。三好想山作（?～1850）。八十八老卅筆。青山直意版。鹿児島大学附属図書館蔵）

※落款が「八十八老卅」であるので、弘化4年(1847)には刊行の構想が出来ていたと思われる。数名の画工が描いている中で、北斎は、巻の一「毛の降とる事」の段に、火の見櫓の中から、櫓に架かった蜘蛛の巣を見ている図と、巻の四「大ひ成る蛇の尾を截て嵩らしむる事」の段に、大蛇を鉤で退治しようとしている男を描く。

●『万職図考』四・五編（葛飾戴斗先生図。河内屋茂兵衛版。初編文政10年（1827）、二・三編天保6年（1835）刊）

※煙管や染色などのためのデザイン集。

嘉永 4 (1851)

嘉永 5 (1852)

◇パリ万国博覧会。

★高井鴻山が應為に「菊之図」を二両三分で注文。7月に使者を遣わし先に絹地代金一分を支払う。高井鴻山『重脩堂主人』7月11日条に「一金壹分 絹地代 広助出都之砌菊之画御栄江頼候ニ付遣す」ルビは筆者による）とある。

嘉永 6 (1853)

【應為の菊図。鴻山の菊図の謎】

1455 高井鴻山「菊之図」

★高井鴻山の手控帖『重脩堂主人』によれば、3月、應為から「細密画 菊之図 絹本」が届けられた。鴻山は、3月12日に浅草聖天横町に住む應為のもとへ飛脚定兵衛を遣わし、残りの二両二分の謝礼金を支払う。但し、この絵は他者に売り渡され、6月29日に精算勘定が済んでいて、同図は小布施にないという（久保田一洋「北斎



最晩年一小布施北斎の周辺」〈『浮世絵芸術』95号所収。『浮世絵の女たち』鈴木由紀子・p206より孫引〉)。

※「菊之図」はロンドンで発見された北斎の「菊之図」があり、「八十八老人卍筆」の落款もあるが、北斎筆は疑問とする説あり。應為の「菊之図」が不明であるので、ロンドンで発見されたものが應為の作ともいわれる。また、高井鴻山たかいこうざんにも「菊之図」がある。但し、この図は、應為に鴻山が依頼した二図の内の一図で、應為の作とする説があり、真偽の程は不明。

嘉永7(1853)

◇ニューヨーク世界博覧会。

◇7月8日、三浦にペリーらの黒船来航。

安政1(1854)

◇ペリー2回目の来日。日米和親条約。

◇シーボルト追放令解除。

安政2(1855)

◇パリ万博(日本不参加)。文部大臣 W.L. ステュルレルがオランダから北斎、歌麿らの作品を入手。その他の作品も含め259点を帝室図書館に寄贈。

●絵手本「北斎模様画譜」(5月。一冊。画工葛飾北斎。見返しには「葛飾為一筆 印」一人人形」とある。奥付前の最終ページには「前かつしか為一筆」とある。柏原徳蔵かしわばらとくぞう(探固堂)版。38.0×26.2 すみだ北斎美術館蔵)

※小紋等を含む図案集。

●地誌『利根川図志』(六冊。赤松宗旦あかまつそうたん注著。葛飾北斎他画図。山田屋佐助版。埼玉県立熊谷図書館蔵)

※利根川周辺の地誌を記したもの。概誌の各冊に挿絵が数葉あるが、北斎の挿絵がどれか不明。昭和13年に刊行された岩波文庫版の同誌における柳田國男の序文には「挿絵の画工の数が甚だ多い。多分は何度にも頼んでは溜めて置いたものであらう。其中で落款の無いのは葛飾北斎といふことであるが、水虎の考略其他にも出て居る河童の絵が、やはり無名で入つて居るなどは不審である」として、結局どの絵か疑問の趣である。

注) 赤松宗旦: 布川村(現茨城県利根川町布川)出身の医師。同誌は、利根川流域の地誌を書いたもの。

安政3(1856)

◇仏人フェリックス・ブラックモン(1833~1914)、パリの印刷屋ドラートルの仕事場で、日本から送られてきた陶器の包み紙の「北斎漫画」を発見。ブラックモンはドラートルに譲ってほしいと願うが断られる。2年後、版画家ラヴィーユの家で再び「北斎漫画」に出合い、ようやく手に入れる(大島清次『ジャポニスム』p28)。

このエピソードは1905年、レオンス・ベネディット(L. Benedite)「Felix Braquemond L`animalier, 『Art et Decoration』、XV11, PP.39-40」の発表した文章による。

但し、これは、ベネディットの文章がブラックモンからの聞き書きであり、ゴンクールやシェノーの証言と必ずしも一致しないこと、発見者を自称する人物が一人や二人でないことなどから、今では伝説と受け止められている」（池上忠治氏）として近年疑問視されている（昭和 62 年〈1987〉大和文華館「北斎展」図録 p5 より）。

安政 4 (1857)

★阿栄、家を出る（?）

安政 5 (1858)

●9 月、「日蓮上人一代図絵」（9 月。松亭金水著。葛飾為齋画。明治 21 年に葛飾北斎の画として売り出す）。

●絵手本『北斎画鑑』（半紙本一冊。巻末に「前北斎為一老人画図」とある。永楽屋東四郎版。22.5×15.5 国文学研究資料館蔵）

※文政元年（1818）『伝神開手 北斎画鏡』の改題本。

安政 6 (1859)

◇シーボルト、オランダ貿易会社顧問として再来日。

◇この頃、偽葛飾北斎がいたらしい。「又按ずるに、東京橋場町、真崎の石浜神社（脚注：江戸時代には朝日神明宮という。石浜神明また橋場神明とも。荒川区南千住三丁目に現存）にある杉戸の牛馬の図に、安政屠維（脚注：十千のうちの己の称）協洽（脚注：十二支のうち未歳の異名。全項と併せ、安政己未は同六年（一八五九）之玄月（脚注：陰曆九月）、葛飾北斎謹画とあり、印章は左の如し（筆者注：印章の図）何人なるを詳にせず、画風は、葛飾にあらず、土佐の風に近し、甚拙なり」（『葛飾北斎伝』 p 109）

安政 7 (1860)

★大英博物館、北斎の作品を購入。

文久 1 (1861)

◇シーボルト、対外交渉のため幕府顧問となる。

文久 2 (1862)

◇ロンドン万博で英駐日大使オールコックが浮世絵を出品。

◇シーボルト、帰国。

★お栄、横浜から鎌倉東慶寺へ行くか。

●絵本『北斎画本雛形』（一冊。画狂人北斎画。山々亭有人序。若林喜兵衛版。もとは一板彩色摺で刊行されたものをこの年一部の書として刊行）

●絵本『北斎翁道之志遠里』（画狂人北斎画。玉養堂版）

※『葛飾北斎伝』によると、「文久二年若林喜兵衛の出板せしところなり。或は曰、此の書は、翁の筆にあらず。柳川重信か、或は阿栄の画ならんと。又翁が壮年の頃、画きおけるを彫刻せしものかと」としている（p 278 ルビは筆者）。

※この題名は扉にあるサブタイトルで「北斎狂画 東海道五十三次」が正しい。享和 4 年（1804）の『春興五十三駄内』の初版にあった短冊版 8 図を柳川重信の小判に差し替え

て改題再刊したもの。⇒享和4年条『春興五十三駄之内』参照。

元治元年/文久4 (1864)

●絵本『孝経画入』(二冊。北斎画。高井蘭山撰)

慶応2(1866)

◇シーボルト没(70歳)。

◇フィリップ・ビュルティ(美術評論家)、北斎を初めて評価し「ジャポニズム」の語を使う(『産業芸術の傑作』)。

慶応3(1867)

◇パリ万博に日本が参加。北斎の版本2件、『北斎漫画』『絵本武蔵鑑』等が出品される(2017『北斎一富士を超えて』p28)。

◇「1867年までにはフランスの芸術家たちからなるラ・ソシエテ・ジャポネーズ・ジャングラール(ジャングラール日本協会)とよばれる集団がすでに結成されていた。北斎はこのグループの人気の的であった」(「葛飾北斎論」『在外秘宝 葛飾北斎』所収p16)

明治5 (1872)

◇美術評論家フィリップ・ビュルティの提唱した。ジャポネズリー(日本趣味)は80年代にかけて広がる。

明治6(1873)

◇ウイーン万博。浮世絵を政府が紹介。起立工商会社設立。

明治7(1874)

◇印象派運動始まる。明治19年(1886)に極点。ゴッホは200点以上の浮世絵を所蔵。

明治10 (1877)

◇第一回勸業博覧会(上野)美術部により肉筆画展示。

明治11 (1878)

◇パリ万博。政府は積極的に浮世絵を輸出。林忠正、東大を中退してパリ万博に参加、工芸品制作輸出会社起立工商会社の通訳をする。輸出も若井兼三郎と林が担当。

◇林忠正、万博終了後もパリに残り、ルイ・ゴンス「日本美術」2巻を若井兼三郎(元起立工商会社副社長)と手伝う。

◇フェノロサ来日。6万点以上の浮世絵を収集、ボストン美術館フリーア・コレクションに送る。

●9月1日、絵手本『北斎漫画』十五編(奥付には「東京府故人葛飾北斎 出版人 愛知県平民片野東四郎注 第一区玉屋町三丁目二番地」と記されている。ここまで総図数3911図)。

注)片野東四郎:四代目永楽屋東四郎のこと。この編は、沼田月斎(1787~1864)、織田杏斎(1845~1912)など他の絵師の絵や、北斎の別の絵手本の絵の寄せ集めによって編集された。

明治13 (1880)

●絵本『**画本 唐詩選五言絶句**』（1月。二冊。故人葛飾為一。嵩山房小林新兵衛版）

明治14(1881)

◇ビゲロー来日。

明治15(1882)

◇ジョルジュ・ビゴー来日。

◇デオドル・デュレ(1838～1927)が美術誌『ガゼット・デ・ボザール』誌で「北斎は日本が生んだ最も偉大なる巨匠である」と評す。

明治16(1883)

◇林忠正、仏アパルトマンで美術商(若井・林商会)を開く。若井が日本から作品を送り林が売る。この頃より喜多川歌麿や鳥居清長の作品が出回る。

◇ビゴー、石版画集『あさ』の扉絵に「北斎漫画」二編の作品を使う(「仮面の図」)。

○ルイ・ゴンス(1841～1926)、『日本美術』。

明治17(1884)

◇正月元旦、林忠正、下宿先に店を開く。英政府の囑託としてロンドン美術館所蔵の日本品を整理する。

●絵手本『**北斎模様画譜**』（9月。安政2年『**北斎模様画譜**』の後摺版。

明治18(1885)

◇林忠正、法律を学びにパリに来た黒田清輝の才能を見出す。日本美術愛好家ラファエル・コランのもとに連れて行き画家に転向させる。

明治19(1886)

◇林忠正、店をヴィクトワール通りに写す(骨董屋)。渡仏した伊藤博文や大蔵次官らに日本美術の振興について述べる。

明治20(1887)

◇この頃、林忠正、本店を日本に移す。若井兼三郎と松尾儀助(元立立工商会社社長)も加わる。

明治21(1888)

◇パリ・国立グラン・パレで「ジャポニスム展」。

●「**日蓮上人一代図絵**」(安政五年刊の葛飾為斎の同画を葛飾北斎画として売り出す)

明治22(1889)

◇パリ万博。

●「**前北斎富士勝景**」(前北斎為一筆。12月。縮緬注錦絵。大倉孫兵衛版。早稲田大学図書館蔵)

注)縮緬：長谷川武次郎によって、明治18年(1885)に考案された印刷方式。和紙を使用し、木版多色刷りで縮緬のように加工する。

※「**富嶽三十六景**」から11図を抜き出し、縮緬本に仕上げたもの。〈江戸日本橋〉〈御厩橋より両国橋夕陽見〉〈東都浅草本願寺〉〈東都本町豎川〉〈武州千住〉〈遠江山

中) 〈尾州不二見原〉 〈常州牛堀〉 〈甲州犬目峠〉 〈甲州伊澤暁〉 〈甲州石班澤〉 など。

明治 23 (1890)

◇この頃、林忠正^{はやしただまさ}、工芸品から浮世絵と鏝^{つぼ}の商売に転ず。1900 年にかけて大量の浮世絵をパリに運ぶ(錦絵 16 万枚、絵本類 9700 冊)。依頼したビングに渡さずゴンクールに売却(永井荷風『江戸芸術論』による)。

◇輸入商ビングによるパリ国立美術学校での「浮世絵展」開催。

明治 24 (1891)

○ゴンクール『歌麿』出版。

明治 25 (1892)

◇林忠正^{はやしただまさ}、小林文七^{こばやしぶんしち}(浮世絵商)の開いた日本最初の浮世絵展で浮世絵の芸術性を訴える。

明治 26 (1893)

◇林忠正^{はやしただまさ}、明治美術会で印象派を展示する。

◇ボストン美術館「北斎とその流派展」(アーネスト・フェノロサの企画)開催。

●「土農工商」(12 図。墨摺。北斎(「画」の字はない)

☆〈三方^{さんぼう}の杵^{きね}を作る折烏帽子^{おりまぼし}を被り盛装した二人の職人の図〉

☆〈盥^{たらい}で洗濯をする男と、井戸から水を汲む男の図〉

☆〈馬上から弓を射るために構える武士と、裸足で立って弓を構える武士の図〉

☆〈油売りと野菜売りの図〉

☆〈土を耕す二人の農夫の図〉

☆〈包丁儀式で烏帽子を被り調理する二人の男の図〉

☆〈鎧^{よろい}を客に着せて仕立てを確かめている鎧師^{よろいし}の図〉

☆〈木に登って柿を取り、下の母親に渡している子どもと、柿を籠に入れていた父親の図〉

☆〈畑で働く農夫や俵^{たわら}を担ぐ農夫たちの図〉

☆〈不明〉

☆〈大名行列の荷を担ぐ男とお伴の武士と纏持ち^{ちんもち}の図〉

☆〈酒^{こもだる}の菰樽^{こもだる}を担いで川岸に運ぶ男たちの図〉

明治 27 (1894)

◇林忠正^{はやしただまさ}、この頃より西洋美術館の設立を志すも実現せず。「阿諛^{あゆ}追従^{ついしゅう}の男」「春画を売った国賊」の悪評を浴びる。

◇古美術商山中定次郎^{やまなかさだじろう}渡米し、フェノロサらに助けられて浮世絵を売りさばく。

明治 29 (1896)

○エドモン・ド・ゴンクール、『北斎』出版。

○ミシェル・ルヴォン、『北斎』出版。

明治 30 (1897)

◇この頃の浮世絵肉筆画収集家（九鬼周一、高嶺哲夫、小林文七、服部一立、武岡豊太、桑原羊次郎）。

明治 33 (1900)

◇パリ万博。

◇林忠正、伊藤博文と西園寺公望の推薦（永井荷風『江戸芸術論』では駐仏公使曾禰荒助の推薦）でパリ万博の事務官長（日本出品事務所長）に任命される。この頃、印象派が認められ始め、印象派の作品を 500 点集める。

◇フェノロサによる北斎展が東京の日本美術協会（上野公園）で開催される。本間耕曹の蒐集品を公開。

◇お雇い外国人のクルト・ネッターとゴットフリード・ワグナー共著『日本のユーモア』で 200 点の戯画を紹介。出品画中、河鍋暁齋 37 点、北斎漫画 17 点が多い。

◇ゴンクール没（死に先立ち、収集した浮世絵を売却し、私立文芸院を設立した）。

明治 35 (1902)

◇林忠正の企画によりパリで写真版目録を作り日本美術の競売をする。

○アンリ・リヴィエール、リトグラフ集『エッフェル塔三十六景』（『富嶽三十六景』に刺激された作品）。

明治 36 (1903)

◇小林文七が浮世絵をフリーアに売る（翌年まで）。

◇林忠正、パリの商店を引き払い東京に帰る。

大正 9 年 (1920)

◇松方コレクションの版画がフランスから日本に持ち帰られる。

大正 10 (1921)

◇落合直成、三原繁吉らによる（第一次）日本浮世絵協会設立。機関紙「浮世絵の研究」創刊号に「吾が協会は、本邦独特の浮世絵版画の芸術的価値を一般に理解せしめる」（『季刊浮世絵 9』 p 7 昭和 39 年 5 月 1 日刊）

【付録】

【春峯庵贋作事件】

慶應◆男爵九条良致旧蔵品 【葛飾北斎】筆 絹本着色 富嶽十二景 画帖 晩年の卍落款



昭和九年（1934）4月26日、東京朝日新聞に「珍しや写楽の肉筆現る」という大見出しが載った。記事では、某大名華族で春峯庵と号する人が秘蔵していたもので「いづれも得難い珍品」だと大学教授の笹川臨風が絶賛。同年5月14日には「発見」された一連の品々の売立入札会が行われ

た。入札会に先立ち、豪華な画集『春峯庵華宝集』が作られ、笹川が序文を記した。別に牛山充（筆者注：浮世絵評論家）、大曲駒村（筆者注：美術評論家）の解説が別冊として添えられた。同23日夕刊には、新発見の19点全て贋作、関係者が警視庁の取り調べを受けたとの報道がなされた。浮世絵商の金子孚水（懲役2年）と、家族ぐるみで贋作を制作した矢田家から三男の修が有罪（懲役1年半）、推薦序文を書いた笹川臨風は学者生命を断たれた。

なお、この事件に関連して浮世絵の真贋について「Web 台東区北斎研究会ニュース 2013/6/20、9/9、2014/9/9、9/10」に詳細な解説があるので参照されたい。他に『芸術新潮』（1991年11月号「特集 贋作」）に詳しい。

参考資料：阿栄（應為）

【阿栄、画をよくし、土偶人を作るに妙手で、火事を好む】

★「(略)娘ありて柳川重信に嫁せしが注1、離縁して今家にあり。此婦人も崎人にて当時（筆者注：弘化二年）三十歳余注2、画をよくし、且至て器用なり。土偶人を作るに妙手なり。一日土を以て町家の娘と町芸者と深川妓婦三人にて、遣り羽子を突く。偶人を作るに其情態髪形の体、真のごとし。又此婦人至て火事を好みて、夜中といへども十町廿町の場へ見物に往く事屢なれども、北斎も敢て足をとどめず。俱に崎人といふべし」（『戯作者考補遺』木村黙老編 p315）

注1) 「柳川重信に嫁せし」は誤り。

注2) お栄の年齢については、弘化二年(1845)は北斎86歳であり、この時お栄が30余歳とすれば、北斎40代後半から50歳頃の子となるので誤りであろう。あるいは30数年絵を描いたという意味か。

【北斎没後、阿栄はどこでなにを、そして、いつ没したか】

★(北斎没後)北斎居住だった浅草聖天横町に嘉永6年(1853)3月まで住んでいたことは高井鴻山の『重脩堂主人』の嘉永6年(1853)3月条に、自身が応為に依頼した「菊図」の画料を浅草聖天横町の応為に飛脚を介して送っている記録からもあきらかである。

※「北斎の死するや、阿栄悲嘆座に安ぜず。これより居所を定めず門人或は親戚の家に流寓し、後親戚加瀬氏の家に居りしが、一日出て行くところを知らず。一説に、阿栄、加瀬氏の家を出でて、加州金沢に赴きて死す。年六十七。また一説に、徳川旗本の士某の領地、武州金沢の近傍に到りて死せり。又一説には、信州高井郡、小布施村、高井三九郎の家に到りて死せりと。詳ならず。白井多知女の遺書には、安政四年の夏、東海道戸塚宿の人、文蔵といへる者阿栄を招き画を請ふ。阿栄筆を懐にし、出て行きしが、夫より知れずなりしと。」(『葛飾北斎伝』p312 ルビは筆者)

同書の「北斎翁の死するや、阿栄、悲嘆座に安ぜず。これより居所を定めずして、門人或は親戚の家に流寓し」は誤り。

嘉永6年(1853)3月以降、阿栄は弟の加瀬崎十郎家に身を寄せたり、川村家に転じたりしい。旅に出て相州戸塚か、加州金沢で客死の噂あり。北斎の墓のある誓教寺には葬られていない。

※安政2・3年(1855・56)頃、加賀前田家に抱えられ金沢で没したともいわれる。又、安政4年(1857)、家を出て消息不明とも(この時67歳)。一方で『葛飾北斎伝』では、『浮世絵師便覧』により慶応年間までの生存を示唆している。

★小布施の絵師小山岩治郎が、お栄から絵の通信教育を受けたという。他に商家の娘や旗本の娘が門人であったという。また、晩年は女仙人になりたくて茯苓(サルノコシカケ)を服用していたという(鈴木由紀子『浮世絵の女たち』p207)。

【應為の作品】

(広義の北斎作品を含む：北斎の制作に阿栄が手を加えたと考えられるもの)

※ほとんど肉筆画(確認されたもので10数点)。

●狂歌本「狂歌国尽」(帆掛け船の挿絵。栄女筆。文化7(1810)を下らない時期。最も早い作画とも)⇒文化7年(1824)参照。

●肉筆画「月下砧打美人図」(紙本着色一幅。應為栄女筆。印應。113.4×31.3 天保後期から弘化年間の作か。東京国立博物館蔵)

※月明かりのもと、手拭いを被り赤い襷をした女が、砧を高く振り上げ、板に渡した衣を打っている。足元には白い衣が畳んである。跳ね上がった裸足の左足が印象的。

※本図の落款部分を削りながら途中で止めた跡があり、大久保純一は、新たに北斎の落款を入れて売り出そうとののではないかという(久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』p32で紹介)。同画題では北斎に「詩歌写真鏡 在原業平」がある。 1456 月下砧打美人図(東京国立博物館)



●肉筆画「^{としわらごうしききの}吉原格子先之図」（文政期～天保期〈1818～44〉。紙本着色一幅。無款。画中の三つの灯籠にそれぞれ「應」「為」「榮」の書き込みがある。26.3×39.4 太田記念美術館蔵）

※吉原の妓楼の格子からの顔見せの図。その前で中を覗く人たちを包むように光と影が描かれる。

※昭和4年（1929）4月、雑誌『浮世絵志』の口絵に掲載。その後昭和6年（1931）、『浮世絵画集』（浮世絵研究会・長島譲。大鳳閣書房）、昭和7年『浮世絵大家集成 北斎』（大鳳閣書房）、昭和8年（1933）『浮世絵概観』（井上和雄解説 大鳳閣書房）に掲載される。昭和21年（1946）、美術雑誌に掲載後所在不明となるも、昭和57年（1982）

2月、『肉筆浮世絵大七巻 北斎』（集英社）で、岡山県の旧家で戦乱を逃れていたのが再発見されたという報告がなされ、昭和59年（1984）、「肉筆浮世絵名作展 咲き薫る江戸の女性美」（朝日新聞社主催）で公開される。その後、太田記念美術館所蔵となる（以上、『北斎になりすました女 葛飾応為伝』檀乃歩也 講談社 p16～17

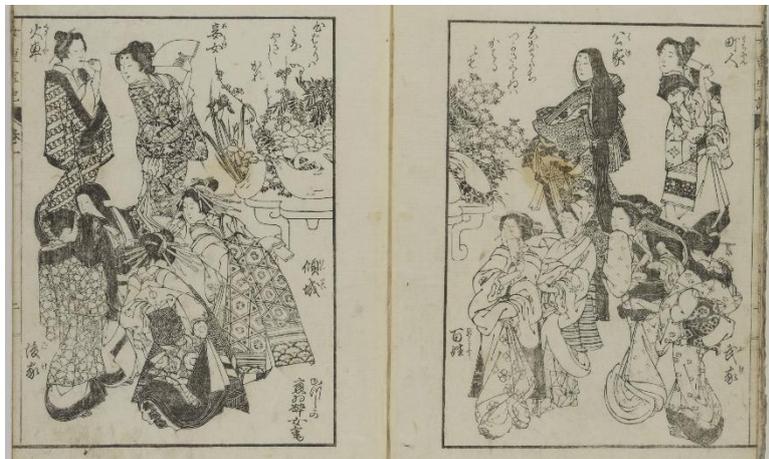


による）。1457 吉原格子先之図（太田記念美術館）

●教訓書『^{まいりにちよう おんなちようほうき}絵入日用 女重宝記』（墨摺一色。大本一冊。應為栄女画挿図。^{たかいらんざん}高井蘭山の

序文は文政12年（1829）だが刊行は弘化4（1847）。元禄5年（1692）刊のものを高井蘭山が文章を一部改め、應為が挿絵を新たに描く。大英博物館/太田記念美術館蔵）

※應為は版面本の挿絵を二冊だけ描いているが、そのうちの二冊。



1458 絵入日用女重宝記（大英博物館）

●茶道書『^{せんちやてびき たわら}煎茶手引の種』

1459 煎茶手引の種（早稲田大学図書館）



(嘉永元年。墨摺一色。須原屋新兵衛版。早稲田大学図書館蔵)

※唯二冊のみの版画本の挿絵⇒嘉永元年(1848)参照。

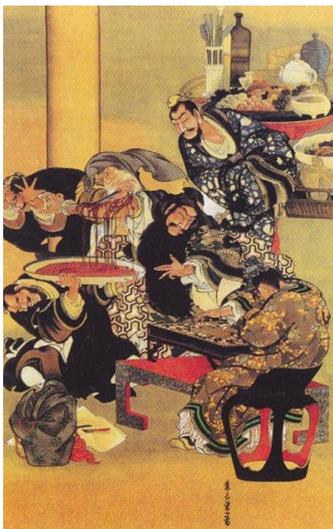
●肉筆画「^{さんききく ばんしょうず}三曲合奏図」(文政期～天保期
〈1818～44〉。絹本大判着色一幅。應み酔女。
印應み。46.5×67.5 ポストン美術館/オランダ国立民族学博物館・シーボルト・コレクション/イタリア・ジェノヴァ東洋美術館蔵)



1460 三曲合奏図 (ポストン美術館)

※^{こきょう}胡弓を弾く町娘、その前で黒い着物と赤い襦袢の遊女が背を向けて琴を弾く。裾には赤や青の蝶や蜘蛛の巣の絵柄。その脇で、表が青、裏が赤の^{じまぼん}襦袢を覗かせて三味線を弾く芸者。

●肉筆画「^{かんう かつう}関羽割臂図」(絹本着色一幅。應為栄女筆。印葛しか。右腕に毒矢を受け血を流しつつ馬良と暮を打つ関羽を医師の華陀が治療する三国志の場面に題材。140.2×68.2 クリーブランド美術館蔵)



※文政年間(1818～30) (『美術品所蔵レファレンス事典 日本絵画篇』2015 日外アソシエーツ) 説あるも、本稿では天保14年(1843)頃としている。

※『^{さんごくしえんぎ}三国志演義』の挿絵「^{かんうんちようかつこつりょうどく}関雲長刮骨療毒」では関羽が左肘に毒矢を受けているが、応為の作品では右肘になっている。

1461 関羽割臂図 (クリーブランド美術館)

※印の「葛しか」の形状は北斎84歳から85歳に用いられたものに似ている。あるいは北斎から譲られて用いたものか (久保田一洋編著『北斎娘 応為栄女集』藝華書院、p84)。なお、北斎にも関東大震災で焼失した

「^{かんう}関羽図」があっ

たという (同書 p28)。⇒天保14年(1843)参照。

●肉筆画「^{ひゃくご}百合図」「^{めいじん げ}美人下絵」(弘化2年
〈1845〉。絹本着色一面：應み栄女筆。印應。
^{はりまげ}貼交屏風一隻のうち。25.0×26.0 個人蔵・北斎館寄託)。

小布施に残された応為の唯一の作品。屏風に北斎の獅子図と共に貼交にしてある。「美人下絵」は書簡「^{えのぐ}絵具(生臙脂)製法指導状」にある「^{ほか おんな え}外ニ女絵の下タさし上申候」とある絵か。

462 百合図・美人下絵

(<http://lonpari2.blog.shinobi.jp> より)



●肉筆画「竹林遠見富士図」（「竹林の富士図」とも。絹本着色一幅。應為栄女筆。



印富士の形。104×32.6 高井鴻山記念館蔵

※『美術品所蔵レファレンス事典 日本絵画篇』（2015、日外アソシエーツ）では、江戸時代末の作で、北斎館蔵としている。

1463 竹林遠見富士図（高井鴻山記念館：town.obuse.nagano.jp より）

●肉筆画「蝶々二美人図」（文化中期〈1804～18〉絹本着色一幅。應為栄女筆。印壽。108.1×33.4 個人蔵）

●肉筆画「夜桜美人図」（弘化期～嘉永初年〈1845～49〉。無款。絹本着色一幅。88.8×34.5 メナード美術館蔵）「春夜美人」題で昭和7年、京都府美術館での「北斎翁建碑記念展覧会 第二回浮世絵総合大覧覧会」に出品された（『北斎娘 応為栄女集』（p33）。

※灯籠の明かりの前で、指を絡めるように筆を持ち、短冊に歌を書こうとしている女。松の木



の先の夜空には瞬く群星が描かれる。

※元禄時代の女流歌人・秋色女（生没年不詳）を描いたものという。秋色は十三歳のときに上野に花見に出かけ清水観音堂井戸の傍らの桜を見て「井のはたの 桜あぶなし 酒の酔」という句を詠み、この句が評判になり、その桜を秋色桜というようになったことを画題としている。そして、無款であるのは、北斎の作品として描いたものともいわれる。「酒の酔」の「酔」が「栄」を示しているので、応為の作であるとしている（久保田一洋編著『北斎娘 応為栄女集』p32）。

1464 夜桜美人図（メナード美術館）

●肉筆画「朝顔美人図」（絹本着色一幅。北斎娘辰女筆。印ふもとのさと。34.2×44.8 ロスアンゼルス・カウンティ美術館蔵）



※切り取った朝顔を投げ入れた水鉢が盆の上に置かれ、盆の端には歯磨き粉と房楊枝も置かれている。それを前にして、団扇を顔近くに寄せた黒い緞の着物に白地に花柄の襦袢の女が座って涼んでいる。

1465 朝顔美人図（ロスアンゼルス・カウンティ美術館：

<http://lonpari2.blog.shinobi.jp> より）

※この絵とほぼ同一構図の「朝顔美人図」が摘水軒記念文化振興財団にあり、落款はないが、画中の団扇に「辰」の文字があるという（久保田一洋編著『北斎娘・応為栄女集』による。鈴木由紀子『浮世絵の女たち』p192からの孫引）。

●書簡「小布施栗礼状」(23.0×30.0 個人蔵。年月日不明。破損され宛名不明。久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』より)

※十八屋の流れをくむ穀平味噌醸造所の、九代目当家に所蔵(千野塚子『江戸のジャーナリスト葛飾北斎』p146~147)。

「御書拝見致まいらせ候。いまた御目にかゝり不申候得共、ますく御機嫌よく御出遊し、御目出度存まいらせ候。左候得者、先月も御手紙下され候得共、私内ニ居不申、御返事もさし上不申、恐入まいらせ候。何れ来月中半に者帰り申上候。其節御手本上申へく候、先はいそき用事にて申上まいらせ候。早々

御めて度、小布施栗沢山有かたく存候。誠に筆も御座なく囃々、御読むつかしくと早々。〈ヤブレ〉様 三浦や栄 (読みやすくするため、改行し、句読点・ふりがなは筆者)

●書簡「絵具(生藤脂)製法指導状」(23.0×61.0 個人蔵。年月日不明。破損され宛名不明。久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』より)

「舌代 先々御機嫌よく御目出度存まいらせ候。日外者、何よりの品いたゞき有かたく存候。私も何かといそがしく候間、お手本者まつ一ちまい上申候。外ニ女絵の下下さし上申候。またく来月ハ沢山上申へく候間、今月者是にて、御かんにな可被下候。扱是よりハしやうゑんじの事申上まいらせ候。

一 先初めよくぐ、お■■■(ヤブレ)御先被成、あふら気の無キ様ニ被成候。而■■■■(ヤブレ/しやうゑんじ)をゆびの先にて、よくぐもみ■(ヤブレ/赤)キこなをことぐ、其よりつめ(爪)にて(絵)此様ニ被成、しやうゑんじを、此位イなら、水をさら(絵)此程斗りよく火にて、あたゝめ其中に入れて、わたの白く成ほよくぐしぼり、其より余程ぬかき(ぬるい)火ニかけ候得者、少々まはりか焼付かゝる所を皿をまわしなから、せんじつめ申候。段々つまるにしたがつて、火を遠くニ成、しまいに誠に少ニ成候得者、皿のあたゝまりにてまわしなから皿へ干付候。くれぐも火がつよくよつて、きうに被成候。とくろく相成候間、お気長に、御せんしニ被成可候。ゑの油にて合の中へなまりを大キサ(絵・丸)此位のでつぼう玉をこまかにけづり、六十日程、土中へうづめ置申候。注つかい様ハ中々筆談にてハ長く斗り成候て、わかり不申候。先御たづねゆへ申上まいらせ候。あらあら かしく

〈ヤブレ〉様 中嶋屋 栄 (読みやすくするため、改行し、句読点・ふりがなは筆者による)

注) 此位のでつぼう玉をこまかにけづり、六十日程、土中へうづめ置申候。: この一節は北斎の『画本彩色通初編』(嘉永元年: 1848)「絵具の製法」に同様の記述がある。

【以下、制作に関わったと思われる作品】

※シーボルト・コレクション (p 522~) 参照。

- 「武家」(広義の北斎作。和紙。フランス国立図書館蔵)
- 「町屋の娘」(広義の北斎作。和紙。フランス国立図書館蔵)

- 「^{かぐら}神楽^{まじり}巫女」(広義の北斎作。二代戴斗説あり。和紙。フランス国立図書館蔵)
- 「^{せつご}節句^{しょうか}の商家」(広義の北斎作。お栄との共作説あり。ライデン国立民族学博物館蔵・シーボルト・コレクション)
- 「^{しゅつ}初夏^{はまづ}の浜辺」(オランダ・ライデン国立民族学博物館蔵)
- 「^{てのり}手踊^り図」(北斎為一筆。所在不明。講談社『肉筆浮世絵 下巻』国立国会図書館蔵)
(鈴木由紀子『浮世絵の女たち』幻冬舎・P199による)

【葛飾北斎末裔】

※内藤正人「北斎の裔—幕臣白井家の系譜と、その遺品」〈2019年『浮世絵芸術』177巻 p15～25〉を参照した。

前妻の子 長男：富之助

長女：美与

二女：鉄

後妻ことの子 二男：多吉郎（本郷竹町の商人：勘助に養育され、後、加瀬家の養子となり、崎十郎と名のる）

三女：栄

四女：猶

以下：加瀬家

多吉郎（崎十郎 文化7生 万延 1/5/9 没 51 千駄ヶ谷：慈光寺 樹誓院积得寿居士）
=きの（多吉郎の妻。嘉永 4/9/29 没 48）

子：多知（明治 19/4/14 没 56 諡号：鏡心院）=白井久之助（幕臣、白井家 12 代当主、京都見廻：組並・40 俵 明治 10/8/9 没 53）

子：弥次郎（慶応 2/9/16 没 26）以後、加瀬家途絶えたため、姉の多知の子：昶次郎が養子に入る。

以下：白井家

多知の長男：孝義（陸軍軍人、日露戦争従軍。昭和 3/12 没 78）=先妻：道子 後妻：あい

孝義・道子の子：長男・白井尚一

二男・哲（加瀬昶次郎家に養子に入る。明治 41 没 30）

あいの子：義三（北斎より 5 代目。明治 33 年生。軍需省軍需管理官：昭和 19 年退官。日本石灰株式会社理事、昭和 31/9 没）=三枝子（明治 41 生。仏英和高等学校：現白百合女子大卒。専売局長石井淳二郎三女）

義三・三枝子の子 正三

玲子

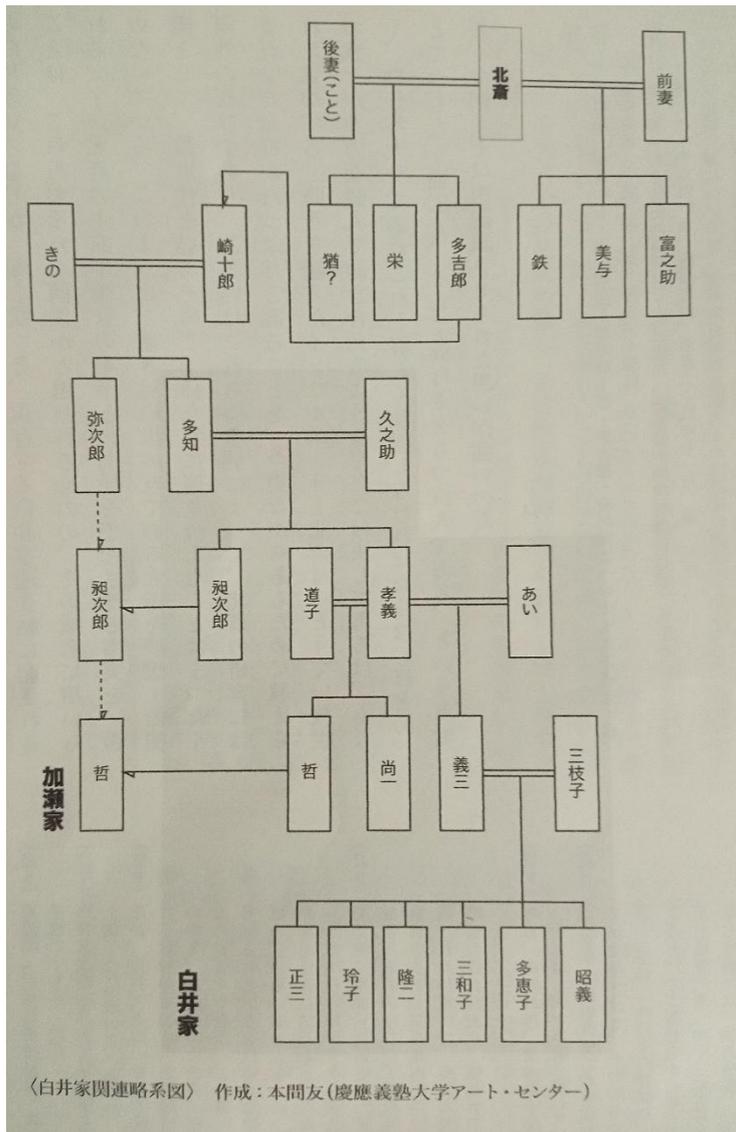
隆二

三和子

多恵子

昭義

孫：由紀子（北斎から 7 代目）



「白井家関連略系図」作成：本間友
 (慶應義塾大学アートセンター)「北斎の裔」
 p 24 より転載

【参考】

【北斎と中嶋家】

「過去帳において加瀬家養子：昶治郎の月命日に記載されている情報である。

『十三代孝義母方祖父加瀬崎十郎実父 葛飾北斎浮世絵画師画狂老人 己酉四月十八日寿九十歳浅草区 永住町四十四 五ノ内誓教寺川村姓』

明治期に白井義孝が飯島虚心にらに語ったとする、先祖北川村家より中嶋家に養子に入ったという伝聞は、おそらくはこの部分の記載と一致するものといえる。この問題に関しては、御用鏡師中嶋家関連資料を踏まえた近年の考察によって、北斎が御用鏡師中嶋家二代目の長男ながら廃嫡

された人物をその父親とする可能性が高いこと、中嶋家三代目を元文四年に継いだのは北斎の叔父金吉であること、さらに後年その叔父の養子として、今度は北斎長男の富之助が中嶋家四代目を享和四年に継いだことなどが紹介、報告され、一応の解決をみている注」

(注：岸文和「北斎伝記の再検討—新出資料『御鏡師中嶋伊勢御目見願』を手がかりに」『美術フォーラム 21』34、醍醐書房、平成 28 年 11 月、86-96 頁)

【白井家の思い】

「先祖は北斎だと聞いてはいたものの、しかしながらその絵がねえ・・・」というニュアンスであったと聞いている。つまりは、春画をも含む俗世の産物である浮世絵というものの近代における城下が非常に低く、高位の職業軍人や官吏を輩出した白井家では、先祖に浮世絵師北斎がいる、という事実がむしろ後ろめたい事実として、暗然のタブーであったという、誠に興味深いお話をうかがうことになったのである (p 18)。

【版型】

錦絵のサイズの平均は以下の通りである(単位はセンチ。縦×横)。

丈長奉書 約 72×約 53

大広奉書 約 58×約 44

大奉書(大々判) 約 39×約 53

中奉書 約 36×約 50

小奉書 約 33×約 47

長大判(長絵判) 丈長奉書を横にして縦3分の1にしたサイズ。約 72×26.5。「詩歌写真鏡」のサイズ。

大判 大奉書の縦2つ切り。39×26.5(実際には縦35.0~39.0、横21.5~26.5の範囲。B4判〈36.4×25.7〉に近い大きさ)。横大判は「富嶽三十六景」「諸国名橋奇覧」等のサイズ。

中判 大奉書の4分の1。大判の横2つ切り。19.5×26.5(実際には縦14.0~19.0、横20.0~26.0の範囲。B5判〈18.2×25.7〉に近い大きさ)。「百物語」のサイズ。

小判 大奉書の8分の1。大判の4分の1。19.5×13(実際には縦16.5~19.5、横12.0~13.2の範囲で、横小判として摺物に多く使われる。写真の2L判〈18.0×13.0〉に近い大きさ)

間判 小奉書の縦2つ切り。33×23.5

大短冊判 大奉書の縦3つ切り。39×18

中短冊判 大奉書の縦4つ切り。39×13

小短冊判 大奉書の縦6つ切り。39×9

色紙判 大奉書の6分の1。厚手の紙。20.5×18.5

長判 大奉書の横2つ切り。19.5×53.5

掛物絵 大判の縦2枚つなぎ。78×26.5

柱絵 1、小奉書の縦3つ切り。72~77×17

2、大奉書の縦4つ切り。72~77×13

細判 小奉書の縦3つ切り。33×15。春朗期の役者絵のサイズ。

九切判 大奉書の9分の1。横3分の1を縦3分の1に切断したサイズ。縦8.83×横13.0。宗理期から北斎期の摺物に多い。

十二切判 大奉書約(39×約53)の12分の1。横大奉書2分の1(大判。39×26.5。実際には縦35.0~39.0、横21.5~26.5の範囲。B4判〈36.4×25.7〉に近い大きさ)にし、大判を横2分の1にし、更に縦三等分したサイズ。

続絵 同じ大きさの紙を並べて大画面にしたもの。一枚ずつが独立した絵をつなぐので、それぞれバラ売りにされた。

【北斎作品を所蔵する美術館等】

- ・ 出光美術館（〒100-0005 東京都千代田区丸の内 3-1-1 帝劇ビル 9 階 TEL:03-5777-8600)
- ・ 浦上蒼穹堂（〒103-0027 東京都中央区日本橋 3-6-9 箔屋町ビル 3 階 TEL:03-3271-3931)
- ・ 浦添市美術館（〒901-2103 沖縄県浦添市仲間 1-9-2 TEL:098-879-3219)
- ・ 大分県立美術館（〒870-0036 大分県大分市寿町 2-1 097-533-4500)
- ・ 大阪市立美術館（〒543-0063 大阪府大阪市天王寺区茶臼山町 1-82 TEL:06-6771-4874)
- ・ 大阪府立中島之図書館（〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島 1-2-10 TEL:06-6203-0474)
- ・ 太田記念美術館（〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 1-10-10 TEL:03-5777-8600)
- ・ 大田区郷土博物館（〒143-0025 東京都大田区南馬込 5-11-13 TEL:03-3777-1070)
- ・ 大田区立龍子記念館（〒143-0024 東京都大田区中央 4-2-1 TEL:03-3772-0680)
- ・ 岡田美術館（〒250-0406 神奈川県足柄下郡箱根町小涌谷 493-1 TEL:0460-87-3931)
- ・ 神奈川県立金沢文庫（〒236-0015 神奈川県横浜市金沢区金沢町 142 電話:045-701-9069)
- ・ 神奈川県立歴史博物館（〒236-0006 神奈川県横浜市中区南仲通 5-60 TEL:045-201-0926)
- ・ 鎌倉国宝館・氏家浮世絵コレクション（〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下 2-1-1 [鶴岡八幡宮境内] TEL:0467-22-0753)
- ・ 岩松院（〒381-0211 長野県上高井郡小布施町雁田 TEL:026-247-5504)
- ・ 木更津市郷土博物館金のすず(旧千葉県立上総博物館) 〒294-0044 千葉県木更津市太田 2-16-2 TEL:0438-23-0011)
- ・ 北九州市立美術館（〒804-0024 福岡県北九州市戸畑区西鞆ヶ谷町 21-1 TEL:093-882-7777)
- ・ 宮内庁三の丸尚蔵館（〒100-8111 東京都千代田区千代田 1-1 TEL:03-3213-1111)
- ・ 熊本県立美術館(〒860-0008 熊本市中央区二の丸 2 TEL:096-352-2111)
- ・ 群馬県立歴史博物館(〒370-1293 群馬県高崎市綿貫町 992-1 TEL:027-346-5522)
- ・ 香雪美術館（〒658-0048 兵庫県神戸市東灘区御影郡家 2-12-1 TEL:078-841-0652)
- ・ 高知県立高知城歴史博物館（〒780-0842 高知県高知市追手筋 2-7-5 TEL:088-871-1600)
- ・ 神戸市立博物館（〒650-0034 神戸市中央区京町 24 TEL:078-391-0035)
- ・ 神戸市立博物館南蛮美術館（〒650-0034 兵庫県神戸市京町 24 TEL:078-391-0035)

- ・国文学研究資料館（〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3 TEL:050-5533-2900）
- ・国立国会図書館（〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1 TEL: 03-3581-2331）
- ・五島美術館：大東急記念文庫（〒158-0093 東京都世田谷区上野毛 3-9-25TEL:03-3761-0661）
- ・埼玉県立熊谷図書館（〒360-0014 埼玉県熊谷市箱田 5-6-1 TEL: 048-523-6291）
- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館（〒330-0803 埼玉県さいたま市大宮区高鼻町 4-219 TEL: 048-645-8171）
- ・嵯峨嵐山日本美術研究所（〒615-0057 京都府京都市右京区西院東貝川町 31 西院ビル 5 階 TEL : 075-313-6704）
- ・佐野美術館（〒411-0838 静岡県三島市中田町 1-43 TEL:055-975-7278）
- ・静岡県立中央図書館（〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田 53-1 TEL: 054-262-1242）
- ・品川区品川歴史館（〒140-0014 東京都品川区大井 6-11-1 TEL: 03-3777-4060）
- ・島根県立美術館（〒690-0049 島根県松江市袖師町 1-5 TEL : 0852-55-4700）
- ・城西大学水田美術館（〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台 1-1 TEL : 049-271-7327）
- ・承天閣美術館（旧萬野美術館 2004 年閉館。〒602-0898 京都府京都市上京区今出川通 烏丸東入相国寺門前町 701 相国寺 TEL:075-241-0423）
- ・常楽寺美術館（〒386-1431 長野県上田市別所温泉 2347 TEL : 0268-38-2040）
- ・すみだ北斎美術館（〒130-0014 東京都墨田区亀沢 2-7-2 TEL : 03-5777-8600）
- ・清安山板橋不動尊（〒300-2307 茨城県つくばみらい市板橋 2370-1 TEL: 0297-58-1014）
- ・静嘉堂文庫美術館（〒157-0076 東京都世田谷区岡本 2-23-1 TEL : 03-5777-8600）
- ・誓教寺（〒111-0041 東京都台東区元浅草 4-6-9 TEL: 03-3841-5631）
- ・晴明会館（〒813-0001 福岡県福岡市東区唐原 6-7-1 TEL: 092-661-1535）
- ・大東急記念文庫五島美術館（〒158-8510 東京都世田谷区岡本 2-23-1 TEL:03-5777-8600）
- ・高橋コレクション（〒144-0052 東京都大田区蒲田 4-29-11 TEL:03-3739-7184）
- ・千葉市美術館（〒260-8733 千葉県千葉市中央 3-10-8 TEL:043-221-2311）
- ・津山市立津山郷土博物館（〒708-0022 岡山県津山市山下 92 TEL:0868-22-4568）
- ・摘水軒記念文化振興財団（〒277-0005 千葉県柏市柏 4-5-3 TEL:04-7167-6153）
- ・天童市美術館（〒994-0013 山形県天童市老野森 1-2-2 TEL : 023-654-6300）
- ・東京芸術大学美術館（〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8 TEL : 050-5525-2200）
- ・東京国立博物館（〒110-8712 東京都台東区上野公園 13-9 TEL:03-5777-8600）
- ・東京都江戸東京博物館（〒130-0015 東京都墨田区横網 1-4-1 TEL : 03-3626-9974）
- ・東京都立中央図書館加賀文庫（106-8575 港区南麻布 5-7-13 TEL:03-3442-8451(代)）

- ・東京富士美術館（〒192-0016 東京都八王子市谷野町 492-1 TEL：042-691-4511）
- ・東京文化財研究所（〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 東京国立博物館内 TEL：03-3823-2241）
- ・東洋文庫ミュージアム（〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-21 TEL：03-3942-0280）
- ・たばこと塩の博物館（〒130-0003 東京都墨田区横川 1-16-3 TEL：03-3622-8801）
- ・長泉院（〒369-1802 埼玉県秩父市荒川上田野 557 TEL：0494-540-1106）
- ・出羽桜美術館（〒994-0044 山形県天童市一日町 1-4-1 TEL：023-654-5050）
- ・東北大学附属図書館：川内キャンパス（〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 TEL：022-717-7800）
- ・名古屋市博物館（住所：〒192-0016 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂 1-27-1 TEL：052-853-2655）
- ・名古屋市美術館（〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄 2-17-25（芸術と科学の杜・白川公園内） TEL：052-212-0001）
- ・名古屋市蓬佐文庫（〒461-0023 愛知県名古屋市徳川町 1001 TEL：052-935-2173）
- ・名古屋テレビ浮世絵美術館（〒460-8311 愛知県名古屋市中区橋 2-10-1 TEL：052-331-8111）
- ・奈良県立美術館（〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 10-6 TEL：0742-22-7032）
- ・西新井大師總持寺（〒123-0841 東京都足立区西新井 1-15-1 TEL：03-3890-2345）
- ・日本浮世絵博物館・酒井コレクション（〒390-0852 長野県松本市 大字島立 字新切 2206-1）
- ・八戸市図書館（〒031-0022 青森県八戸市糠塚字下道 2-1 TEL：0178-22-0266）
- ・林原美術館（〒700-0823 岡山市北区丸の内 2-7-15 TEL：086-223-1733）
- ・光ミュージアム（〒506-0051 岐阜県高山市中山町 175 TEL：0577-34-6511）
- ・弘前市立博物館（〒036-8356 青森県弘前市下白銀町 1-6 TEL：0172-35-0700）
- ・福井県立美術館（〒910-0017 福井県福井市文京 3-16-1 TEL：0776-25-0451）
- ・藤沢市教育委員会（〒251-8601 神奈川県藤沢市朝日町 1-1 TEL：0466-25-1111）
- ・北斎館（〒381-0201 長野県上高井郡小布施町大字小布施 485 TEL：026-247-5206）
- ・房総浮世絵博物館（〒297-0222 千葉県長生郡長柄町大庭 172 TEL：0475-35-2001）
- ・細見美術館（京都府京都市左京区岡崎最勝寺町 6-3 TEL：075-752-5555）
- ・本間美術館（〒998-0024 山形県酒田市御成町 7-7 TEL：0234-24-4311）
- ・MOA 美術館（〒413-0006 静岡県熱海市桃山町 26-2 TEL：0557-84-2511）
- ・町田市立国際版画美術館（〒194-0013 東京都町田市原町田 4-28-1 TEL：042-726-2771・0860・2889）
- ・三井記念美術館（〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 2-1-1 三井本館 TEL：03-5777-8600）

- ・六町ミュージアムフォローラ (〒121-0073 東京都足立区六町 2-5-35 TEL : 03-3885-7333)
- ・メナード美術館 (〒485-0041 愛知県小牧市小牧 5-250 TEL : 0568-75-5787)
- ・茂木本家美術館 (〒278-0037 千葉県野田市野田 242 TEL : 04-7120-1011)
- ・山口県立萩美術館浦上記念館 (〒758-0074 山口県萩市平安古町 586-1 TEL:0838-24-2400)
- ・山種美術館 (〒150-0012 東京都渋谷区広尾 3-12-36 TEL:03-5777-8600)
- ・洛東遺芳館 (京都市東山区問屋町通五条下ル三丁目西橋町 472 TEL:075-561-1045)
- ・立命館大学図書館 (〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 56-1 : TEL: 075-465-8144)
- ・早稲田大学図書館 (〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 TEL : 03-3203-5581)
- ・ウースター美術館 (米国・ボストン Worcester Art Museum : 55 Salisbury St, Worcester, MA 01609-3196 : 55 Salisbury Street, Worcester, MA 01609 : (+1) 508-799-4406)
- ・オーストリア国立工芸美術館 (Museum für angewandte Kunst : Stubenring 5, 1010 Wien,)
- ・オーバリン大学 アレン・メモリアル美術館 : メアリー・エインズワース・コレクション (米国オハイオ州オーバリン : Allen Memorial Art Museum 87 N Main St, Oberlin College, Oberlin, OH 44074-1161)
- ・オンタリオ美術館 (カナダ・トロント : Art of Ontario: 317 Dundas St W, Toronto, ON M5T1G4:(416)923-1171)
- ・ギメ東洋美術館 (フランス・パリ : Guimet Museum 6, place d'Iéna 75116 Paris : +33 (0) 1-56-52-53-00)
- ・クラクフ国立美術館 (ポーランド・クラクフ : Muzeum Narodowe w Krakowie : al. 3 Maja 1, : +48 12 433 55 00)
- ・ケルン東洋美術館 (ドイツ・ケルン : Museum für Ostasiatische Kunst Köln : Universitätsstraße 100, 50674 Köln, : +49 221 22128608)
- ・シカゴ美術館 (米国イリノイ州シカゴ : The Art Institute of Chicago : 111 S Michigan Ave 159 East Monroe Street, IL : +1 312-443-3600)
- ・スミソニアン協会フリーア美術館 (米国・ワシントン DC : Freer Gallery of Art : 1050 Independence Ave SW, Washington, DC 20560 : +1 202-633-1000)
- ・スミソニアン協会アーサー・サックラー美術館 (米国ワシントン DC : 1050 Independence Ave SW, Washington, DC 20560 : +1 202-633-1000)
- ・大英博物館 (英国・ロンドン : British Museum : Great Russell St, Bloomsbury, London WC1B 3DG : +44 20 7323 8299 : 1-617-495-9400)

- ・ハーバードアーサー・サックラー美術館 (米国マサチューセッツ州ボストン : Harvard University Art Museums : 32 Quincy St., Cambridge, MA 02138 : 1-617-495-9400)
- ・ハーバードフォッグ美術館 (米国・マサチューセッツ州ボストン : Harvard University Art Museums : 32 Quincy Street, Cambridge, MA 02138)
- ・ヴィクトリア&アルバート博物館 (英国・ロンドン : Victoria and Albert Museum : Cromwell Road London SW7 2RL : +44 (0) 870 906 3883)
- ・プーシキン美術館 (露国・モスクワ : Pushkin State Museum of Fine Arts : 12, Volkhonka Street, Moscow : +7 (495) 609-95-20)
- ・フランス国立図書館 (仏国・パリ : Quai François-Mauriac 75013 Paris : +33 (0) 1 53 79 59 59)
- ・ベルギー王立美術館 (ベルギー・ブリュッセル : Musées royaux des beaux-arts de Belgique : Rue de la Régence Place Royale 1, : +32 2 508 32 11)
- ・ベルリン国立アジア美術館 (前ベルリン東洋美術館 : 独国・ベルリン : Museum für Ostasiatische Kunst : Lansstraße 8, 14195 Berlin, : +49 30 266424242)
- ・ホノルル・アカデミー・オブ・アーツ (米国ハワイ : Honolulu Academy of Arts : 900 S. Beretania St., Honolulu, HI 96813 : (808)532-8700)
- ・メトロポリタン美術館 (米国・ニューヨーク : The Metropolitan Museum of Art : 1000 Fifth Avenue at 82nd Street, NYC : (212) 535-7710)
- ・オランダ国立民族学博物館 (オランダ・ライデン : Rijksmuseum Volkenkunde : Steenstraat 1 : +31 71 516 8800)
- ・ロスアンゼルス・カウンティ美術館 (米国・ロスアンゼルス : Los Angeles County Museum of Art 5905 Wilshire Blvd, Los Angeles, CA 90036 : +1 323-857-6000)
- ・ワルシャワ民族博物館 (ポーランド・ワルシャワ : Ethnographic Museum Warsaw : 1 Kredytowa street, 00-056 Warsaw)